

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第226集

IKI MATU DAI
生 松 台

— 西区野方土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の調査 —

HIRO ISI
広石遺跡群C地点・広石古墳群VI群

広石遺跡群D地点・広石古墳群VII群

NA KIRI DANI
名切谷遺跡

KASA MA DANI
笠間谷古墳群

NO KATA
野方古墳群D群

O OTO
大音遺跡

1 9 9 0

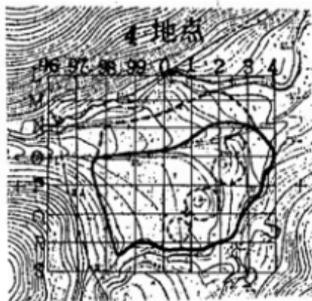
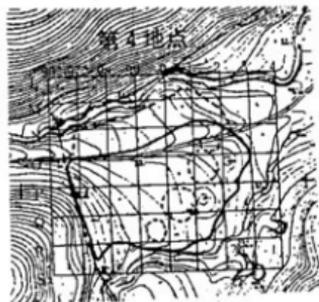
福岡市教育委員会

生松台 正誤表 No.1

箇所	誤	正
例言 14行目 図版目次 PL.10 (8)	宮井 善郎 SX 54 (北05)	宮井 善朗 SX 32 (東05)
校 P7 23行目	21 棟	22 棟
" 24行目	86 基	98 基
" 25行目	30 基	34 基
" 26行目	7 基	9 基
P10 16行目	... 139 ...	削除
"	... (255) 17, C 717 (255) 17, B' 717' (179. 208) 27. C 717' ... 25 ~ 28 = SC 52 29 = SC 257 30 ~ 32 = SC 91 33 ~ 35 = SC 77 36 ~ 43 = SC 139
P13 欄外		
P14 14行目	... 87. 11期 87. 51. 61. 11期 ...
15行目	... 49 ...	削除
17行目	... 235. 37 88. 30 ...
"	... 186 ...	削除
18行目	226 ... 4 ... 263 ...	"
19行目	... 23)	"
20行目	... 63. 157	... 63. 157. 164.
"	... 25. 37.	... 25. 37. 45,
22行目	14基 1968g	13基 1951g
25行目	43.64g 26.9% 8遺構 52g	43.47g 26.6.4% 9遺構 545g
26行目	8.3%	8.3%
27行目	2基 (63.15)	5基 (63.15. 93. 164. 192)
"	5基	15基

生松台正誤表 No.2

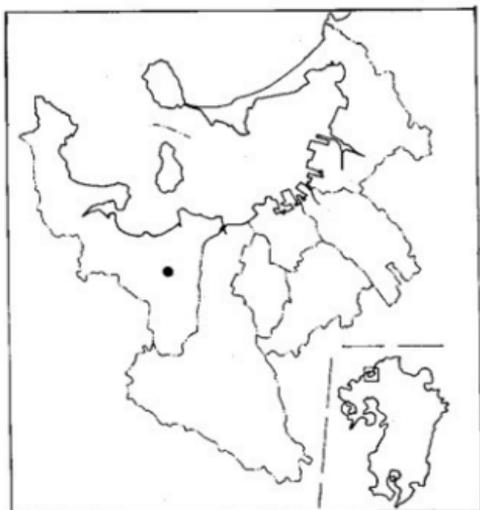
箇所	誤	正
P17 1行目	...32.254)	...32.254.23.25.30.45.88
"	3基(22.18.24)	95.162.205.224.256) 5基(22.24.40.57.59)
12~13行目	鉄率製造器比較	削除
13行目	44~42	44~47
P19. 2行目	南東	南西
14行目	SB71.70...	SB69.71.70...
P20 1行目	SB72.98	SB76.265
2行目	69.74.75.76.81.99	74.75.81.98.99
P22 14行目	鉄はくは	製鉄はくは
P23 1行目	4364号	4347号
2行目	4遺構...15基	8遺構...21基
P29 1行目	29基...7基	33基...9基
PL10 (8)	SX54 (北の方)	SX32 (東の方)
付図1.		



IKI MATU DAI
生 松 台

— 西区野方土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第226集



1990

福岡市教育委員会

序

現在、九州の中核都市として発展をつづける福岡都市圏人口は、増加の一途をたどっています。そして、これにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、やむなく失われていく遺跡の発掘調査を行なっています。

本書もそうしたなかのひとつで、西区野方地区区画整理事業に伴って発掘調査を実施した広石遺跡群他の調査報告を収録したものであります。

調査の結果、おもに縄文時代から奈良時代にかけての重要な遺跡であることが確認されました。

調査に際しご協力をいただいた関係者各位、また地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝する次第であります。

平成2年3月

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例 言

1. 本書は福岡市生松台土地区画整理組合が実施した西区野方の土地区画整理事業（生松台団地）にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が昭和62年～63年に実施した広石遺跡群C地点・広石古墳群VI群（第1地点）、広石遺跡群D地点・広石古墳群VII群（第2地点）、名切谷遺跡（第3地点）、笠間谷古墳群（第4地点）、野方古墳群D群（第5地点）、大音遺跡（第6地点）の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は国土地理院座標第2系による座標北で、磁北はこれに6°2′西偏する。
3. 調査区内のグリッド名称は10m方眼線の西北交点とした。
4. 遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址→SC、掘立柱建物→SB、土壇→SK、溝→SD、ピット→SP、石棺→SQ、甕棺→ST、炉→SH、登窯→SI、その他→SXとし遺構番号は記号のあとに順番に続けた。
5. 本書に使用した実測図の作成は、池崎讀二、山崎龍雄、下村 智、加藤良彦、荒牧宏行、宮井善郎、長家 伸、大内士郎、平川敬治、大橋隆司、黒田和生、英 豪之、溝口武司、大嶺佳之、土斐崎順子、汐崎美紀、岡根直美、西川 徹、西田 巖、五島昌浩による。
6. 製図は山崎・下村・加藤・宮井・長家・平川・岡根による。
7. 本書で用いた写真は池崎、山崎、下村、加藤による。
8. 本書の執筆編集は第1～第5地点を下村・加藤が、第6地点を山崎が行なった。
9. 本書にかかわる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に到る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 調査区の立地と環境	3
III. 調査の記録	5
1. 広石遺跡群C地点・広石古墳群VI群(第1地点)	5
2. 広石遺跡群D地点・広石古墳群VII群(第2地点)	45
3. 名切谷遺跡(第3地点)	55
4. 笠間谷古墳群(第4地点)	61
5. 野方古墳群D群(第5地点)	71
6. 大音遺跡(第6地点)	79

第1地点 挿図目次

Fig.1 調査区位置図(1/50000)	4	Fig.2 調査地点位置図(1/5000)	折込1
Fig.3 I区横断土層断面図(1/100)	折込2	Fig.4 縄文時代遺構分布図(1/2300)	折込2
Fig.5 古墳時代遺構分布図1(1/2300)	折込2	Fig.6 古墳時代遺構分布図2(1/2300)	折込2
Fig.7 奈良時代遺構分布図(1/2300)	折込2	Fig.8 中世・近世遺物実測図(1/3)	折込2
Fig.9 SK142実測図(1/40)	8	Fig.10 SK147実測図(1/40)	8
Fig.11 縄文時代遺物実測図(1/3, 1/2)	9	Fig.12 SC257実測図(1/60)	10
Fig.13 SC52実測図(1/60)	11	Fig.14 SC091実測図(1/60)	11
Fig.15 SC168実測図(1/60)	11	Fig.16 SC152実測図(1/60)	12
Fig.17 SC139実測図(1/60)	12	Fig.18 SC077実測図(1/60)	12
Fig.19 SC出土遺物実測図(1/4)	13	Fig.20 SK015実測図(1/60)	14
Fig.21 SK019実測図(1/60)	14	Fig.22 SK049実測図(1/60)	15
Fig.23 SK192実測図(1/60)	15	Fig.24 SK167実測図(1/60)	15
Fig.25 SK出土遺物実測図(1/4)	16	Fig.26 SQ218実測図(1/30)	17
Fig.27 SQ006実測図(1/30)	17	Fig.28 ST274実測図(1/20)	17
Fig.29 SB073実測図(1/100)	18	Fig.30 SB072実測図(1/100)	18
Fig.31 SB070実測図(1/100)	19	Fig.32 SB071実測図(1/100)	19
Fig.33 SB074実測図(1/100)	19	Fig.34 SB110実測図(1/100)	19
Fig.35 SB200実測図(1/100)	20	Fig.36 SB265実測図(1/100)	21
Fig.37 SB206実測図(1/100)	21	Fig.38 SB081実測図(1/100)	21

Fig.39	SB099 実測図 (1/100)	21	Fig.40	SB201 実測図 (1/100)	22
Fig.41	SB202 実測図 (1/100)	22	Fig.42	客土部出土遺物実測図 (1/4)	23
Fig.43	SK004 実測図 (1/30)	24	Fig.44	SK113 実測図 (1/30)	24
Fig.45	SK116 実測図 (1/30)	24	Fig.46	SX135 実測図 (1/20)	25
Fig.47	SK001 実測図 (1/30)	26	Fig.48	SX7 実測図 (1/40)	26
Fig.49	SI003 実測図 (1/40)	27	Fig.50	奈良時代遺構出土遺物実測図 (1/4~1/2)	28
Fig.51	広石古墳群第VI群1号墳現況測量図 (1/300)	30	Fig.52	広石古墳群第VI群2号~5号墳現況測量図 (1/300)	30
Fig.53	広石古墳群第VI群1号墳墳丘測量図 (1/300)	31	Fig.54	広石古墳群第VI群2号~5号墳墳丘測量図 (1/300)	31
Fig.55	1号墳墳丘外濠列石出土状況図 (1/100)	32	Fig.56	1号墳周溝出土遺物実測図 (1/4)	32
Fig.57	1号墳石室、周溝出土状況及び土層断面実測図 (1/60)	33	Fig.58	2号墳石室及び③の土層断面実測図 (1/60)	折込3
Fig.59	2号墳石室土層断面、墳丘外濠列石、供養土層出土状況実測図 (1/20, 1/60, 1/100)	折込4	Fig.60	2号墳出土遺物実測図 (1/4, 2/3)	35
Fig.61	3号墳墳丘及び外濠列石出土状況実測図 (1/100)	37	Fig.62	3号墳出土遺物実測図1 (2/3)	38
Fig.63	3号墳石室及び墳丘土層断面図 (1/60)	折込5	Fig.64	3号墳出土遺物実測図2 (1/4)	39
Fig.65	4号墳墳丘及び外濠列石実測図 (1/100)	40	Fig.66	4号墳石室及び土層断面実測図 (1/60)	折込6
Fig.67	4号墳出土遺物実測図 (1/4)	41	Fig.68	5号墳石室及び墳丘土層断面図 (1/60)	42
Fig.69	5号墳出土遺物実測図 (1/4)	42			

第2地点 挿図目次

Fig.1	SH20 実測図 (1/20)	45	Fig.2	SK38 実測図 (1/40)	45
Fig.3	遺構全体図 (1/300)	46	Fig.4	SC28 実測図 (1/60)	47
Fig.5	SC50 実測図 (1/60)	47	Fig.6	SC52 実測図 (1/60)	48
Fig.7	SB64 実測図 (1/100)	49	Fig.8	SB68 実測図 (1/100)	49
Fig.9	SB66 実測図 (1/100)	49	Fig.10	SB67 実測図 (1/100)	49
Fig.11	SB65 実測図 (1/100)	49	Fig.12	SK10 実測図 (1/30)	50
Fig.13	SK01 実測図 (1/30)	50	Fig.14	ST03 実測図 (1/20)	50
Fig.15	ST03 実測図 (1/6)	50	Fig.16	SK13 実測図 (1/30)	51
Fig.17	SK30 実測図 (1/30)	51	Fig.18	VII群1号墳実測図 (1/60)	52
Fig.19	出土遺物実測図 (1/4)	54			

第3地点 挿図目次

Fig.1	SH9 実測図 (1/30)	57	Fig.2	遺構全体図 (1/300)	58
Fig.3	SH-1 実測図 (1/80)	59	Fig.4	SK-3 実測図 (1/30)	59
Fig.5	SK08 実測図 (1/20)	59	Fig.6	出土遺物実測図 (1/4)	60

第4地点 挿図目次

Fig.1	笠間谷古墳群遺構配置図 (1/300)	64	Fig.2	1号墳石室及び墳丘土層断面実測図 (1/60)	折込7
-------	---------------------	----	-------	-------------------------	-----

Fig.3	1号墳外護列石実測図 (1/60) …折込8	Fig.4	1号墳出土遺物実測図 (1/4) ……65
Fig.5	2号墳出土遺物実測図 (1/4) ……66	Fig.6	2号墳石室及び墳丘土層断面実測図 (1/60) …折込9
Fig.7	3号墳石室実測図 (1/60) ……67	Fig.8	4号墳出土遺物実測図 (1/4) ……68
Fig.9	4号墳石室実測図 (1/60) ……68	Fig.10	SD-01 土層断面図 (1/40) ……69
Fig.11	SK-05 実測図 (1/40) ……69	Fig.12	SK-10 実測図 (1/30) ……69
Fig.13	出土遺物実測図 (1/3、1/1) ……70		

第5地点 挿図目次

Fig.1	野方古墳群D群墳丘出土状況図 (1/300) 73	Fig.2	1号墳出土玉類実測図 (1/2) ……74
Fig.3	1号墳石室及び墳丘土層断面実測図 (1/60) 折込10	Fig.4	1号墳外護列石実測図 (1/60) ……折込11
Fig.5	1号墳出土遺物実測図 (1/4) ……75	Fig.6	2号墳石室実測図 (1/60) ……76
Fig.7	2号墳外護列石及び土層断面実測図 (1/60) 折込12	Fig.8	2号墳出土遺物実測図 (1/4) ……77
Fig.9	調査区出土土壌実測図 (1/40) ……78	Fig.10	SK09 土壌出土遺物実測図 (1/4) ……78

第6地点 挿図目次

Fig.1	第6地点遺構配置図 (1/250) ……80	Fig.2	SK01~04・06・1号土器群 (1/30) ……82
Fig.3	第6地点出土遺物 (1/4) ……84		

図版目次

PL.1	(1)1区全景 (南東から)	(2)5区全景 (南から)		
PL.2	(1)4区全景 (南から)	(2)3区全景 (南東から)		
PL.3	(1)1区全景 (北東から)	(2)SK142 (南から)	(3)SC90(下)・91(上)・92(右) (南東から)	
	(4)SC52 (南東から)	(5)SC152 (上)・153 (下) (南東から)	(6)SC168 (東から)	
PL.4	(1)SC77 (南東から)	(2)SC34 竈 (南から)	(3)SK167 (東から)	
	(4)SQ218 (北から)	(5)ST274 (南東から)	(6)SB73 (北東から)	
PL.5	(1)SB73 (南東から)	(2)SB71 (上)・72 (下) (南東から)		
	(3)SB201 (上)・202 (下) (東から)	(4)SB70 (東から)	(5)SB200 (東から)	
PL.6	(1)SB76 (南東から)	(2)SK113 (南西から)	(3)SX135 (北から)	(4)SI3 (南東から)
	(5)SX7 検出状況 (南東から)	(6)SX7 完掘状況 (南東から)	(7)SX7 内部主体 (南東から)	
PL.7	(1)広石古墳群第VI群1号墳出土状況 (南から)	(2)1号墳石室・外護列石出土状況 (西から)		
	(3)2号~5号墳出土状況 (南から)	(4)2号墳出土状況 (南から)	(5)2号墳石室 (南から)	
PL.8	(6)3号墳出土状況 (南から)	(7)3号墳奥壁 (南から)	(8)3号墳羨道部遺物出土状況 (西から)	
	(9)4号墳出土状況 (南から)	(10)4号墳石室出土状況 (敷石第2面) (西から)	(11)5号墳出土状況 (南から)	
PL.9	(1)調査区全景 (北から)	(2)調査前風景 (北から)	(3)調査区西半全景 (南から)	
	(4)SH20 (北西から)	(5)SK38 (北から)		

- PL.10 (1)SC28 (北から) (2)SC50・51 (手前) (北から) (3)SK42 (中央)・SC52 (南から)
 (4)SB64 (手前)・SB65 (北東から) (5)SB68 (南から) (6)SB67 (南から) (7)ST-03 (北
 から) (8)SX54 (北から)
- PL.11 (1)Ⅶ-1号墳全景 (北から) (2)Ⅶ-1号墳検出状況 (南から) (3)Ⅶ-1号墳石室完掘状況
 (南から) (4)Ⅶ-1号墳石室完掘状況 (北から) (5)Ⅶ-1号墳石室内 (北から)
- PL.12 (1)調査前風景 (北東から) (2)調査区全景 (東から) (3)SH01 (中央)・SH02 (手前) (南東
 から) (4)SH01 近景 (南東から) (5)SH09 (南から) (6)SK03 検出状況 (北東から) (7)
 SK03 完掘状況 (北東から)
- PL.13 (1)笠間谷古墳群全景 (南上空から) (2)笠間谷古墳群調査前全景 (南から) (3)笠間谷古墳群
 1号墳調査状況 (南から) (4)1号墳外護列石出土状況 (東から) (5)1号墳羨道 (玄室から
 外を望む) (6)1号墳奥壁 (南から)
- PL.14 (7)2号墳出土状況 (南から) (8)2号墳奥壁 (南から) (9)3号墳出土状況 (南から)
 004号墳出土状況 (東から) 01SK05 (南から) 02SK10 (南東から)
- PL.15 (1)野方古墳群D群出土状況 (北から) (2)1号墳墳丘・外護列石出土状況 (東から) (3)1号
 墳玄門部 (北から) (4)1号墳奥壁 (南から) (5)1号墳墳丘土層堆積状況 (西側) (南から)
 (6)1号墳墳丘土層堆積状況 (東側) (南から)
- PL.16 (7)2号墳墳丘・外護列石出土状況 (南から) (8)2号墳石室出土状況 (南から) (9)2号墳玄
 門部 (北から) 002号墳奥壁 (南から) 012号墳羨道西側墳丘出土供献土器 (南から) 02
 野方古墳群D群調査状況 (東から)
- PL.17 (1)調査区全景 (西から) (2)遺構検出状況 (西から) (3)SK01 (西から) (4)SK02 (南西か
 ら) (5)SK03 (東から) (6)SX01 (西から) (7)土器群出土状況 (南から)

付 図 目 次

付図1 調査区地形図・グリッド配置図 (1/2000)

付図2 第1地点遺構全体図 (1/300)

I はじめに

1 調査に至る経緯

今回の調査は福岡市生松台土地区画整理組合が計画実施した、1200区画60haにわたる区画整理事業にともなって実施された緊急発掘調査である。事業は昭和58年計画され本課に当該地の遺跡の有無が照会された(教埋58-2-204)。組合との協議を重ね昭和61年5月と6月の2回にわたり遺跡確認の試掘調査を行なった。結果、6箇所で古墳を含む遺跡の埋蔵が確認された。現状での保存が望まれたが計画変更は困難であり、更に協議を重ねた結果、組合が調査費全額を負担し、本課が緊急発掘調査を行なうこととなった。調査は昭和61年8月に第6地点が実施され、昭和62年5月～63年3月の予定で第1～第5地点の調査が実施された。しかし予想に反して丘陵斜面といった立地にかかわらず、遺構の分布が極めて濃厚である事が徐々に判明し、3月終了は明らかに不可能であると判断された。このため組合と再協議を行ない、組合の理解を得て期間・調査費の再契約がなされ、昭和63年9月に調査を完了した。

2 調査の組織

調査委託: 福岡市生松台土地区画整理組合

調査主体: 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎

調査総括: 埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財第2係長(当時) 飛高憲雄

調査庶務: 埋蔵文化財第1係 岸田 隆(当時)

調査担当: 埋蔵文化財第2係 池崎謙二(現市立博物館学芸主査) 山崎龍雄 下村 智 加藤良彦

調査協力: 大橋隆司(現佐賀県神埼町職嘱) 長家 伸(現本課職員) 大嶺佳之(現前原町職嘱) 西川 徹・西田 巖・五島昌浩(山口大学) 黒田和生 英 豪之 溝口武司 汐崎美紀 土妻崎順子 脇坂レイコ 米嶋ハツネ 浜地富男 藤 タケ原ハナエ 山田トキエ 山下アヤコ 森山早苗 堀尾久美子 西嶋洋子 原 幸子 川口シゲノ 米嶋規久子 高田マサエ 松尾キミ子 松尾鈴子 舎川春江 柴田常人 坂田セイ子 百武義隆 津川真千代 栗木和子 渋谷友代 古賀美恵子 高木正代 窪田 慧 谷 吉美 松田純子 吉住シズ子 横田松ノ 藤崎久子 若狭睦代 近藤誠一 花田 篤 脇坂チカ 瀬戸啓治 脇坂マキノ 平田勇夫 平田千鶴子 吉岡トク 西島マツ子 西島ミチ子 網田美代野 脇坂武美 脇坂喜代子 井口菊太郎 有田吉太 青柳聖子 坂出美佐子 赤池春光 吉積ミエ子 野坂ミエ子 松本藤子 上原チヨ子 土妻崎孝子 津田和子 鳥巢良子

日高義人 中神元志 大内士郎（現今宿公民館長） 吉村哲美 田中英樹 石川
恵喜 松尾 司 馬場寿生 本多育夫（九州大学） 野田純子・外本亜希（熊本
大学） 西尾たつよ 金子由利子 松尾玲子 松井フユ子 清原ユリ子 松井邦
子 坂口フミ子 佐藤テル子

資料整理：平川敬治（九州大学） 池田初実 前田直子 国武真理子 小城信子 木村厚子
檜崎多佳子 能美須賀子 岡根なおみ

II 調査区の立地と環境

本調査区は福岡市の都心部より西へ10km、博多湾岸より南へ3kmの地点、室見川が貫流する早良平野の西を面する、背振山系から飯盛山・叶岳、長垂山へとつらなる山塊から東の平野部へいくつも延びる標高95m～33mの小支丘及び裾の中段段丘上に展開している。行政的には福岡市西区大字野方に所在する。

周辺の歴史環境を概観してみると、旧石器・縄文早期の遺跡は山麓部と洪積台地に点在しており、羽根戸原・吉武遺跡群・有田遺跡でナイフ形石器・細石器が、羽根戸遺跡で押型文・縹糸文土器が検出されている。前期は沖積地の微高地上まで進出し、四箇遺跡群・湯納遺跡・田村遺跡で縄文式土器・曾畑式土器・竪穴・ドングリピット等が検出されている。中・後期では吉武遺跡群でドングリピット50数基、有田遺跡で貯蔵穴様ピット60数基、四箇遺跡群で埋壘・竪穴・竪穴住居址、特殊泥炭層（堅果類果皮の多量堆積－ヒョウタン・リョクトウ出土）が出土。晩期では稲作開始期の突帯文の時期に増大し、有田七田前・十郎川・拾六町ツイジ・四箇・田村遺跡などで大陸系磨製石器・木製農耕具未製品・矢板列・埋壘等が検出されている。

弥生時代前期前半は前代と重なって海岸部の中・低位段丘上に多く分布している。有田遺跡には300×200mの大規模な環濠が出現し、藤崎遺跡では土壇墓群が見られる。前期後半からは内陸平野部にも集落が展開し、吉武遺跡群では「早良王墓」として賑わした木棺・壘棺墓群とともに4×5間の掘立柱建物が検出されている。中期はさらに面的な広がりを見せ四箇長峰遺跡のように内陸奥部まで広がる。吉武遺跡群は拠点として更に発展した様で壘棺墓は1000基以上、墳丘墓も検出された。

弥生終末から古墳時代前期にかけては野方中原・野方塚原、野方勸進原・野方柳原・飯盛谷・宮ノ前C地点・重留・五島山・藤崎・西新町・有田遺跡で石棺墓・方形周溝墓・墳丘墓・住居などが検出され後漢鏡・三角縁鏡などが出土している。中期では吉武で円墳20数基・帆立貝式墳（槌渡古墳）・方墳（槌渡2号墳）、掘立柱建物・住居址多数が検出され、重留では70m級の前方後円墳（灰塚－重留1号墳）、方墳（重留2号墳）がある。後期になると山麓部の丘陵上に古墳群は移り6世紀前半～中頃にかけ羽根戸、羽根戸南古墳群で群集墳の形成が始まり、6世紀後半以降吉武古墳群（147基）、羽根戸南古墳群（20基）、羽根戸古墳群（146基）、野方古墳群（18基）、広石古墳群（19基）等吉武～長垂山麓にかけ、にわかに増大する。鉄滓供獻が見受けられるのも共通する。

歴史時代では奈良～平安時代の城ノ原院寺・有田・吉武・石丸古川・下山門敷町遺跡で掘立柱建物群等が検出され、下山門・吉武・牟多田遺跡で製鉄址が確認されている。本調査区の地名「野方」は古代の「額田郷」「額田駅」に由来しており、野方から本調査区北を通して今宿青木へぬける「広石越」は古代の官道に比定されている。



- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 区画整理城 | 2. 羽根戸遺跡 | 3. 吉武遺跡群 | 4. 有田遺跡 |
| 5. 四箇遺跡群 | 6. 湯船遺跡 | 7. 田村遺跡群 | 8. 拾六町ツイジ遺跡 |
| 9. 藤崎遺跡群 | 10. 野方中原遺跡 | 11. 野方軍原遺跡 | 12. 野方輪湯原遺跡 |
| 13. 野方柳原遺跡 | 14. 飯盛谷遺跡 | 15. 宮の前C地点 | 16. 重留遺跡群 |
| 17. 押(灰)塚古墳 | 18. 五島山古墳 | 19. 西新町遺跡 | 20. 羽根戸南古墳群 |
| 21. 羽根戸古墳群 | 22. 金武古墳群 | 23. 野方古墳群 | 24. 広石古墳群 |
| 25. 城の原廃寺 | 26. 石丸・古川遺跡 | 27. 下山門敷町遺跡 | 28. 幸多田遺跡 |

Fig.1 調査区位置図 (1/50000)

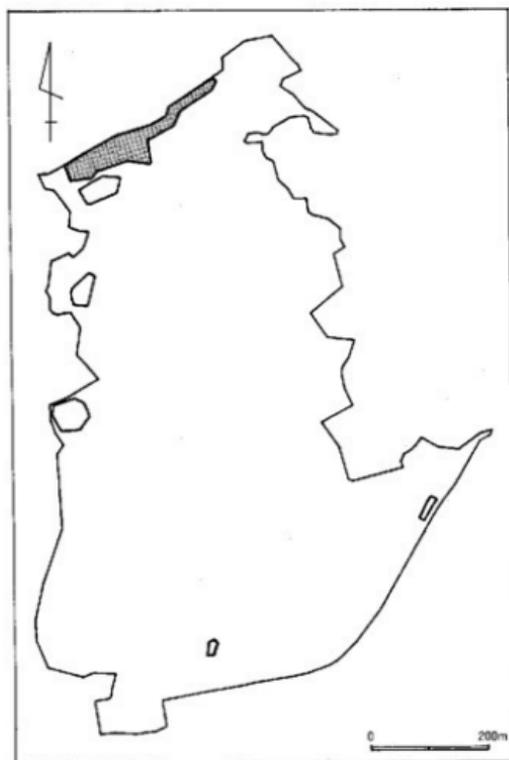


- 遺跡分布地図
西部 1 104
A-7 コノリB遺跡
A-8 広石遺跡A地点
A-9 // B地点
A-10 野方岩名隈遺跡
A-13 野方中原遺跡
(国指定・史跡)
A-14 野方中原B遺跡
B-4 広石古墳群I群
B-5 // II群
B-6 // III群
B-7 // IV群
B-8 // V群
B-9 // VI群
B-10 岩名隈古墳
B-13 コノリ古墳群 B群
C-3 コノリ製鉄遺跡B
C-4 コノリ製鉄遺跡B
第1地点
B-14 広石古墳群VI群
A-15 広石遺跡群C地点
第2地点
A-16 広石遺跡群D地点
B-15 広石古墳群VII群
第3地点
A-17 名切谷遺跡
B-16 広石古墳群VIII群
A-18 広石遺跡群E地点

- 遺跡分布図
西部 1 105
A-1 野方中原遺跡(国史跡)
A-2 野方塚原B遺跡
A-4 野方塚原遺跡
B-1 野方大音石棺墓
B-3 野方古墳群A群
B-4 // B群
C-1 野方新池遺跡
C-2 野方カサネ池遺跡
第4地点
B-25 笠間谷古墳群
第5地点
B-26 野方古墳群D群
第6地点
A-10 大音遺跡

III 調査の記録

1. 広石遺跡群C地点・広石古墳群VI群 (第1地点)



遺跡調査番号	8734		遺跡略号	HRC-1・HIK-6	
調査地地籍	西区野方地内		分布地図番号	104	
開発面積	60ha	調査対象面積	10,200㎡	調査実施面積	8,383㎡
調査期間	1987年9月22日～1988年3月31日			事前審査番号	58-1-170

—— H = 52.2m

—— H = 50.0m

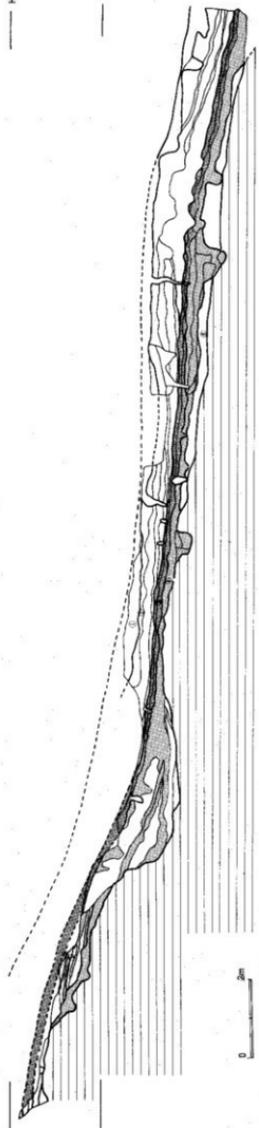


Fig. 3 I 区横断土層断面図 (1/100)

土層名称

- ①黄土
- ②灰青色～赤褐色シルト・砂層
- ③緑灰色～黒灰色シルト層
- ④黒灰色シルト層
- ⑤黒灰色シルト層
- ⑥黒灰色シルト層
- ⑦黒灰色シルト層
- ⑧黒灰色シルト層
- ⑨黒灰色シルト層
- ⑩黒灰色シルト層
- ⑪黒灰色シルト層
- ⑫黒灰色シルト層
- ⑬黒灰色シルト層
- ⑭黒灰色シルト層
- ⑮黒灰色シルト層
- ⑯黒灰色シルト層
- ⑰黒灰色シルト層
- ⑱黒灰色シルト層
- ⑲黒灰色シルト層
- ⑳黒灰色シルト層
- ㉑黒灰色シルト層
- ㉒黒灰色シルト層
- ㉓黒灰色シルト層
- ㉔黒灰色シルト層
- ㉕黒灰色シルト層
- ㉖黒灰色シルト層
- ㉗黒灰色シルト層
- ㉘黒灰色シルト層
- ㉙黒灰色シルト層
- ㉚黒灰色シルト層
- ㉛黒灰色シルト層
- ㉜黒灰色シルト層
- ㉝黒灰色シルト層
- ㉞黒灰色シルト層
- ㉟黒灰色シルト層
- ㊱黒灰色シルト層
- ㊲黒灰色シルト層
- ㊳黒灰色シルト層
- ㊴黒灰色シルト層
- ㊵黒灰色シルト層
- ㊶黒灰色シルト層
- ㊷黒灰色シルト層
- ㊸黒灰色シルト層
- ㊹黒灰色シルト層
- ㊺黒灰色シルト層
- ㊻黒灰色シルト層
- ㊼黒灰色シルト層
- ㊽黒灰色シルト層
- ㊾黒灰色シルト層
- ㊿黒灰色シルト層

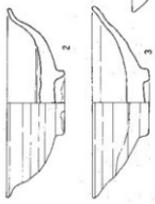
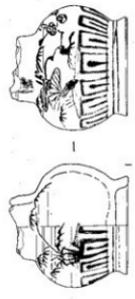


Fig. 5 中世・近世遺物検出区 (1/3)



Fig. 4 縄文時代遺構分布区 (1/2000)



Fig. 5 古墳時代遺構分布区 1 (6C後半～7C前半) (1/2000)



Fig. 6 古墳時代遺構分布区 2 (7C後半～8C初葉) (1/2000)



Fig. 7 奈良時代遺構分布区 (1/2000)

アスカガキ土器分

1 広石遺跡群C地点・広石古墳群VI群

調査の概要

本調査区は野方川の支流・名切谷川によって開析された標高33～57mの北東に延びる低丘陵の南東側に位置し、斜度16～35°の急斜面と5～10°の中位段丘上に立地している。周囲では昭和50・51年行なわれた広石古墳群I～V群が、昭和62年にV群1号墳が、昭和63年には河川改修事業に伴ってVII群1号墳と広石遺跡群E地点が調査されている。

本調査区は団地内の集合排水路と公園建設予定地に当たっており、東西330m・南北60m・調査対象面積10200㎡の狭長な調査区となっている。防災の必要性から早急に着工せねばならない部分という事も有り、全体を2000㎡見当の小区（1～5区・Fig.4）に分割し、調査終了次第工事に引き渡す方法を取った。

基本層位は（Fig.3）、表土下に30～200cm程黄灰色～赤褐色のシルト～砂礫の水成層が調査区全域を厚く覆っている。3区でこの層上面で砂目を持つ肥前系の端反りの皿（Fig.8-2）・胎土目で蛇ノ目カキ取りの端反りの皿（同-3）・柱穴内より染村の花瓶（同-1）・土師質の埴輪、同層下の黒灰色土より径7cm・器高1.2cmの糸切土師器皿（同-4）を検出しており、15世紀～17世紀前半間の大雨による山崩れの堆積土と考えている。この水成層下に10～20cm程の厚目で暗灰～黒灰色土の堆積層が有り、奈良時代の遺物を中心に包含している。これを包含層上層として遺物を取り上げている。奈良時代の遺構はこの上層中から下面にかけて検出される。調査はこの下面近くから下層の下位ぐらゐまで重機によって除去し行なっている。この下に20～40cm程の暗灰褐色土の包含層が有り、古墳時代の遺物を中心に出土する。さらに黄灰色のシルト質土が段丘面に部分的に広がっており、縄文早期の遺物・遺構が検出されるが、層は薄く暗灰褐色土の下面では漸移層になっている部分が多く分離は困難であった。調査時は上の暗灰褐色土とともに包含層下層として遺物の取り上げを行なっている。

検出した遺構は縄文時代早期の不整形土壇45基、古墳時代前期と思われる箱式石棺1・組合せ式木棺墓らしきもの1基（SR 219）、古墳時代後期の竪穴住居址38戸・掘立柱建物21棟・土壇86基・地山整形形11・溝12条・円墳5基・薬棺墓1基・小石室墓1基、古墳時代後期～奈良時代の周壁の焼けた方形土壇（以降、焼土壇と略称）30基、奈良時代の方形石組基壇状遺構2・火葬墓1基・須恵器登窯1基・土壇7基・溝1条を検出している。

縄文時代の土壇は4・5区の緩傾斜部分に多く分布する。竪穴住居址は丘陵斜面や裾のやや高い所に分布し、ことに1・5区に多く分布し重複した掘立柱建物に多く切られている。掘立柱建物は6×3間を最大に、桁行4間以上が9棟と大規模なものが目立つ。この期では住居址・土壇内から「玄海灘式」土器に連なる製塩土器と鉄滓が検出され、漁具の検出も見られる。

（註1）「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977年

（註2）「広石古墳群V-1古墳」福岡県文化財調査報告書第81集 1988年

（註3）「広石遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第195集 1989年

（註4）横山浩一「玄海灘式製塩土器（上）・（中）」九州文化史研究紀要29・30 1984・1985年

(1) 広石遺跡群C地点

縄文時代の調査

遺構 縄文時代の遺構は主に4・5区の標高40~43mの平坦な中位段丘面と5区の44~47mの段丘面、3区の標高35~36mのラインに沿っての3ヶ所に分布する(Fig.4)。不整形のものが多く、長径80~190cm・短径60~140cmに集中する。中にはSK258のように5.5×2.6mの長大なものも有る。内部からは早期押型文土器・条痕文土器・無文土器・黒耀石やサヌカイト製の石鏃・チップなどが少量出土する。集中する分布の有り方から落とし穴とも考えられ、石鏃は25本中19本が1区・5区に集中しており、川上から鹿などの獲物を追ひ、落とし穴群へ追い込んだのかもしれない。総数では柏原遺跡群に遠く及ばないが、市域では2番目の検出数である。

SK142 (Fig.9) は T11 グリッドに位置し、長径392cm短径168cm深さ108cmを測かる。不整形で

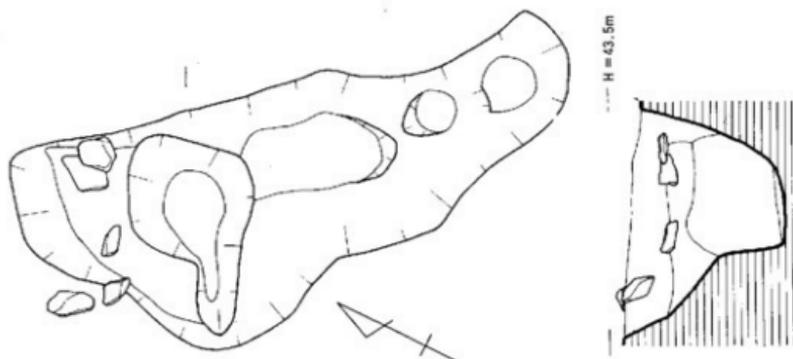


Fig.9 SK142実測図 (1/40)

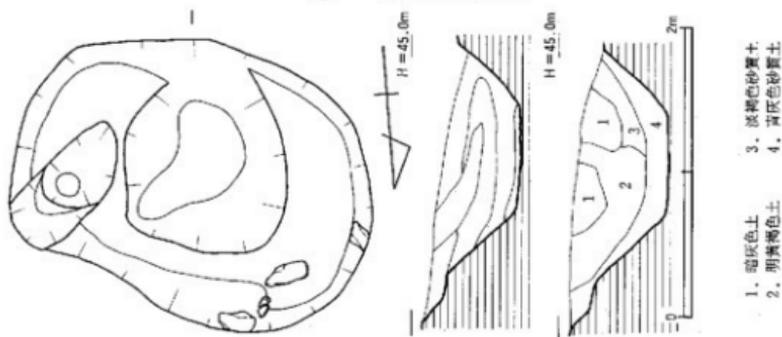


Fig.10 SK147実測図 (1/40)

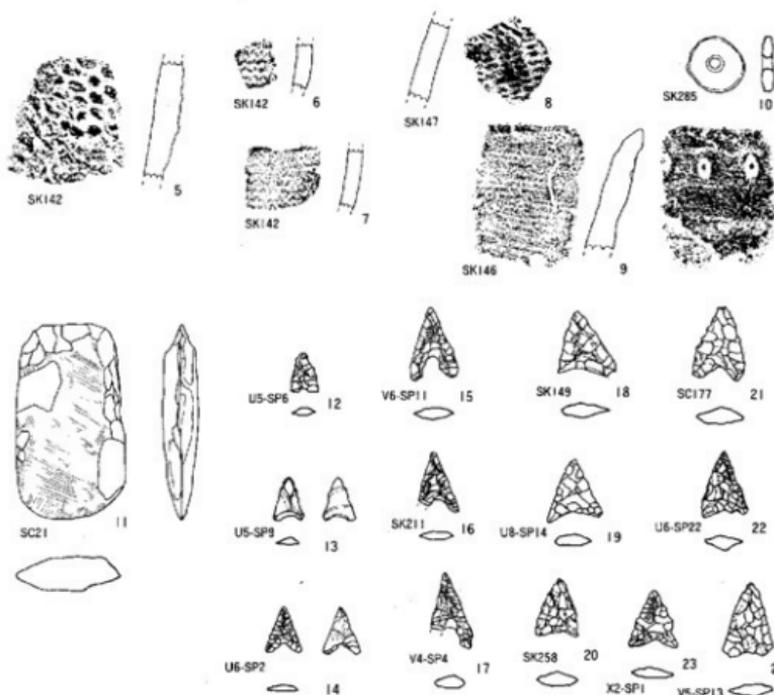


Fig.11 縄文時代遺物実測図 (1/3, 1/2)

床面も整わない。覆土は暗黄灰色の砂質土で、遺物は上部に散発的に見受けられる。SK147(Fig. 10)はW8グリッドに位置し、長径250cm・短径188cm・深さ65cmを測かる。楕円形の形状を呈するが、これも床面は整わない。大部分は平・断面とも不整形である。

遺物 (Fig.11) 5・6・7はSK142出土の深鉢土器である。5は外面に粒の大きな楕円押型文を斜位に施し内面には指頭圧痕が残る。6・7は外面に小さな山形押型文を横位に施す。内面は同様に指頭圧が見られる。8はSK147出土の小粒の楕円押型文で左上がりの斜位に施文後、さらに横位に施文されている。9はSK146から出土。若干開く口縁で内外面に横位の条痕文を施し、外面口縁下に径1.3cm程の縦長の刺突文が施行される。瀬戸内系の影響であろう。10は緑泥片岩製の円形石製品で径2.9cm厚さ6mmを測かる。周縁は平坦に面取りがなされる。11は蛇文岩製の磨製石斧で、全長6.8cm刃幅3.1cm刃厚1.2cmを測かる。石鏃は1.4~1.5cmの小型品と1.5~1.7cmの楕型・2.0~2.6cmの大ぶりのものの3タイプが有る。石材は13が姫島産黒羅石、12がチャート、19がサヌカイト、21・24が頁岩製、他は黒羅石製である。

弥生時代の調査 該期の確かな遺構はなく、中期中頃と後期後半の礎が2片と他に今山産玄武岩製の太形蛤刃石斧の使用痕を有する半折品9点を検出しており、建築材や木器の原材の伐截が行なわれていたと考えられる。

古墳時代の調査

竪穴住居址 (SC) 方形のプランを持ち内部に柱穴もしくは炉・竈を持つものを竪穴住居址として取り扱った。標高34m～52mの急斜面から中位段丘面まで全面にわたって分布しているが、比較的に高い位置に分布している。1区・5区・4区・3区でまとまる傾向がある。規模は長軸で2.9～6.4m短軸で2.1～4.5mの長方形のプランを呈し、長軸で3.8～5.4m短軸で3.1～4.3mの中型のグループと長軸2.9～3.3m短軸2.1～2.6mの小型のグループに分割できる。大部分は長軸が丘陵尾根と並行する。

時期はⅢB期(小田編年)で16戸、Ⅳ～Ⅴ期で19戸、掘立柱建物の直前もしくは並行するⅥ期のもの3戸に分けられる。

柱・竈の有無でタイプ分けしてみると、Aタイプ-4本柱で竈を有するもの、Bタイプ-4本柱のみのもの、A'・B'タイプ-上記で柱が1～数本の変則柱のもの、Cタイプ-竈のみ有するものに分類すると、ⅢB期でAタイプ(SC62・90・153・280・257・52)は6戸、A'タイプ(SC48・231・276・278・77・139)6戸、Bタイプ(255)1戸、Cタイプ(277・177)2戸と定形化されたものが37.5%を占める。Ⅳ～Ⅴ期でAタイプ(SC34・259・159・140)4戸、A'

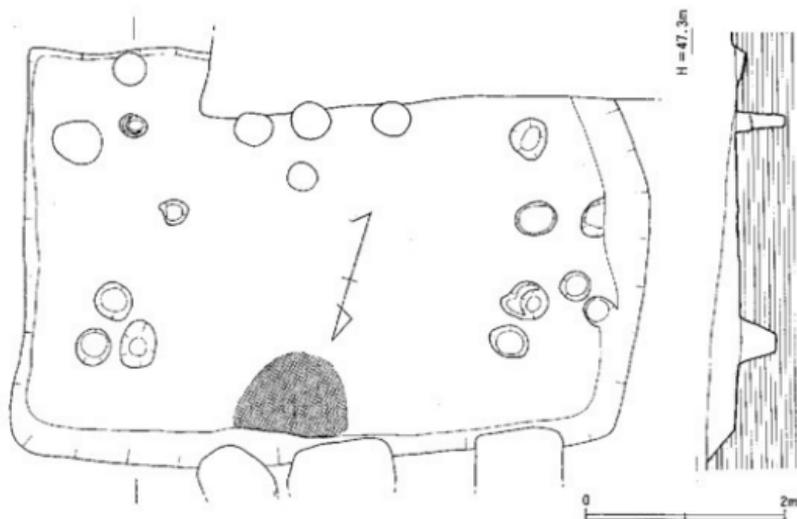


Fig.12 SC257実測図 (1/60)



Fig.13 SC52 実測図 (1/60)

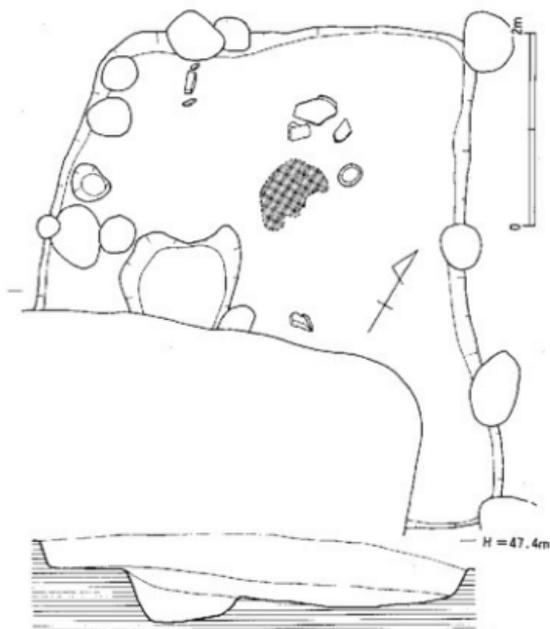


Fig.14 SC91 実測図 (1/60)



タイプ (SC28・29・168・91) 4戸、Bタイプ (SC166・138・190・171・172) 5戸、B'タイプ (SC175)、Cタイプ (SC209・92・21・215・152) 5戸とCタイプが増える傾向に有り、VI期はA'タイプ (SC46) 1戸、Bタイプ (SC18) 1戸、Cタイプ (SC31) 1戸と、定形化したものはなく

なっている。以上のよう
に時期を下るに従って変則・簡略化が見受けられる。

またこの時期で特徴的なのは、鉄滓と製塩土器を検出する住居、土壌が多い事で、鉄滓は

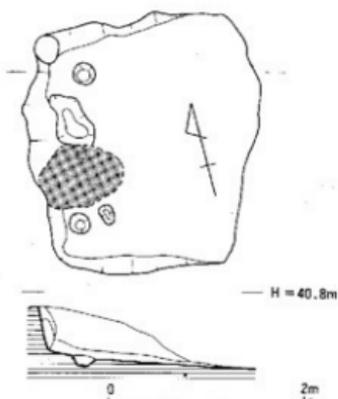


Fig.15 SC168 実測図 (1/60)

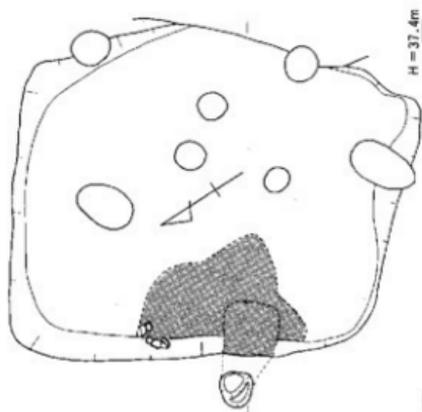


Fig.16 SC152 実測図 (1/60)



III B期でSC153・255・277・278・77・177の6戸で1046g、同期の住居の37.5%、全体の15.8%を占める。重量では31.7%を占める。IV～V期でSC138・29・92・21・190・91の6戸で299g、同期の住居の31.6%、全体の15.8%、重量では8.9%。VI期ではSC18・31・46の全てで検出され、全体の6.3%ながら重量は2018gで全体の60%を占め、この期でピークに達している。

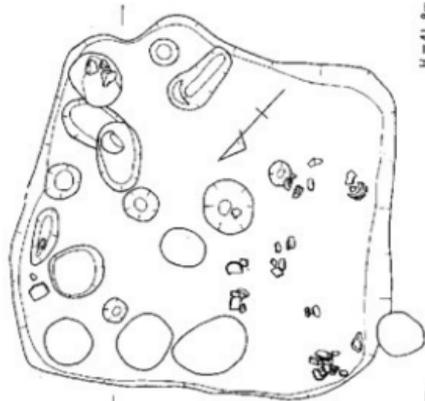


Fig.17 SC139 実測図 (1/60)



製塩土器と思われるものはIII B期でSC208・48・231・139・257の5戸、IV～V期でSC166・21・28・159・91の5戸、VI期でSC46の1戸で検出されている。

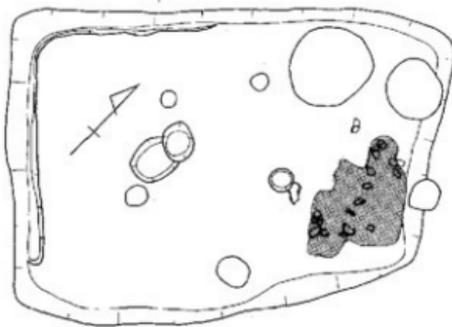


Fig.18 SC77 実測図 (1/60)



SC257 (Fig.12) は6.36×4.5mを測かり、Aタイプ、柱間は3.8×2.3mを測かる。III B期。SC52 (Fig.13) は4.74×4.18mでAタイプ、III B期。柱間は3.1×2.6mを測かる。SC91 (Fig.14) は5.05×3.95mを測かり、A'タイプ。3本柱である。竈内の支

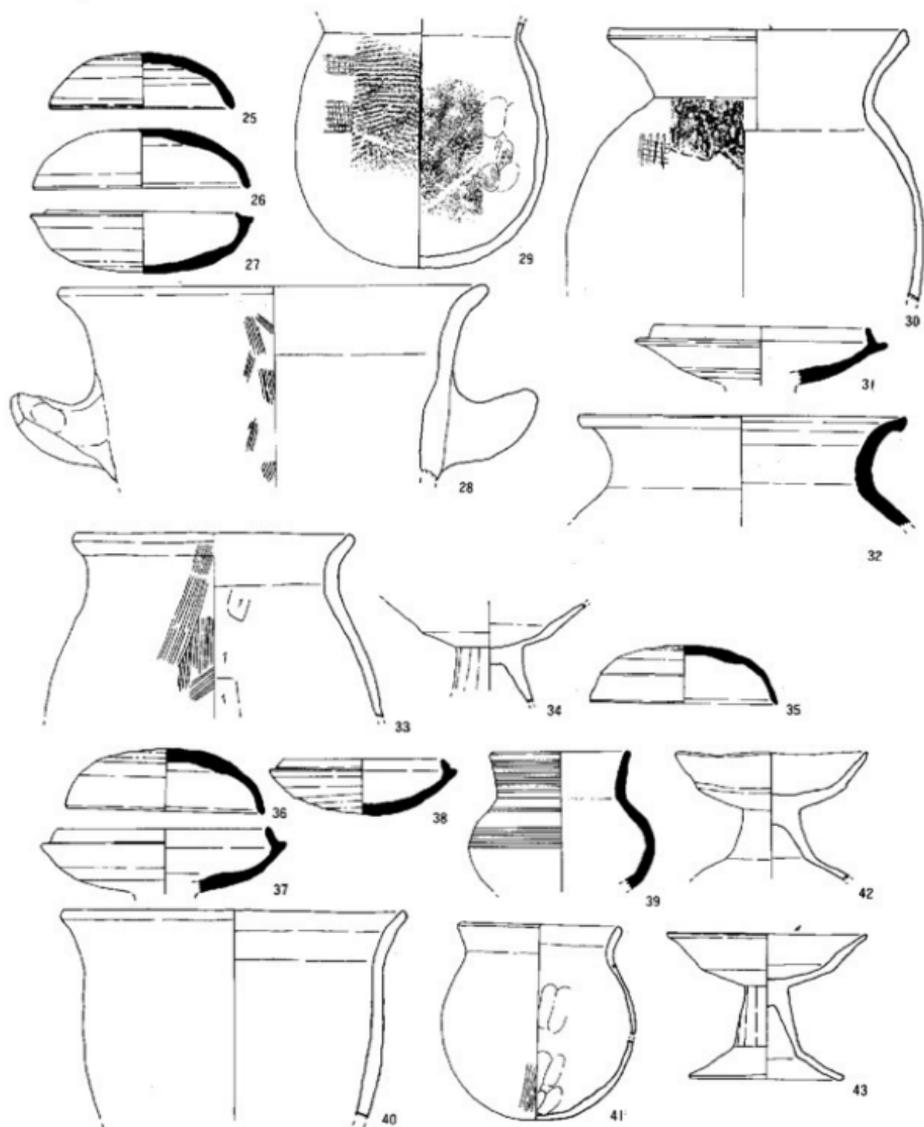


Fig.19 SC 出土遺物実測図 (1/14)

柱に長方形自然礫を用いているが、この他に高坏を倒置して用いる住居も多い。SC168 (Fig.15) は最小のタイプで3区急斜面上に有る。2.8m×2.4mを測り柱間は1.5mⅣ期。SC152 (Fig.16) はCタイプでトンネル状の煙出し部が残っている。3.8×3.42mを測かるⅣ期。SC139 はⅢB期。B'タイプ。4.02×3.8mを測かる。SC77 (Fig.18) はA'タイプ2本柱で一部に煙溝が残る。4.51×3.1mを測かり、柱間は1.3m、ⅢB期。Fig.19 はこれら住居址内の出土遺物である。29 は製塩土器と思われるもので、ⅢB期 SC257 からの出土である。胴径13.4cm測かり、外面に木目直交横位の平行叩きを施し、内面には若干太目の平行弧線印が残る。色調は製塩土器特有の桃褐色～桃色を呈し、外面に煤が付着する。口縁部を欠くが、第2地点 Fig.19の4と同様の短く外反し、口縁端部が凹線状を呈するものと思われる。30は口径20.2cmで大きく外反する口縁部端を調整で凹線気味に仕上げる。胴部外面には木目直口の縦位の叩きを施す。内面は摩滅が著しく不明、外面は桃黄色を呈し製塩の可能性も考えられるが通常の煮沸に使用した公算が高い。ⅢB期。

土壌 (SK) 土壌は住居址の可能性も考えられる方形竪穴土壌 (Aタイプ、ⅢB期191・156・15、Ⅳ～Ⅴ期-95、163・256・82・87、Ⅵ期-24) 廃棄物処理用の不整形土壌 (Bタイプ、ⅢB期-SK11・58・78・93・49・178、Ⅳ～Ⅴ期-16・20・39・83・85・94・103・125・124・151・154・84・162・161・170・169・160・183・186・193・196・199・205・207・210・212・223・225・242・246・249・252・261・264・127・253・235・19・37・32・254、Ⅵ期-122・185・186・226・101・102・65・66・56・57・42・43・41・36・35・22・12・4・40・50・59・263・23・266)、炉・竈を有する長形土壌 (Cタイプ、ⅢB期49・192、Ⅳ～Ⅴ期-167・106・23) 地山整形部 (Dタイプ、ⅢB期-63・157、Ⅳ～Ⅴ期-54・25・37、Ⅵ期-263) と焼土壌 (Eタイプ、ⅢB～Ⅳ期-SK224) の4タイプが考えられる。竪穴住居同様、鉄滓と製塩土器の検出が目立ち、鉄滓はⅢB期で2基63g、Ⅳ～Ⅴ期で5基205g、Ⅵ期で14基1968gを検出、竪穴住居その他遺構分全

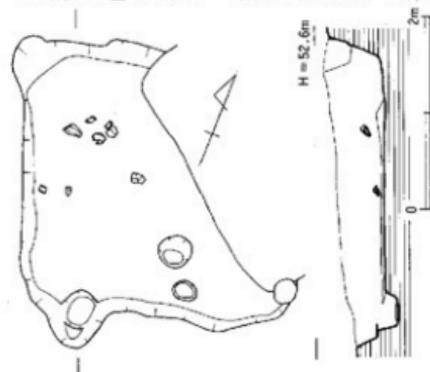


Fig.20 SK15 実測図 (1/60)

ての総計で、ⅢB期9遺構1109gで17%、Ⅳ～Ⅴ期で12遺構525gで8%、Ⅵ期で22遺構4364gで66.9%、Ⅶ期で8遺構528gで8.1%でⅥ期にピークを向かえる。製塩土器はⅢB期で2基 (63・15)、Ⅳ～Ⅴ期で5基

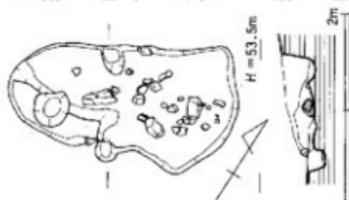


Fig.21 SK19 実測図 (1/60)

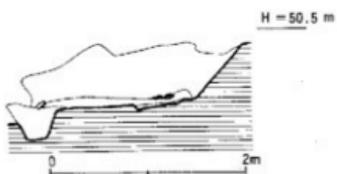
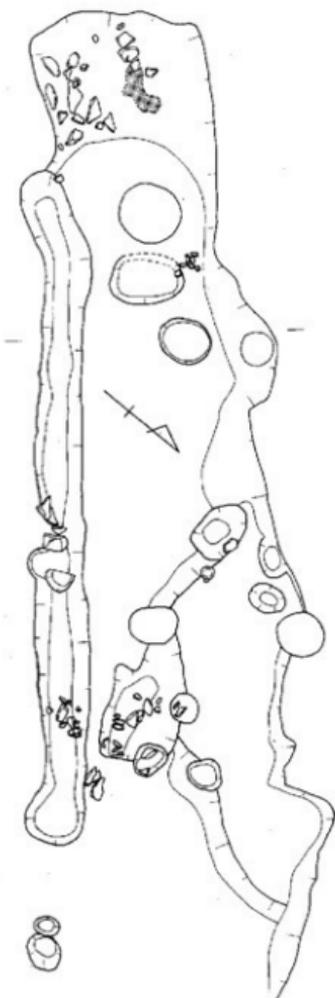


Fig.22 SK49 実測図 (1/60)

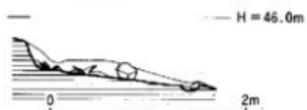


Fig.23 SK192 実測図 (1/60)

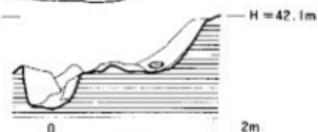
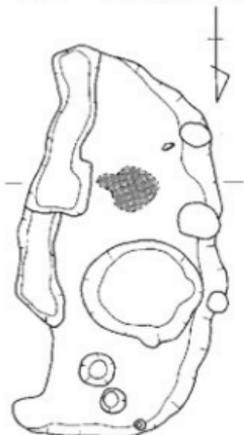


Fig.24 SK167 実測図 (1/60)

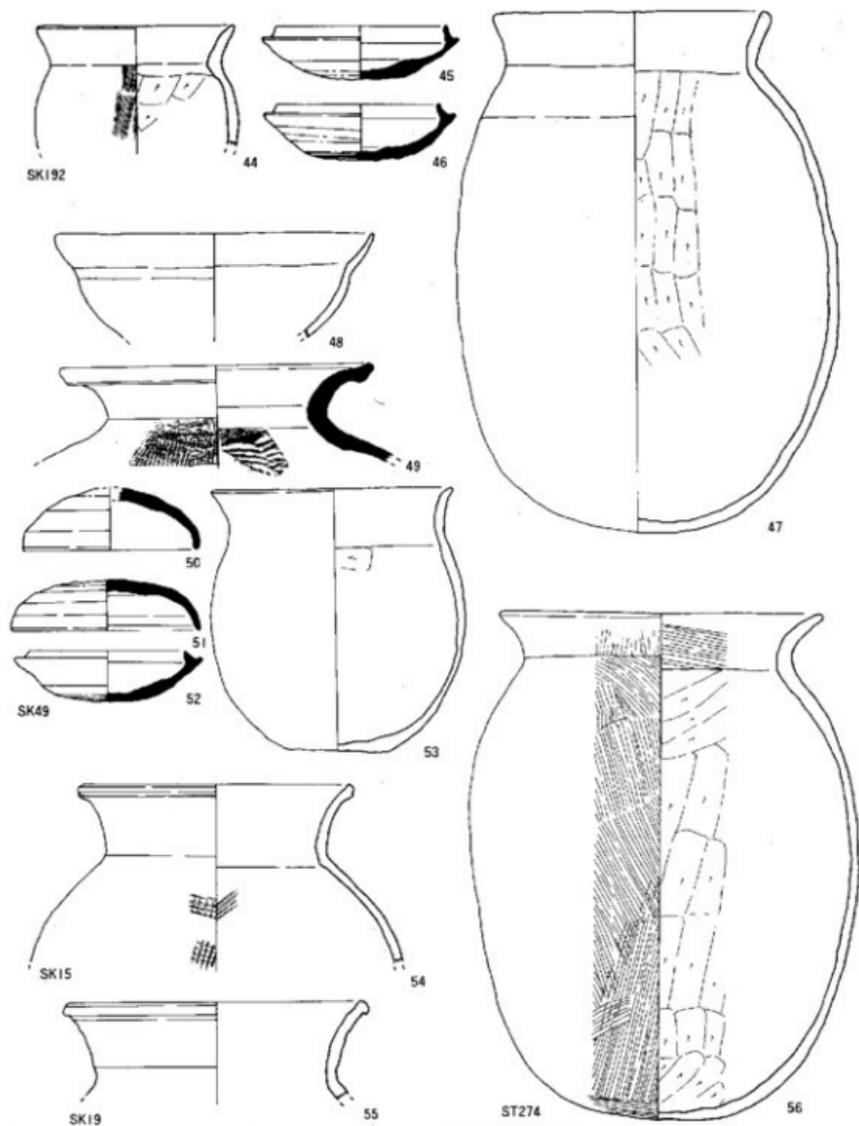


Fig.25 SK 出土遺物実測図 (1/4)

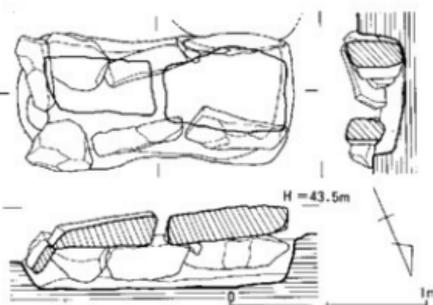


Fig.26 SQ218 実測図 (1/30)

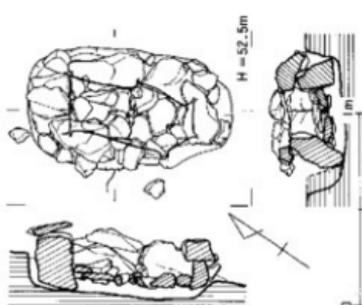


Fig.27 SQ6 実測図 (1/30)

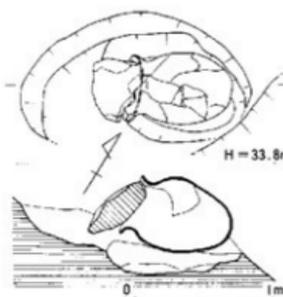


Fig.28 ST274 実測図 (1/20)

(20・19・37・32・254)、VI期で3基(22・18・24)確認している。小片まで含めるとかなりの量にのぼる。SK15 (Fig.20) はAタイプでIII B期、2.8×2.7mと測かる。製塩土器を検出しており、竪穴住居地の可能性も考えられる。小石室墓SQ6に切られる。SK19 (Fig.21) はBタイプでIV期。1.2×0.65mを測かる。内部より製塩土器を検出している。SK49 (Fig.22)・192 (Fig.23)・167 (Fig.24) はCタイプで、いずれも丘陵尾根線に沿って長径の長軸を取り、斜面下側に壁溝を切り、内部に焼土部分を有する事を特徴とする。SK49は10.3m×2.7mを測かり、南西隅に焼土が広がる。SK192は2.6×1.2mを測かり、同じく南西隅に焼土が広がる。SK167は3区の急斜面上に位置し、2.0×1.1mを測かる。焼土は中央部分に位置する。ともに出土遺物は多く、生活関連の遺構と考える。ここでは鉄滓・製塩土器とも検出されない。Fig.25は土壌からの出土遺物である。44～42はSK192から出土。45・46は須恵器環で45は口径11.6cm・46は口径10.5cm。44・47は土師器甕で44は口径13.2cm、頸部以下に縦方向のハケ調整、内面はヘラケズリが施される。47は口径18.8cm器高36.1cmを測かり、調整は44と同様である。ともに器壁の粗れが著しい。48～53はSK49出土。50～52は須恵器蓋環で50は口径12cm・51は12.8cm・52は10.6cmを測かる。48は土師器鉢で口径21.6cm。桃褐色を呈し、内面は5mm前後の円形に器壁が多くはじけとんでおり、煮沸に供された様である。高坏とともに日常の厨事に使用される特色が有る。54・55は製塩土器の可能性が有り、須恵器甕に似た口頸部の造作と木目直行の平行叩き、内面の平行弧線の当て具痕が特徴である。

箱式石棺 (SQ218-Fig.26) T11グリッドで検出され2枚の板石を縦位に用いて蓋としている。40×20cm程の板石を小口に、これをはさむ様に40×20cm程の板石3枚で側壁をなす。

小石室墓 (SQ6-Fig.27) X0グリッドに所在し、30×20cm程の方柱状の花崗岩で四隅を接

して立て四壁を構築し、これに厚さ10cm程の板石を小口に積み、10cm程の角礫で床を敷く。

甕棺墓 (ST274-Fig.28, Fig.25-56) 2号墳の裾に位置し、80×50cmの2段の浅い掘方土師器甕を横位にすえ、20cm四方程の花崗岩の板石で蓋をしている。主体は口径22cm、器高35.2

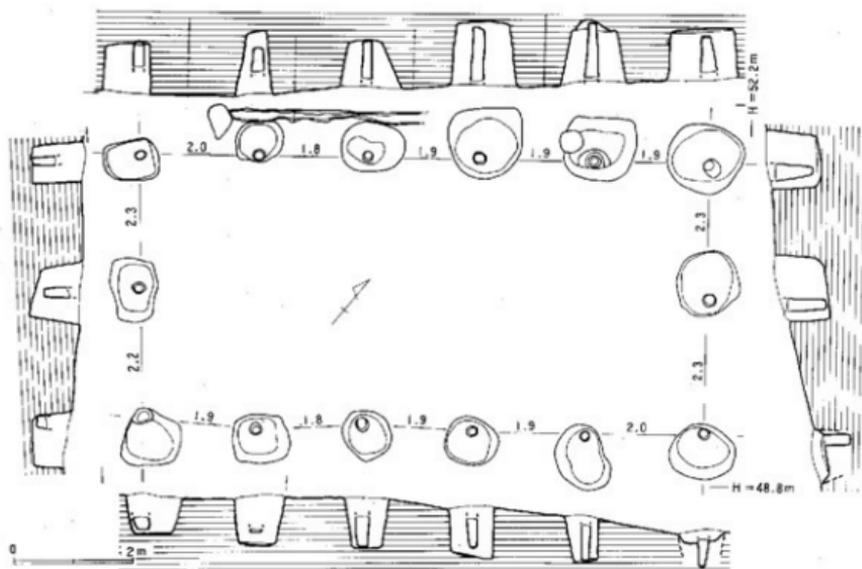


Fig.29 SB73 実測図 (1/100)

cmの土師器甕で、外面と口縁内面は刷毛調整、内部は右上がりのヘラズリが施される。

掘立柱建物 (SB) 掘立柱建物は22棟検出している。資料の検討が不充分であるためさらに数棟建つ可能

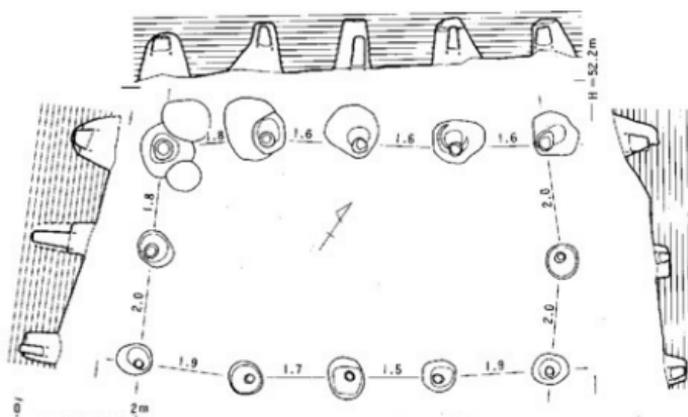


Fig.30 SB72 実測図 (1/100)

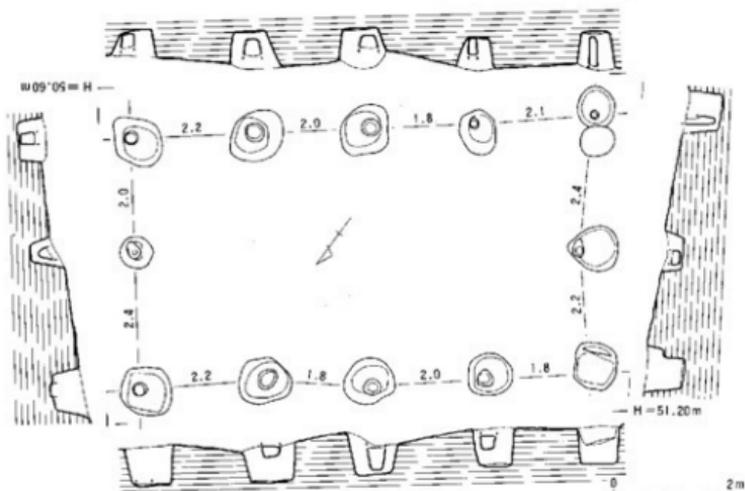


Fig.31 SB70 実測図 (1/100)

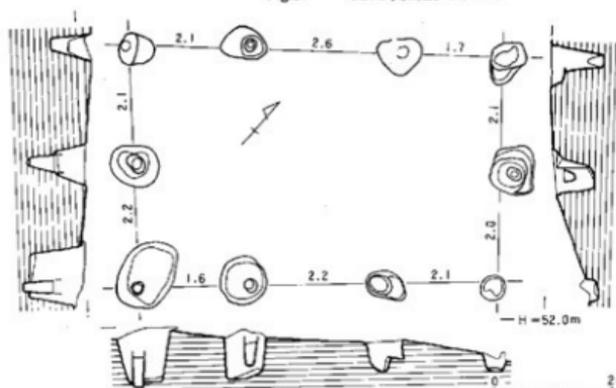


Fig.32 SB71 実測図 (1/100)

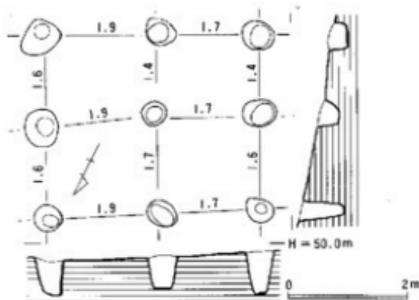


Fig.33 SB74 実測図 (1/100)

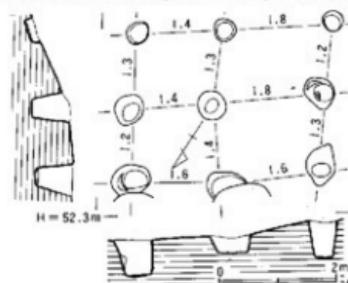


Fig.34 SB110 実測図 (1/100)

性は高いが、その分布は南東の1区・5区に集中している。大型の側柱の建物が多く、桁行4間以上のものが22棟中9棟も占める。その方向性と柱穴の切り合いから大きく5つのグループに分けられる様である。1区の

2×5間で主軸をN-52°-EにとるSB73を中心としたSB71・70・100と5区の3×6間で主軸

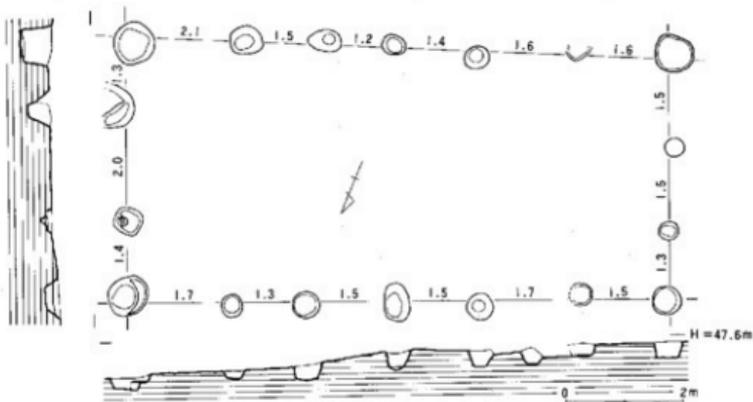


Fig.36 SB265 实测图 (1/100)

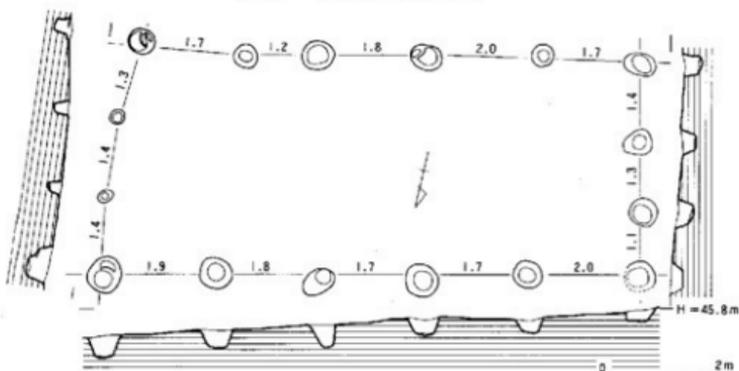


Fig.37 SB206 实测图 (1/100)

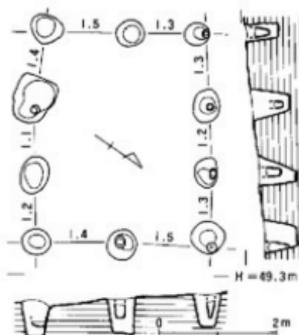


Fig.38 SB81 实测图 (1/100)

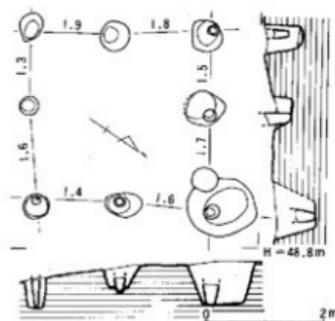


Fig.39 SB99 实测图 (1/100)

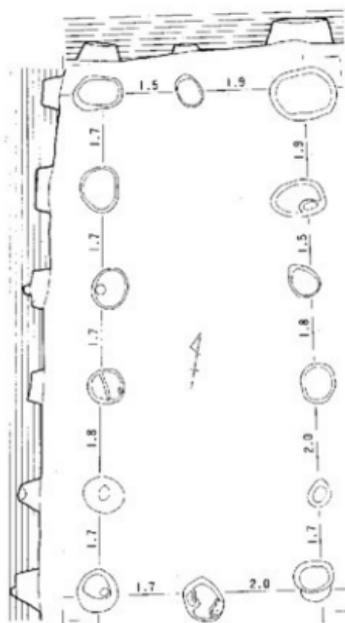


Fig.40 SB201 実測図 (1/100)



H=46.8m

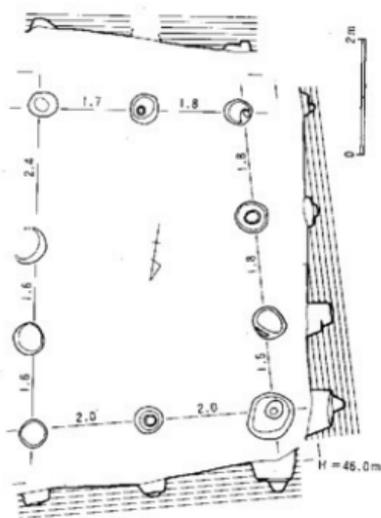


Fig.41 SB202 実測図 (1/100)

H=46.0m

期の遺物を包含する客土上にSB69・100・71~73・100を設置する事、奈良時代の遺物を含む包含層上層中にもうけられたSX7と奈良時代の遺物を検

出したSK5にSB100が切られる事、またIII B~IVの遺物を包含する竪穴住居址SC51・256・177など多数の竪穴住居を柱穴が切り込んでいる事などからVI期の7世紀後半~8世紀初頭にかけ存在したと考えられる。またSB72を71が切っており、1区に集中する同期のSC46・18・31を切っている事から、まず、5区のSB200を中心とした建物群が構築され、同期には少数だが1区に竪穴住居が併存し、後1区斜面に客土がなされ (Fig.3-⑤層) 敷地を造成する段になって竪穴住居は放棄され、SB72など建物群が広がったものと考えられる。さらにここではSB71や73など増・改築がなされている。偶然かどうか判断が難しいが、最初に建てられたと思われるSB200や265の方位は早良平野に律令期になされた条理の西へ10°偏ずる事に符号している。初期の政治的な規定が時代が下がるに従って人為的な規定から自然要件の規制に対応する様に変化していった事のあらわれかも知れない。豪族の居館であろうと思われるが、これらを支えた経済基盤は鉄もしくは鉄器生産と考えられる。竪穴住居・土壌の項でも述べたが、古墳時代後

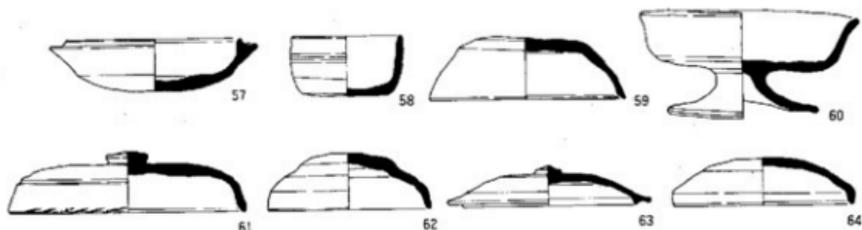
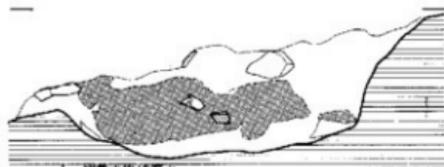
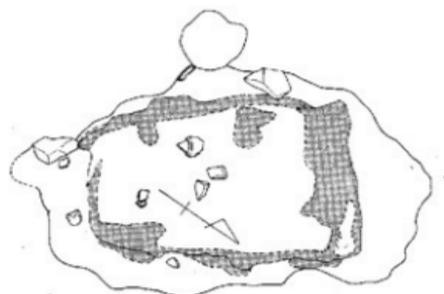


Fig.42 客土部出土遺物実測図(1/4)

期から奈良時代までの全遺構から検出した鉄滓総量6577gのうち4364g、何と7割近くまでを、鉄滓を検出した遺構総数57のうち22基までを該期が占めており、集中の度合いが著しい。製塩土器の検出は4遺構と前段の15基と比べると格段の差がある。

SB73 (Fig.29) は1区客土部分の中心を成す建物で2間×5間の大型のものである。梁間4.8m・桁行9.3mを測かる。桁行は丘陵線に沿っておりN-52°-Eの方位をとる。柱穴掘方も大きく、方形に近い0.8~1.2m深さ0.8~1.0m。柱穴は径20~30cm、深さ1m前後有る。総柱のSB110、側柱のSB108・109を切っている。柱間に焼土塊(SK104)が有り前後関係が明らかである。SB72 (Fig.30) はSB73の南西側に有り、SB71に切られている。2間×4間の規模で、梁間4.1m、桁行6.9mを測かる。方位はSB200に近くN-59°-Eにとる。柱穴掘方は27~40cmの円形で深さ15~40cm程で、底面は斜面と対応している。柱穴は8~15cmで深さ10~45cmを測かり、床面もほぼ平行している。SB70 (Fig.31) はSB72の南側に位置し、竪穴住居址2戸を切っている。2間×4間の規模で梁間4.4m・桁行7.8mを測かる。方位はN-53°-Eにとる。掘方は方形に近く60~80cm、深さ30~70cmを測かる。柱穴は径14~18cm深さ35~50cmを測かる。SB71 (Fig.32) はSB72を切って建てられており、方位をSB73に近いN-56°-Eにとる。規模は2間×3間、梁間3.9m、桁行6.9mを測かる。掘方はばらつきが大きく、40~120cm・深さ30~90cm・柱穴は径18~20cm・深さ30~100cmを測かる。SB74 (Fig.33) は2間×2間の総柱の建物で、X3グリッドに有る。方位はN-61°-Eにとる。掘方は小さく35~60cmを測かる。深さは33~70cmとほぼ水平になっている。梁間3.15m、桁行3.7mを測かる。SB110 (Fig.34) は2間×2間の総柱の建物で梁間3.25m、桁行4.6mを測かる。方位はN-54°-Eにとり、SB73に近い。SB73建造前の建物で、SB109にも切られている。柱穴掘方は小さく、径40~60cm、深さ15~60cmを測るが、斜面にかかわらず、底面はほぼ水平である。SB200 (Fig.35) は5区の中心を成す建物で1区のものに先行すると考えられる。規模は3間×6間で最大であり、梁間5.25m、桁行間12.3mを測かる。掘方はほとんどが隅丸方形を呈しており、85~130cm、深さ40~60cmを測かる。柱穴は18~20cmを測かり深さは80cm前後、方位はN-68°-Eをとる。SB265 (Fig.36) はSB200

の北側1.5m程の所に東側の梁をこれにそろえ、並んでいる。方位はN-69°-Eにとる。規模は3×6間で梁間4.3m、桁行9.2mを測かる。柱数はSB200と同数であるが、柱間が狭く、120~140cm程しかない。掘方も小さく径30~75cm程の円形で深さ10~50cm程である。SB206 (Fig.37) はSB200の南東側、段丘の落ち際に位置する東西棟で、規模は3間×5間。梁間4.15m、桁行9.15mでSB265に極めて近い。方位はN-79°-Eにとり、早良平野の条理方向と一致し、SB201・203もこれに極めて近い。しかし5区の東端、SB202のN-82°-Eから西側のSB70のN-53°-Eと徐々に西偏する傾向に有り、B8グリッドがあたりを中心として大きく円湾する地形の稜線に沿っている可能性も高い。掘方もSB265同様小さく30~60cm程の円形で深さは20~40cm程である。SB202とともに南北棟である。SB81 (Fig.38) は総柱のSB76の北に位置し、2間×3間の規模で小さなものである。梁間3.0m×桁行3.6m、柱間も狭く1.15×1.35mである。掘方は40~90cmの円形で深さ55~65cmを測かる。柱穴も小さく径10~12cmを測かる。方位はN-57°-Eにとる。SB99 (Fig.39) も同様に小さく2間×2間、梁間3.05m、桁行3.1m



1. 明黄灰色砂質土
2. 黒灰色土層上炭灰
3. 暗灰褐色砂質土
4. 黄灰色砂質土
5. 淡褐色砂質土
6. 黒灰色炭灰

Fig.43 SK4 実測図 (1/30)

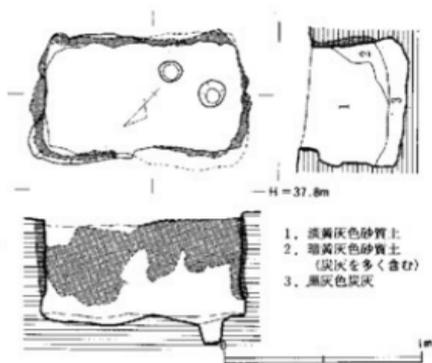


Fig.44 SK113 実測図 (1/30)

1. 淡黄灰色砂質土
2. 暗黄灰色砂質土 (炭灰を多く含む)
3. 黒灰色炭灰

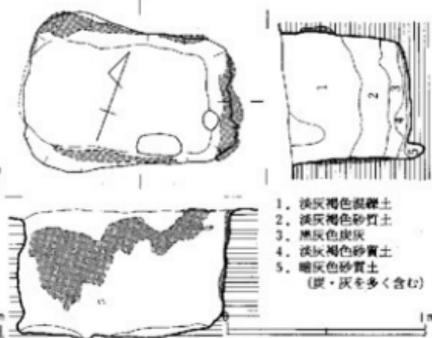


Fig.45 SK116 実測図 (1/30)

1. 淡灰褐色凝縮土
2. 淡灰褐色砂質土
3. 黒灰色炭灰
4. 淡灰褐色砂質土
5. 暗灰色砂質土 (炭・灰を多く含む)

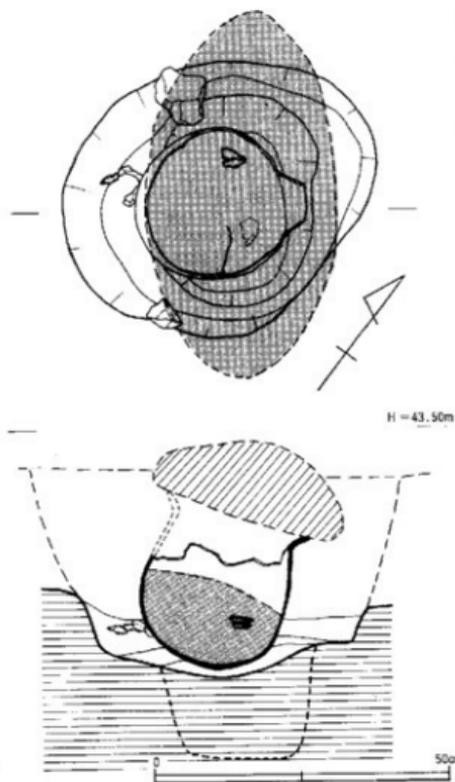


Fig.46 SX135 黄測函 (1/20)

山形部分から出土したものである。図示したものは全て須恵器で、特に SB71~73 下で多く検出している。57 は坏で口径 11.6cm、器高 3.6cm を測かる。58 も坏で口径 7.3cm、器高 4.1cm を測かる。59 は坏蓋で口径 13.3cm 器高 4.2cm、口唇内側に若干段が残る。60 は SB73 柱間の客土上面で検出されたもので、口径 14.7cm、器高 7.5cm、焼成がわるく灰白色を呈し、もろくなっている。VI 期の高坏である。61 は IIIA 期の高坏蓋、口径 15.8cm、62~64 は坏蓋で 62 が口径 10.8cm、63 が 11.6cm 64 が 12.2cm を測かる。この様に III~VI 期までの遺物が検出されるが遺物包含層を客土に用いた結果である。

この他、古墳時代後期を特徴づけるのは漁具の出土が目立つことで、III B~IV 期で SK16・186

のほぼ正方形を呈する。V4 グリッドに所在し、SB81 のすぐ隣である。方位も N-56°-E とこれに近い。掘方にもバラつきが有り径 35~120cm を測かる。深さ 38~75cm。柱穴は細く 12cm 前後。SB201 (Fig.40) は SB206・202 と同一のグループと考えられ、方位を N-11°-W にとる南北棟である。2 間×5 間の細長い棟で梁間 3.75m、桁行 8.4m を測かる。掘方は 40~110cm の円形で、柱穴は径 15cm 前後を測かる。SC259 を切っている。SB202 (Fig.41) は SB201 の棟ぞろいで N-7°~14°-W に方位をとる。規模は 2 間×3 間で梁間 4.2m、桁行 5.2m 掘方は 48~80cm の円形で深さは 15~40cm と残りは悪い。柱穴は径 18cm 前後である。

鉄滓はこの柱穴からも検出されており、SB69-43g・SB70-6g・SB73-20g・SB75-46g・SB76-253g・SB81-10g が出土している。少量のものは前代の遺物の混入とも思われるが、SB76 は 5 個の柱穴から最大 110g の検出を見ており、意図的に埋納されたものとも考えられる。

Fig.42 は V~W-1~4 グリッド、1 区の上に行なわれている客土による地

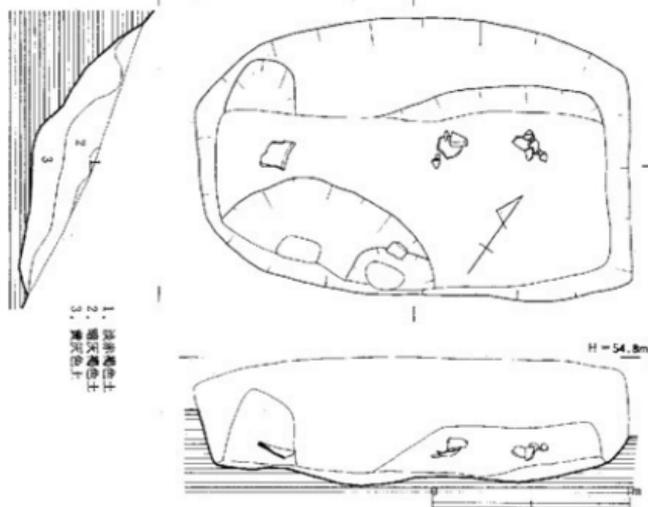


Fig.47 SK1 実測図 (1/30)

で管状土鍾1、SK49で
軽石製の浮子2点、SC52
で同1点、鉄製鈎1点、
VI期でSK4で管状土鍾
3点SC31で同2点、鉄
製鈎1点、SC46で鉄製
薄刃鎌1点、SC56で軽
石浮子1点、SC36で鉄
製鈎1点SK238で鉄製
薄刃鎌1点を検出してお
り、VI期が目立つ。

(註) 日野尚志「筑前国早良
群野条里」『史学研究』
第99号

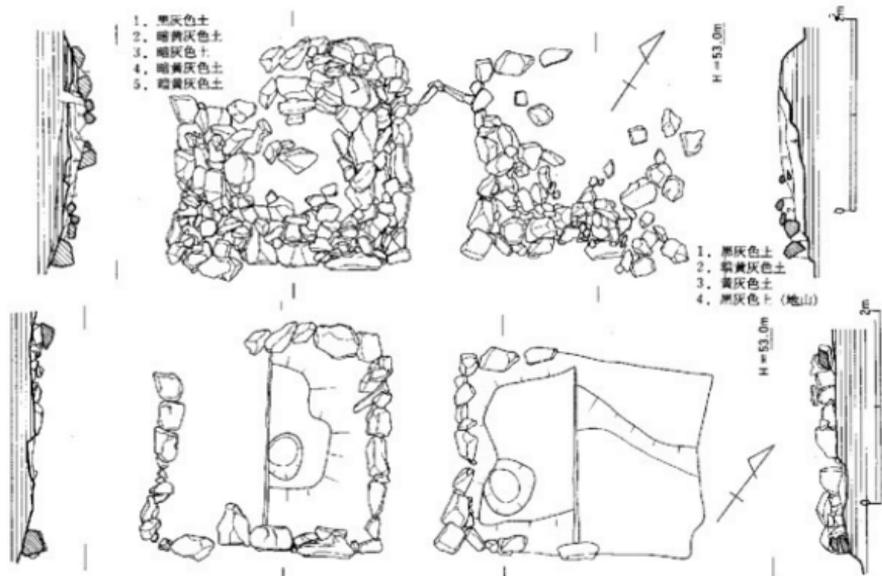


Fig.48 SX7 実測図 (1/40)

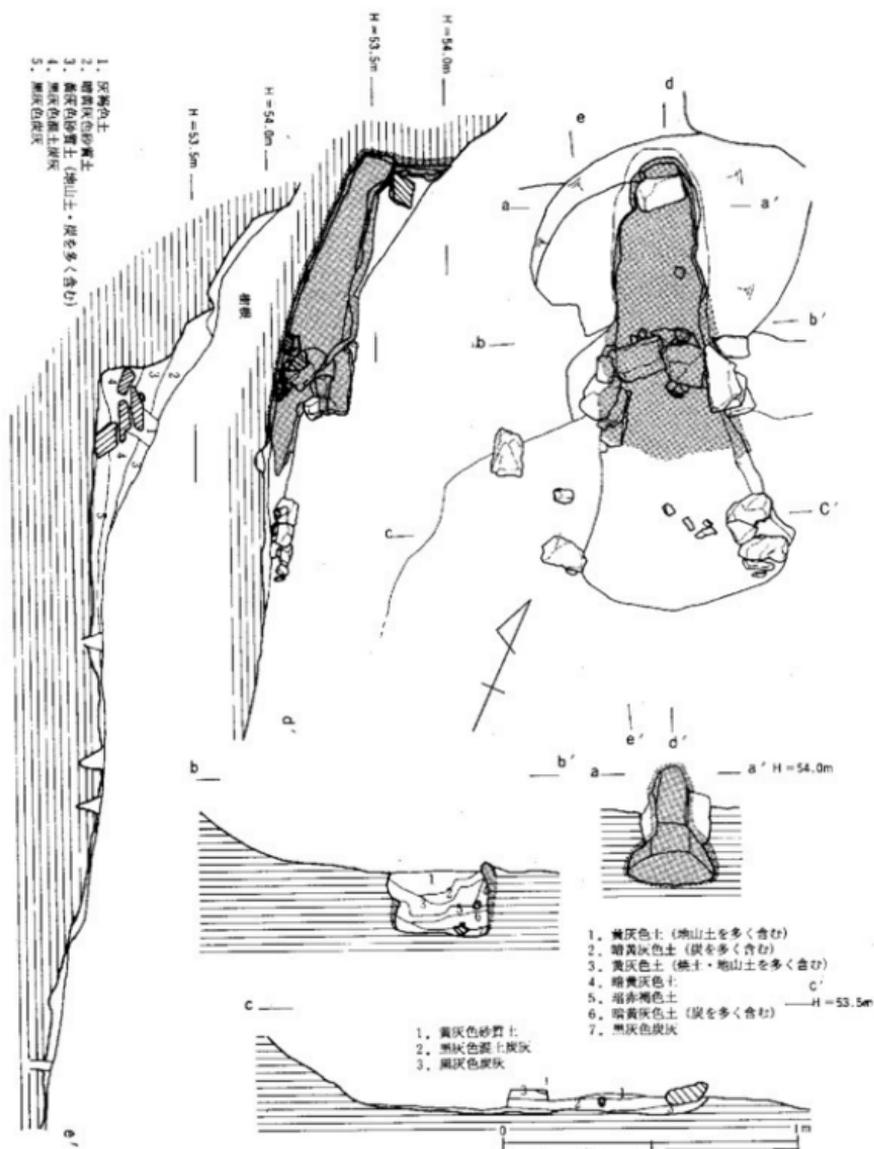


Fig.49 Si-3実測図 (1/40)

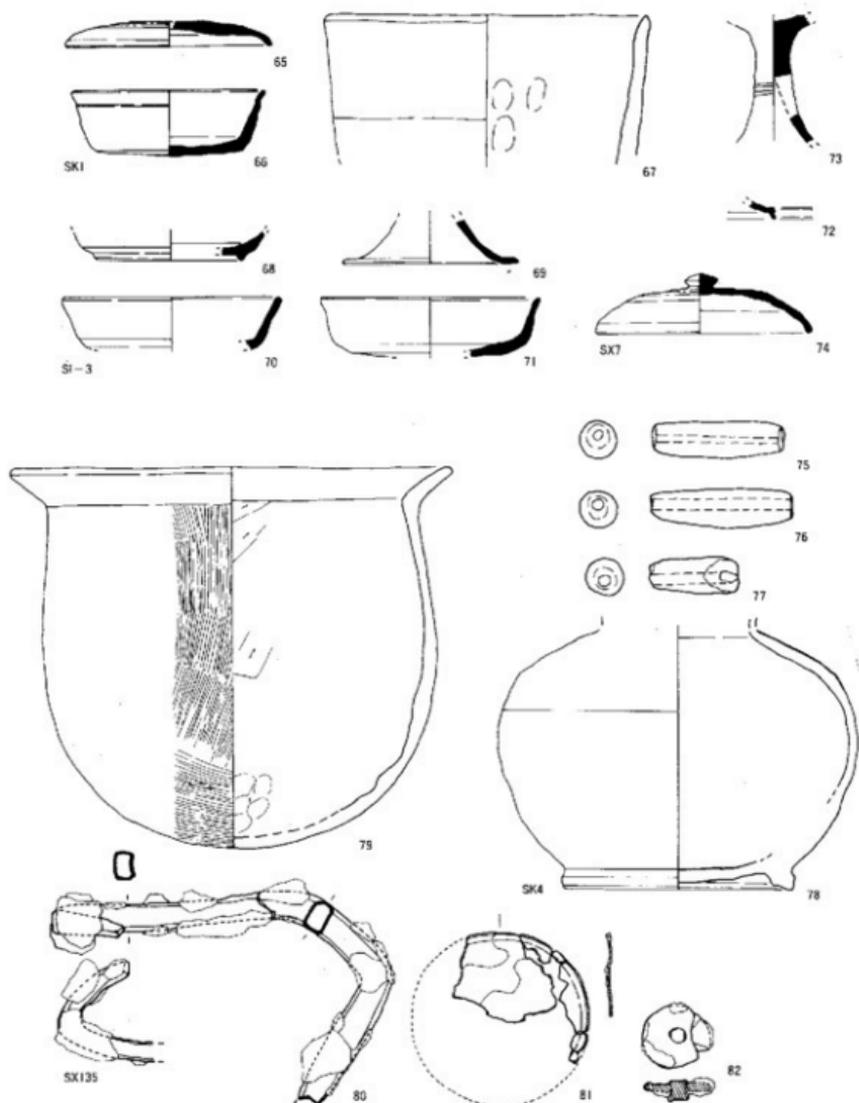


Fig.50 奈良時代遺構出土遺物実測図 (1/4~1/2)

奈良時代の調査

土壌 (SK) 調査区全域に分布しており、29基は焼土壌、7基は廃棄物処理の土壌である。

焼土壌 SK4 (Fig.43) は138×88cmの長方形のプランを持ち深さ50cmを測かる。四壁は厚く焼け部分的に床上に崩落している。底には5cm程炭粒、灰が堆積する。遺物が少ないのが焼土壌の特色の一つであるが、これは登窯の横に有って使用後、廃棄物の処理に使われた様で時期の決め手となる遺物を得られた。Fig.50-75~77は、管状土鍾でそれぞれ4.4×1.3cm、4.8×1.3cm、3×1.3cmとほぼ規格化されている。78は灰軸の甕で口縁を欠くが、胴径24.5残高17.8cmを測かる。球形の胴部に外に若干張り出し気味の台形の高台がつく。畳付の内側は若干凹線気味になる。軸は外全面と内面底部にかかり、特に肩部に厚くかかる。淡緑灰色を呈し、胎土は灰白色。多々良込田遺跡から同様の短頸甕が検出されている。プロポーションは良く似ているが、バチ高台であり、本例より先行すると思われる。猿投窯産であろう。SK113 (Fig.44)、SK116 (Fig.45) はともに残りが良く、それぞれ100×55cm、108×67cmの長方形で55cm×65cmとかなり深い。他の検出例は深さ30cm程が多く浅い印象を受けていたが、本来はこの様に深いものであった様である。SK1 (Fig.47) は廃棄物処理用と考えられ、登窯 SI 3 の北側に位置し、同窯製の須恵器を検出している。220×150cmの楕円形で斜面であるため半分は流失している。遺物 (Fig.50-65~67) は全て須恵器で、焼きあがりは悪く軟質で淡灰~黒灰色を呈する。

火葬墓 (SX135 Fig.25) T13グリッドの包含層上層中より検出され、検出時、自然礫の蓋石が乗っていた様で、重機稼動中に捨ててしまっており確認できていない。破線部は作業員の証言より復原した。径50cm程の円形の土壌の底面に破鏡 (Fig.50-81) と鉄器 (同-80・82) を入れ、その上に口径30cm・器高26.4cmの土師甕甕 (同-79) を置き容積の半分程焼骨を納め、70×30cm程の長い自然礫で蓋をしていた様である。

石組基壇状遺構 (SX7 Fig.48) SB100・71上の包含層上層中で検出しており、この黒灰色土が地山となっている。西側が2.4m四方、東側2.1m四方を測かる。地山を台形に削り出し、自然礫の面を外側にそろえて正方形に組み、主体はその内側に径50~60cm深さ10cm程の環状の穴を掘り黄灰色土で埋め戻している。内部は何も検出できなかった。上面を自然礫ですき間なく覆っているが、中央部に礫の空白部が有り、石塔などの上部構造が乗っていた可能性が有る。

登窯 (SI3 Fig.49) X 1グリッドに有り、風を集束させるためか斜面を4m程舟底状に削り、その底に窯を開いている。焼成部1.6m燃焼部1.7m、焼成部幅60cm高さ32cmの極めて小さな登窯で、主軸をN-30°-Wにとる。一度壁が落ちたのか、煙出し部と焼成・燃焼部の境、燃焼部の一部を自然礫を積み上げ補強している。窯体内の焼成・燃焼部の境に1段積み障壁としている。灰原も3m四方程しか広がっておらず、操業は2回程しか行なわれていない様である。出土遺物 (Fig.50) は68が須恵器甕で底径9.8cm、69が高環脚部で径12cm、70・71は坏でそれぞれ口径14.9×15.0cm器高4.2cm程で規格性がうかがえる。色調は緑灰色で焼成は悪い。

(2) 広石古墳群VI地点

概要

小形の箱式石棺、壺棺を除いて5基の古墳が出土した。全て叶岳から伸びる丘陵の南斜面に位置するが、1号墳と2～5号墳は小さな尾根によって区切られている。本来は支群として区別した方がよかったかも知れないが、ここでは広石古墳群の第VI群として

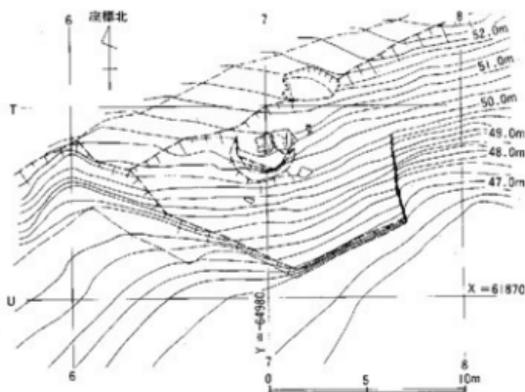


Fig.51 広石古墳群第VI群1号墳現況測量図 (1/300)

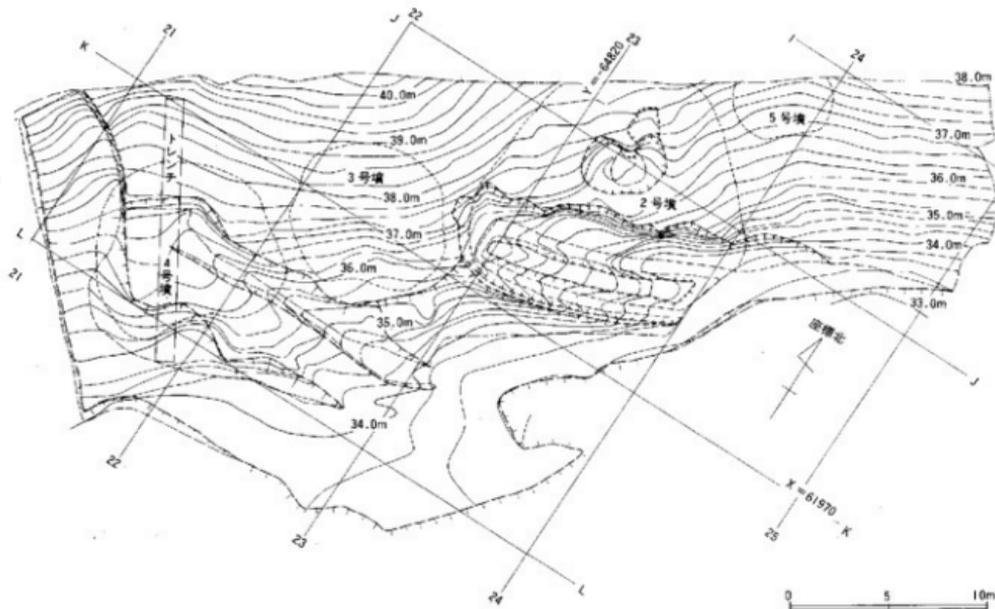


Fig.52 広石古墳群第VI群2号～5号墳現況測量図 (1/300)

まとめておきたい。第VI群の北側には第I群から第IV群までの古墳群が分布しており、1977年西陵高校建設に伴って発掘調査が行なわれている。周辺には4～5基単位の古墳群が多く分布する。今回調査した第VI群5号墳のすぐ北斜面にもう一基古墳が存在したが、範囲外であったので調査から除外した。第VI群の数はさらに増加するものと考えられる。

1号墳 (Fig. 51～57, PL. 7)

T7区を中心として位置し、かなり急な南斜面のやや窪んだ場所に造営されている。標高は50mで、調査前は天井石以外ほとんど墳丘を確認することができなかった。1基のみで、周辺には他に古墳は見受けられない。

墳丘は、先ず花崗岩パイラン土の地山を「L」字状に整形し、1段深く掘り窪めて石室を設け、盛土を行なっている。墳形は東西に長い楕円形

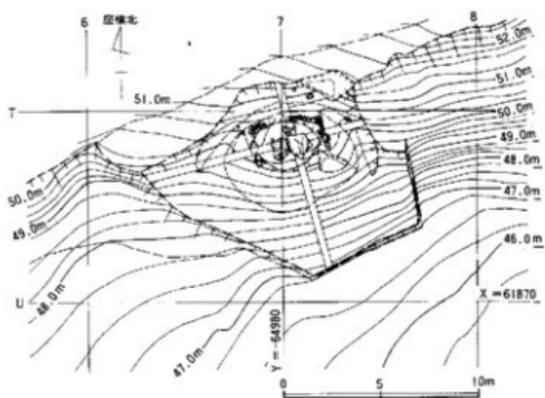


Fig.53 広島古墳群第VI群1号墳墳丘測量図 (1/300)

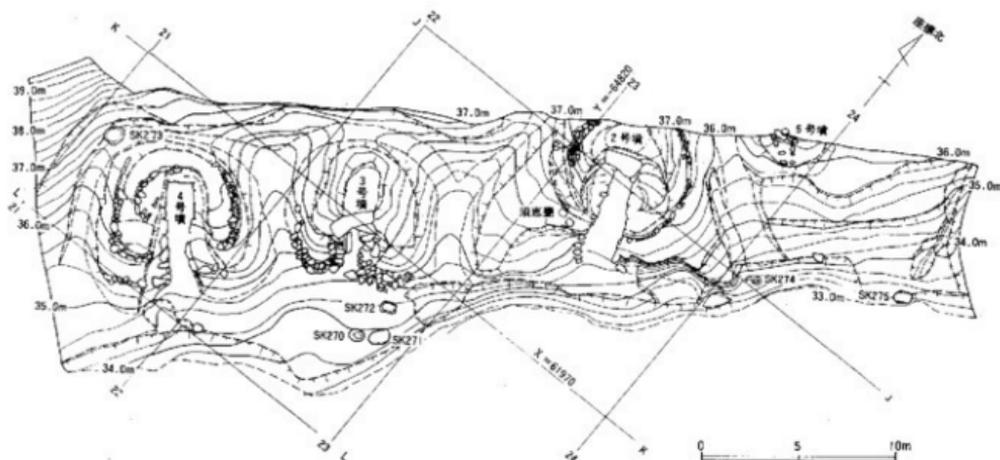


Fig.54 広島古墳群第VI群2号～5号墳墳丘測量図 (1/300)

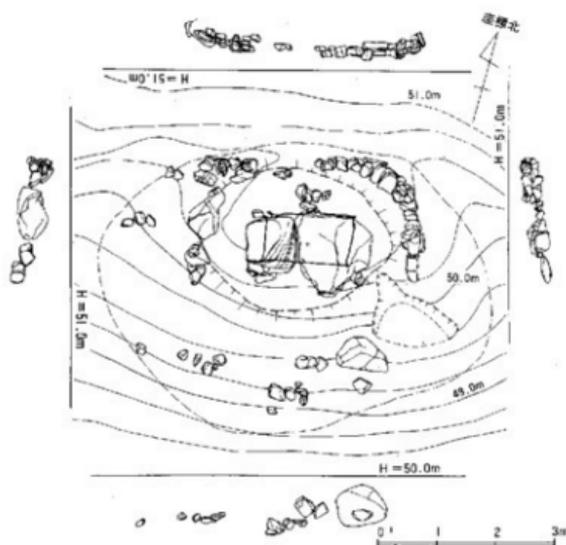


Fig.55 1号墳墳丘外環列石出土状況図 (1/100)

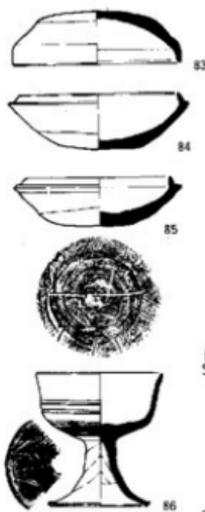


Fig.56 1号墳周溝出土遺物実測図 (1/4)

を呈し、周溝底面で東西6.2m、南北4.0mになるものとみられる。南側は墳丘が流出してはつきりしない。墳丘上には20~30cmの花崗岩礫による列石が隅丸長方形に巡る。墳丘外護のために並べられたものであろう。

石室は、竪穴状の小石室である。横穴式石室と同じ技法で作られているが、横口は取り付かない。墳丘と同じく東西方向に主軸を取り、内法で1.45m、南北0.8mを測る。側壁

は、北側が2石、両小口及び南側側壁は1石で構成され、さらにそれぞれ1石積んで天井石を架構する。天井石は、2枚のり、東側が厚くて大きく、西側の方はやや小振りである。床面には敷石が施され、10~30cmの平たい石が並べられている。南側は盗掘によって敷石が除去されている。

遺物は、既に盗掘に会っており、石室内からは鉄製の破片以外殆ど出土をみなかった。墳丘周辺からも若干須恵器を採集したが、1号墳に伴うものかはつきりしない。1号墳の築造年代を知るには、周溝底から出土した須恵器がある。

Fig.56-83は甕蓋である。口径11.1cm、器高3.7cmを測り、厚味のある作りである。灰白色を呈し、焼成が悪い。84・85は甕身で、84が口径10.5cm、器高3.9cm、85が口径9.7cm、器高3.4cmを測り、85がやや小さい。共に蓋受けの立ち上がりは内傾し短い。厚ぼったい作りで、底部に3分の1程度の回転ヘラ削りが認められる。85はヘラ記号が付く。86は無蓋高

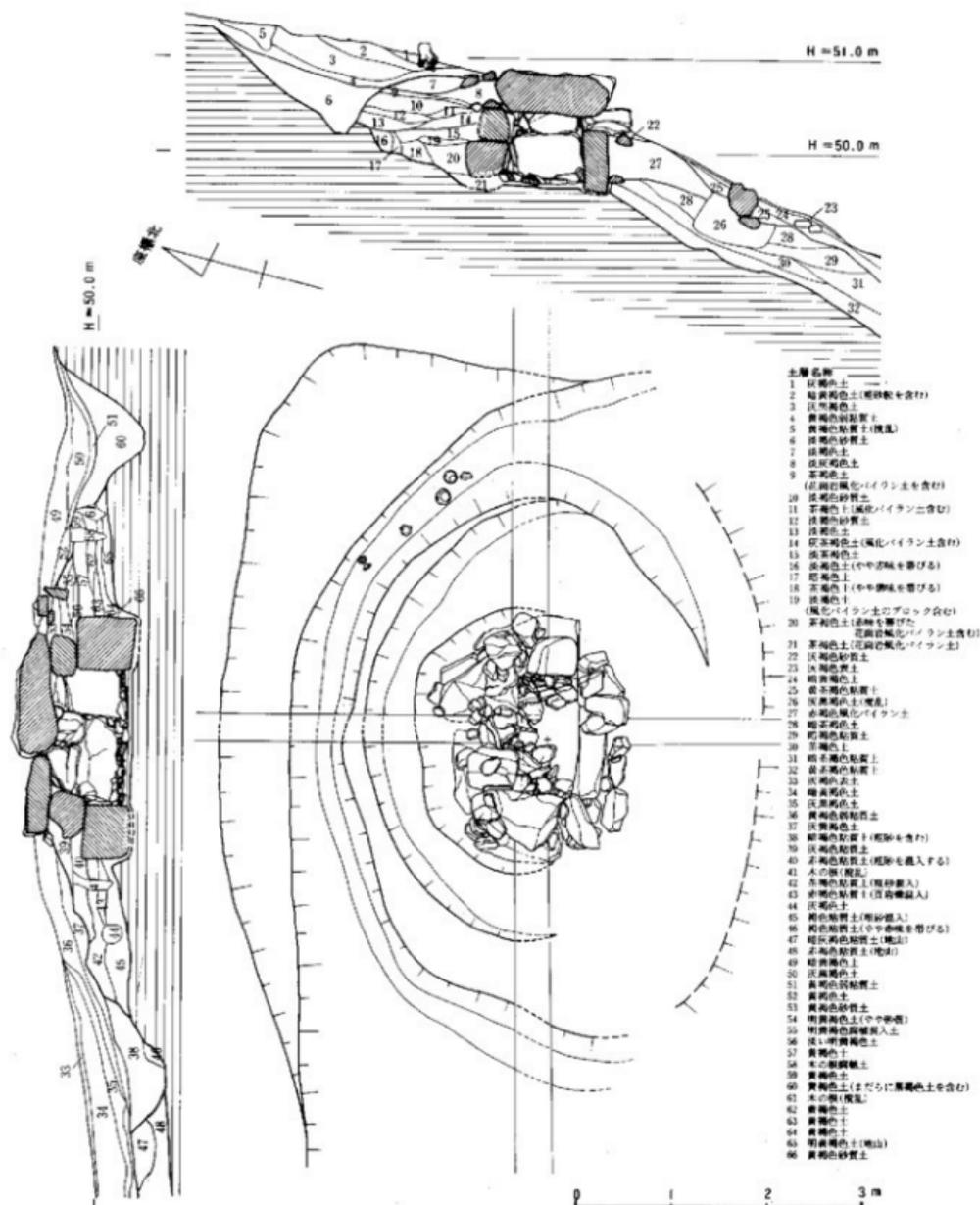


Fig.57 I号墳石室、周溝出土状況及び土層断面実測図 (1/60)

坏である。器高9.3cm、口径8.3cmで、暗灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。坏部には沈線が2条はいり、下半部はカキ目が施される。

1号墳出土の須恵器は、須恵Ⅳaに属すると考えられ、築造年代は、6世紀末から7世紀初めとみられる。追葬については、西側の天井石に小振りの石が選ばれており不可能ではないが物証に乏しく、はっきりしない。

2号墳 (Fig.58~60, PL.7)

第1調査地点の東端部、丘陵南側斜面に位置し、4基の古墳が並んで造営されている。2号墳はこれの中でも中心部にあって、最も大きな古墳である。調査前は、榎石が抜き取られて玄室上部が開口していた。現況で確認できた古墳は2号墳1基のみで、あとは後世の土砂に厚く埋もれていた。

墳丘は、下方が馬蹄形状、上方が円形を呈する。墳丘の一部は未調査区へ伸びており、また、前面は最近の攪乱で破壊され、全体の規模がはっきりしないが、下方の最大幅は東西14.0m、南北も14.0m程度になるものと考えられる。羨道中央部から2段の列石が玄室を取り囲むように巡り、径7.0mで急に円丘状に盛り上がる。羨道部左側の平坦部と円丘状に盛り上がる境には須恵器の壺が2個供献されていた。列石は下段を第1列石、上段を第2列石とすると、第1列石は1段ないし2段残存し、第2列石は6段程残っている。第1列石の西側及び第2列石の東側は墳丘下に流出していた。使用石材は20~30cm大の花崗岩礫である。

石室は、単室両袖形の横穴式石室で、岩盤の花崗岩風化土を掘り窪めて設置されている。石室平面形は、ほぼ方形の玄室に幅広の羨道が接続する。石室全長は6.4mで、主軸はN-21°-Eにとる。玄室は幅、長さ共に2.1mの方形で、両側壁及び奥壁は1枚の巨石を腰石にしている。腰石の上にはさらに60~80cmの礫を2~3段持ち送り気味に積み重ね、一枚石の天井石を架構する。床面から天井石までは1.9mを測るが、盗掘によって床面敷石が剥ぎ取られているので、本来はもう少し短かったものと思われる。玄門部は幅1.4mで玄室に対して幅広く、締りのない形態になっている。右袖石は1石の縁位置、左袖石は2石の積み重ねで構成されている。羨道部は袖石から殆どそのままの幅で接続し、両側壁とも1m前後の巨石を3石横位にすえ腰石としている。腰石の上にはやや内傾して転石が1~2段積まれる。天井石は既に抜き取られていて存在しなかった。羨道床面には榎石が2箇所設けられる。それぞれ平たい石を2石づつ組み合わせており、榎石間には敷石が認められる。入口側の榎石(第1榎石)の上には閉塞石が5~6段残存している。10~30cm大の平たい石を中心に石室側に面を揃えて長さ1.5mにわたって整然と積まれている。入口側に広がっている石は崩れたものである。

墳丘土層堆積状況を見ると、4群から5群の層群に分けることができる。最下部は腰石を設置して埋め込まれた土層群で、基盤の花崗岩バイラン土を中心に、硬くタタキ締められており、裏込めに栗石が詰め込まれている。次に側壁の積みあげと盛土が交互に行なわれ、層群の変り

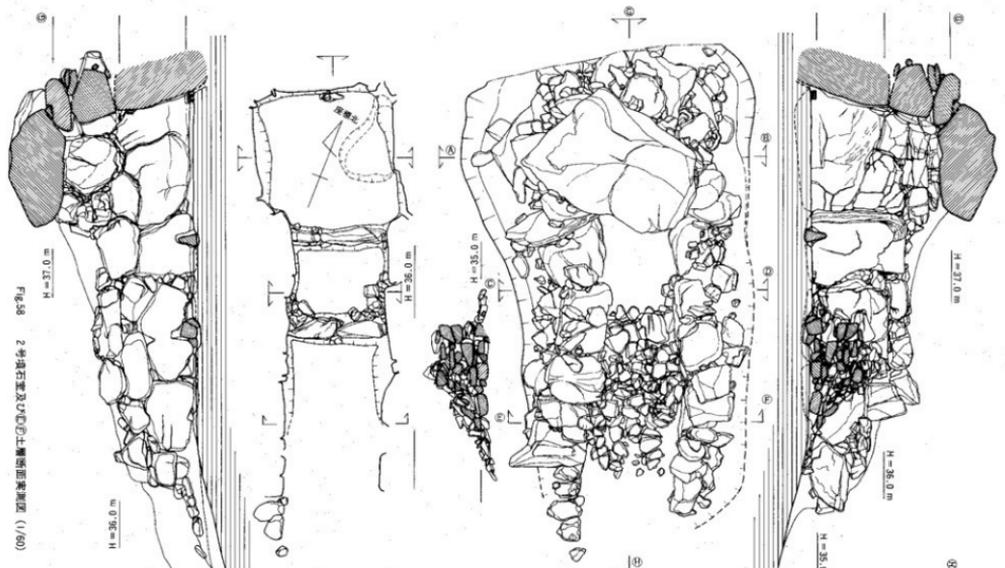
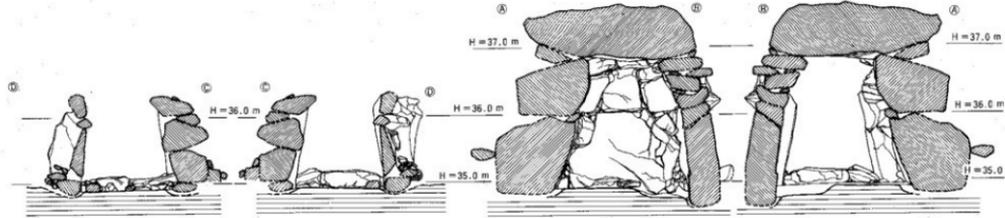
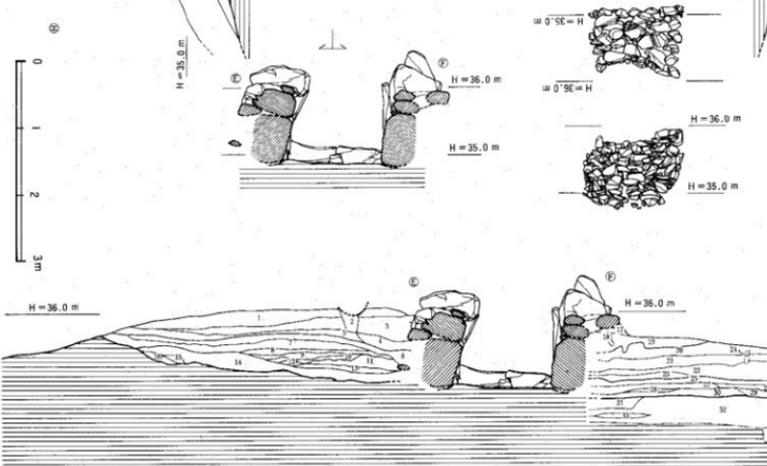
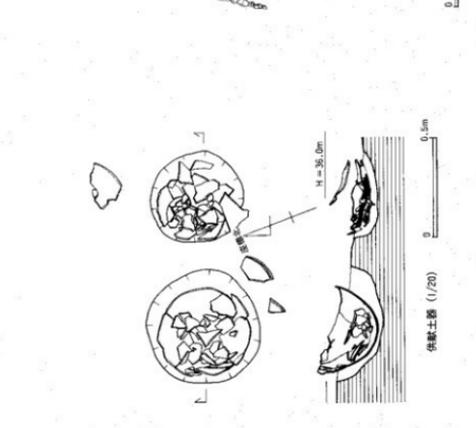
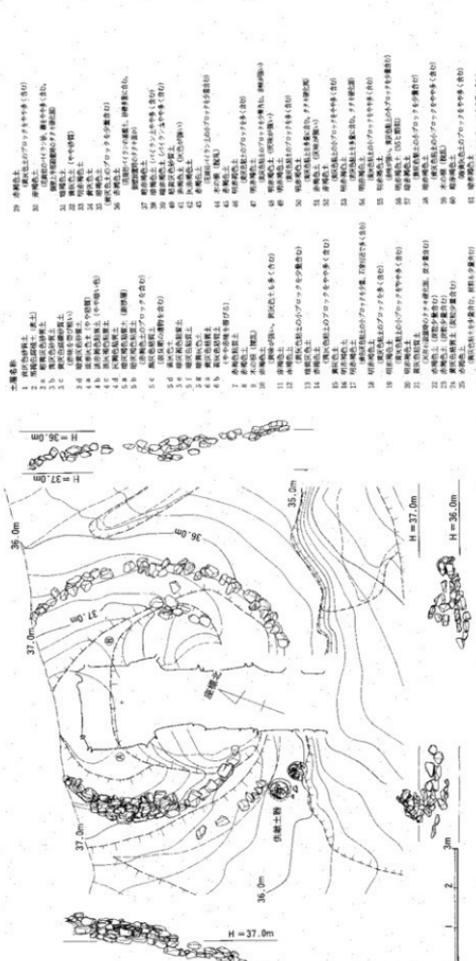


Fig. 38 2号墳石室及びその土層断面測量図(1/50)

- 土層名物
- 1 墳頂部土(中や中強を拂ひ)
 - 2 埋設物及びレンガ
 - 3 墳頂部土(中や中強)を拂ひ、曲線の凹部内(イワン)土を含む
 - 4 墳頂部土(中や中強)を拂ひ、凹部内(イワン)土を含む
 - 5 墳頂部土(中や中強)を拂ひ
 - 6 墳頂部土(中や中強)を拂ひ、砂礫、砂礫を含む
 - 7 墳頂部土(中や中強)を拂ひ
 - 8 墳頂部土(中や中強)を拂ひ
 - 9 墳頂部土
 - 10 墳頂部土(中や中強)を拂ひ
 - 11 凹部内土(中や中強)を拂ひ、砂礫土を若干含む
 - 12 凹部内土(中や中強)を拂ひ
 - 13 凹部内土(中や中強)を拂ひ
 - 14 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 15 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 16 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 17 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 18 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 19 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 20 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 21 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 22 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 23 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 24 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 25 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 26 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 27 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 28 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 29 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 30 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 31 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 32 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 33 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 34 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 35 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 36 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 37 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 38 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 39 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 40 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 41 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 42 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 43 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 44 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 45 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 46 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 47 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 48 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 49 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 50 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 51 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 52 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 53 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 54 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 55 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 56 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 57 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 58 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 59 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 60 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 61 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 62 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 63 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 64 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 65 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 66 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 67 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 68 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 69 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 70 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 71 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 72 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 73 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 74 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 75 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 76 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 77 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 78 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 79 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 80 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 81 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 82 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 83 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 84 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 85 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 86 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 87 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 88 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 89 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 90 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 91 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 92 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 93 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 94 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 95 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 96 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 97 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 98 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 99 砂礫土(中や中強)を拂ひ
 - 100 砂礫土(中や中強)を拂ひ





土質名表

1. 砂質土 (表土)
 2. 砂質土 (中層)
 3. 砂質土 (下層)
 3.4. 砂質土 (硬質)
 3.5. 砂質土 (硬質)
 3.6. 砂質土 (硬質)
 3.7. 砂質土 (硬質)
 3.8. 砂質土 (硬質)
 3.9. 砂質土 (硬質)
 3.10. 砂質土 (硬質)
 3.11. 砂質土 (硬質)
 3.12. 砂質土 (硬質)
 3.13. 砂質土 (硬質)
 3.14. 砂質土 (硬質)
 3.15. 砂質土 (硬質)
 3.16. 砂質土 (硬質)
 3.17. 砂質土 (硬質)
 3.18. 砂質土 (硬質)
 3.19. 砂質土 (硬質)
 3.20. 砂質土 (硬質)
 3.21. 砂質土 (硬質)
 3.22. 砂質土 (硬質)
 3.23. 砂質土 (硬質)
 3.24. 砂質土 (硬質)
 3.25. 砂質土 (硬質)
 3.26. 砂質土 (硬質)
 3.27. 砂質土 (硬質)
 3.28. 砂質土 (硬質)
 3.29. 砂質土 (硬質)
 3.30. 砂質土 (硬質)
 3.31. 砂質土 (硬質)
 3.32. 砂質土 (硬質)
 3.33. 砂質土 (硬質)
 3.34. 砂質土 (硬質)
 3.35. 砂質土 (硬質)
 3.36. 砂質土 (硬質)
 3.37. 砂質土 (硬質)
 3.38. 砂質土 (硬質)
 3.39. 砂質土 (硬質)
 3.40. 砂質土 (硬質)
 3.41. 砂質土 (硬質)
 3.42. 砂質土 (硬質)
 3.43. 砂質土 (硬質)
 3.44. 砂質土 (硬質)
 3.45. 砂質土 (硬質)
 3.46. 砂質土 (硬質)
 3.47. 砂質土 (硬質)
 3.48. 砂質土 (硬質)
 3.49. 砂質土 (硬質)
 3.50. 砂質土 (硬質)
 3.51. 砂質土 (硬質)
 3.52. 砂質土 (硬質)
 3.53. 砂質土 (硬質)
 3.54. 砂質土 (硬質)
 3.55. 砂質土 (硬質)
 3.56. 砂質土 (硬質)
 3.57. 砂質土 (硬質)
 3.58. 砂質土 (硬質)
 3.59. 砂質土 (硬質)
 3.60. 砂質土 (硬質)
 3.61. 砂質土 (硬質)
 3.62. 砂質土 (硬質)
 3.63. 砂質土 (硬質)
 3.64. 砂質土 (硬質)
 3.65. 砂質土 (硬質)
 3.66. 砂質土 (硬質)
 3.67. 砂質土 (硬質)
 3.68. 砂質土 (硬質)
 3.69. 砂質土 (硬質)
 3.70. 砂質土 (硬質)
 3.71. 砂質土 (硬質)
 3.72. 砂質土 (硬質)
 3.73. 砂質土 (硬質)
 3.74. 砂質土 (硬質)
 3.75. 砂質土 (硬質)
 3.76. 砂質土 (硬質)
 3.77. 砂質土 (硬質)
 3.78. 砂質土 (硬質)
 3.79. 砂質土 (硬質)
 3.80. 砂質土 (硬質)
 3.81. 砂質土 (硬質)
 3.82. 砂質土 (硬質)
 3.83. 砂質土 (硬質)
 3.84. 砂質土 (硬質)
 3.85. 砂質土 (硬質)
 3.86. 砂質土 (硬質)
 3.87. 砂質土 (硬質)
 3.88. 砂質土 (硬質)
 3.89. 砂質土 (硬質)
 3.90. 砂質土 (硬質)
 3.91. 砂質土 (硬質)
 3.92. 砂質土 (硬質)
 3.93. 砂質土 (硬質)
 3.94. 砂質土 (硬質)
 3.95. 砂質土 (硬質)
 3.96. 砂質土 (硬質)
 3.97. 砂質土 (硬質)
 3.98. 砂質土 (硬質)
 3.99. 砂質土 (硬質)
 4.00. 砂質土 (硬質)

FIG. 59 2号塔心土層断面、横石外覆列石、筒敷土對出土柱及基脚 (1/20, 1/50, 1/100)

目は作業面となっていた為か硬くタタキ締められている。側壁積み上げ後、さらに硬くタタキ締められ、天井石を架構している。天井石を設置したあとは、外護列石を設け、土を順次積み上げ全体を被覆したものとみられる。本来はさらにこの上に盛土が施され、外護列石の被覆を含めて、墳丘の整形が行なわれたものと考えられる。

遺物 (Fig.60) は、石室が開けて盗掘に会っていたので、殆ど現位置を留めるものはなかったが、石室、羨道、前庭、墳丘とそれぞれ少量づつ出土している。石室からは須恵器坏身、羨道からは1個の金環、土師器の坏、側壁石組の間にはさまって鉄刀が出土している。閉塞石外側の前庭部からは、鉄滓、須恵器坏身・蓋、金環などがあり、墳丘には供献された須恵器甕の外に、須恵器坏身・蓋、紡錘車などが出土している。

87は坏蓋で、口径12.1cm、器高3.9cmを測り、青灰色を呈する。焼成は良好であるが、天井部外面の調整が粗雑である。前庭部出土。88は、石室からの出土で、口径11.8cm、器高4cmを測る。蓋受けの立ち上がりが短くなり、器形も小形化に向っている。89・90は須恵器の坏蓋と身で、89は口径7.8cm、器高3.8cmで擬宝珠のつまみが付き、90は口径8.6cm、器高3.1cmの無高台の坏である。共に焼成があまく灰白色を呈している。2号墳では最も新しい時期の遺物である。91は土師器の大形の坏で口径20.3cm、器高3.5cmとなる。明赤褐色を呈し器面の磨滅が著しい。羨道部からの出土である。93~94は銅地金張りの耳環で、93は径1.5~1.6cmで断面最大径は6mmとなる。羨道部出土。94は閉塞石外側から出土し、径2.4~2.6cmである。銅地金張りで断面最大径は8mmである。95は墳丘から出土した滑石製の紡錘車である。径3.5cm、厚さ1.8cm、孔径8mmを測る。

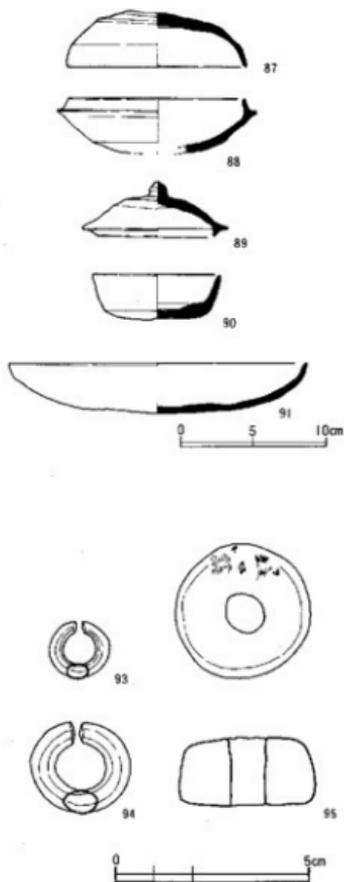


Fig.60 2号墳出土遺物実測図 (1/4, 2/3)

3号墳 (Fig.52・54・61～64, PL.8)

2号墳の西側に位置し、東側の周溝は2号墳と共有する。南側の傾斜面を地山整形して墳丘が造営されている。調査前は全く確認できず、墳丘上に2～3mの土砂が厚く堆積していた。墳形は馬蹄形を呈する円墳でやや小形の墳丘を有し、長さ幅ともに8mである。墳丘は、④④セクションで2m程残存していたが、既に天井石が露出していたので本来はもっと高かったものと考えられる。前庭部からの北高差は3.5mあり、前面から見上げると実際よりもかなり大きく見える。

石室は、両袖形の単室構造の横穴式石室で、主軸はN-29°-Wをとる。石室全長は、5.9mで両側壁ともほぼ等しい法量である。玄室は長方形プランを持ち奥壁幅、前幅ともに1.5mで、左側壁は2.1mを測る。右側壁は袖石が内側に入り込んでいるため20cm短かい。床面には、20～30cm大の扁平な礫の敷石があるが、前半部分は攪乱によって剥ぎ取られている。床面敷石から天井石までの高さは1.7mである。玄室の構造は、左右両壁に1m前後の平たい石を3石横位または縦位に立て、奥壁には2枚の礫を立てて腰石としている。腰石から上にはやや小振りの扁平礫を持ち送り状に5段積み重ね、断面三角形、平面方形の天井石を乗せる。袖石は玄室腰石よりもさらに小さい石を用い、幅1mの玄門を作る。羨道は、玄門と同じ幅1mで、袖石に接続する。羨道は両側壁に1石づつ大きな石を使用している他は、やや小振りの礫で構成されている。玄室及び羨道の側壁は一体化して積み上げられており、楣石は袖石に乗らず側壁に組み込まれている。羨道の天井石は細長い石が1石架構されているが、もう1石羨道部に崩落していたので、本来は2石あったものと考えられる。羨道には2箇所の楣石が設けられ、細長い礫で仕切られている。第1楣石の部分に面を揃え閉塞石が積みあげられる。20～30cmの礫が4～5段残存し、長さ1m弱に整然と積まれている。第2楣石(奥側)と閉塞石の間には、須恵器と土師器が一括で供献されていた。

石室は、岩盤の花崗岩パイラン土を掘り込み、設置されているが、墳丘盛土は墓壇掘削面から積み上げられている。2号墳と同じく4層群に分けることができる。先ずは墓壇の埋め土で、墓壇のパイラン土を主に使用している。次に側壁中位までは、パイラン土を含んだ粘質土が水平に大きく積まれる。側壁中位から天井石下端部までは、赤褐色土系のパイラン土や粘質土を含んだ土が細い幅で墳丘の傾斜に合わせて積み上げられている。石室側壁の裏側は青灰色の粘土で目貼りされ、栗石を裏込めにして石積みの安定を計っている。天井石下端部から上は幅の厚い層で盛られ、さらにこの上に盛土を行ない墳丘を整えていたものと考えられる。石室の大ききの割には盛土の大きさが小規模な古墳である。

外護列石は、古墳全体を巡らず、墳丘前面部を中心に側面の一部に配置されていた。調査時点で3～4段確認したが、かなり崩落している石もあり、本来はもっと高く積まれていたとみられる。列石は羨道端部から取り付き、側辺に行くに従って段が減少している。図化している

列石のうち、現位置を保っている石は少なく、全体に積み重なったまま、下端に少しズレていた。

出土遺物は、石室内、羨道、前庭部、墳丘及び周溝からそれぞれ出土している。石室内の遺物は、奥壁側に耳環と鉄滓、鉄器片があり、左側壁玄門側に須恵器の坏蓋と身が4個体あった。羨道部の第1柵石と第2柵石との間には10数個体の須恵器と土師器が供献されていた。前庭東側には須恵器の坏身と蓋が出土し、東側周溝底から銅地金張りの耳環が出土している。3号墳は深く埋没していたにもかかわらず、羨道部天井から進入して盗掘が行われていた。

Fig.64-101~104は石室内から出土した須恵器である。時期差があり追葬によるものとみられる。101は焼けひずみのある坏蓋で、口径11.8cm、器高3.6cmを測る。ヘラケズリは天井部のみで、その部分にヘラ記号がみられる。やや紫がかった暗灰色を呈し焼成は良好である。102は対になると考えられる坏身である。口径10.4cm、器高3.7cmで、紫がかった暗灰色を呈し、焼成

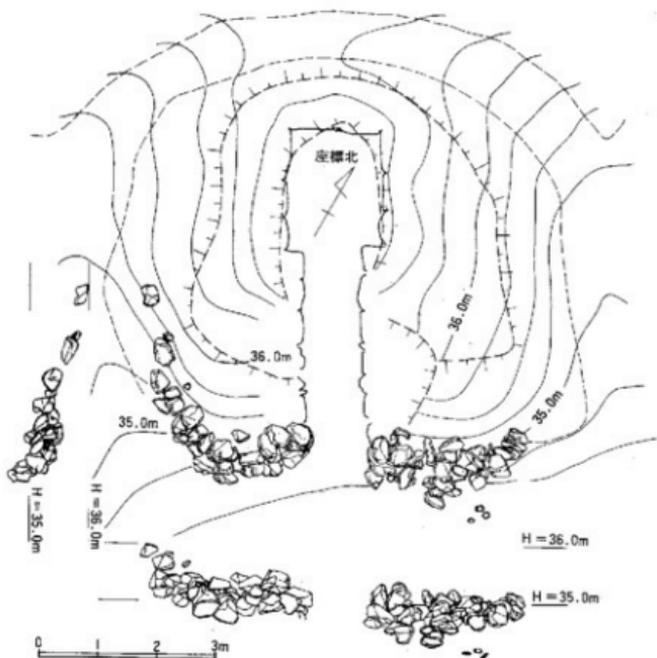


Fig.61 3号墳墳丘及び外柵列石出土状況実測図 (1/100)

は良好である。坏蓋と同様焼けひずみがある。103と104は内側にかえりのある坏蓋で、103には覆宝珠状のつまみが付く。対になる坏身は出土をみなかった。103が外径15.6cm器高3.8cmで、明るい灰白色を呈し焼成が悪い。天井部3分の1にヘラケズリが施される。104は外径11.6cm、器高1.8cmで赤茶褐色を呈し、焼成は良好である。天井部にヘラケズリが見られる。103、104は7世紀後半代で、3号墳の下限を示す。105～115は羨道部に供献された土器群である。109～113は土師器で、それ以外は須恵器である。105、106は対になる坏蓋と身である。蓋には覆宝珠状のつまみが付き、坏は無高台である。坏身の口径10.2cmで、蓋共に暗紫色を呈し、焼成良好である。107は無蓋高坏、108は甗である。高坏は器高9.1cmで、筒部に2条の沈線を入れ、脚端部は外へはね上る。甗は口径9.0cm、器高12.1cmで、体部上半に2条の沈線を施し、その間に刺突文を充填し、径1cmの孔が穿たれる。体部下半はヘラケズリが施され底面は平たく仕上げられている。109は高坏、110、111は丸底甗、112、113は碗である。109は口径12.3cm、器高8.5cmで脚部は折れて外方に広がる。外面にはヘラ磨きが施され、坏部内面には暗文がみられる。110は口径10.4cm、器高9cm、111は口径10.6cm、器高9.5cmで、外面及び口縁部内面はヘラ磨き、内面下半はナデ調整が施されている。112は口径16.4cm、器高6.4cm、113は口径15.8cm、器高6.1cmを測り、112は外面ヘラ磨き、内面ナデ調整、113は外面ヘラ磨き、内面もヘラ磨きで暗文状を呈している。体部中央にはそれぞれかすかな段が認められるが112の方がやや明瞭になっている。これらの土師器は全て明るい赤褐色を呈しており、胎土・焼成ともに良好である。114は平瓶である。口径7.2cm、器高16.2cmで胴部最大径は18.9cmになる。体部下半3分の1にヘラケズリが施され、底面にはヘラ記号がみられる。115は提瓶で、口径9.4cm、器高21.6cmを測る。把手は既に退化しており、体部にはカキ目調整が施される。茶味を帯びた暗黒色を呈し焼成は良好である。

Fig.62-96は石室内から出土したガラス白玉である。綠色を呈し、径0.85cm、厚さ0.5cmを測る。98は石室奥壁側で出土した銅地銀張りの耳環である。径2.5～2.7cm、断面最大径は0.7cmである。99は東側周溝、100は石室内から出土した銅地金張りの耳環である。99が径2.3～2.5cm、断面最大径は0.8cm、100が径2.6～2.8cm、断面最大径は0.9cmとなる。

4号墳 (Fig.65～67, PL.8)

3号墳の西側に位置し、調査前に20～30cm大の

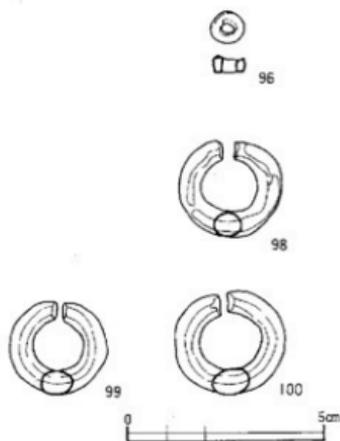


Fig.62 3号墳出土遺物実測図1 (2/3)

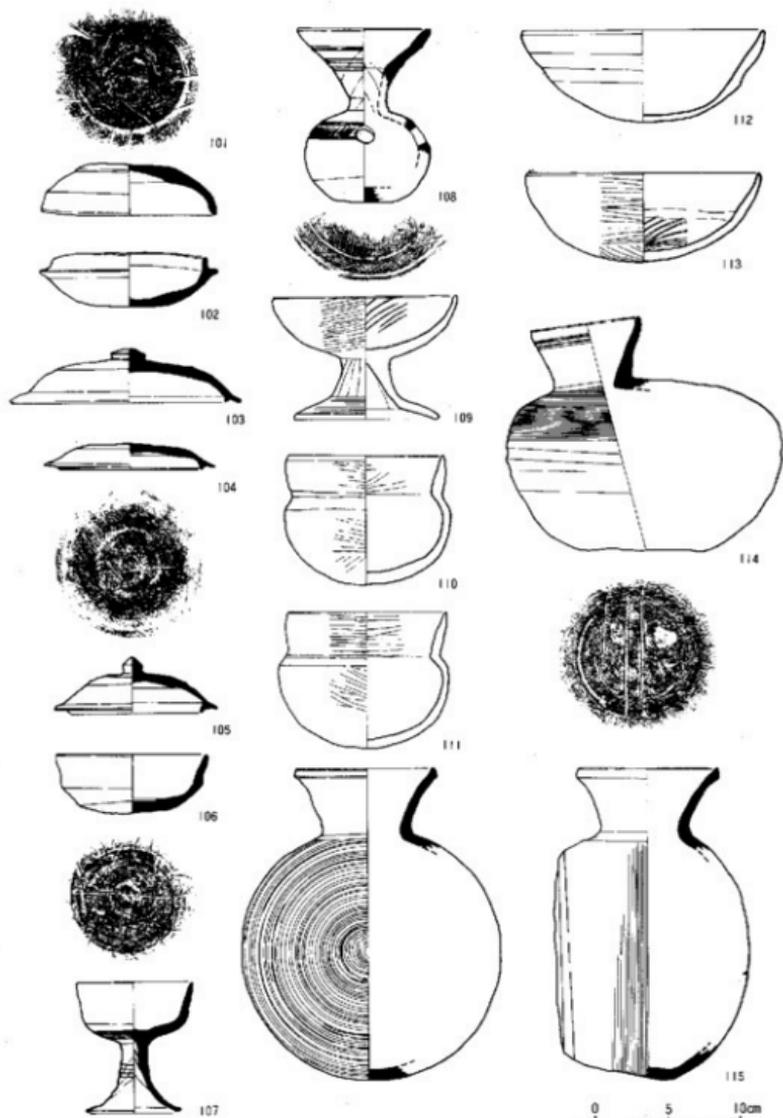


Fig.64 3号墳出土遺物実測図2 (1/4)

礫が散乱していたので、トレンチを入れて確認した。墳丘は馬蹄形状を呈し、上半部は後世の破壊によって殆ど残存していなかった。規模は周溝底で測ると幅、長さともほぼ9.5mである。東側の周溝は2号墳と共有する。

石室は、単室両袖形の横穴式石室で、主軸はN-40°-Wをとる。石室全長は、左壁が5.4m、右壁が4.9mで左壁がやや長い。玄室は長方形を呈し、奥幅1.5m、前幅1.6m、左側壁2.2m、右側壁2.1mを測る。各壁は1m前後の巨石を2石使用し、両側壁は横位に、奥壁は縦位に立てて腰石としている。側壁は腰石の上に1段しか残存していなかった。床面には敷石が施され2面確認できた。1面目は15~40cm大の不揃いの扁平礫を敷き詰め、2面目は20~30cm大の割と揃った扁平礫を丁寧に敷き詰めている。袖石は細長い石を縦位に立てて構成されているが、右袖石は左袖石に比べ短い。楣石を架構する場合は、右袖石にもう1石上積みが施されたと考えられる。玄門の幅は1mで、やや開き気味の羨道が接続する。羨道は玄室側に大きな腰石を使

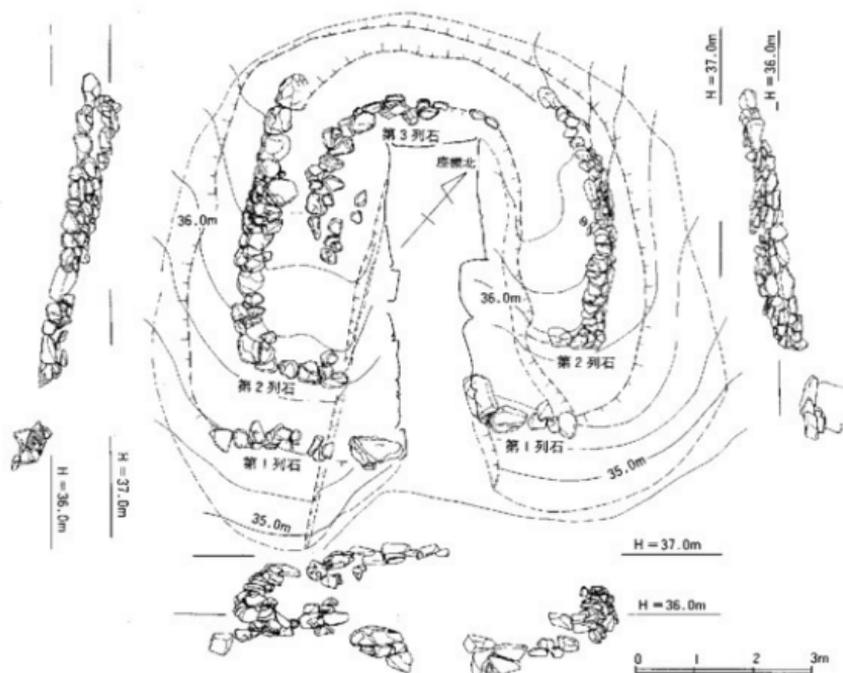


Fig.65 4号墳墳丘及び外環列石夫測図 (1/100)

用し、入口側は小振りの礫を積み上げている。閉塞は玄門部で行なわれたと考えられ、扁平な礫が平坦に積まれている。

外護列石は、墳丘が破壊されていた割には良く残っていた。3列認めることができ、南側から第1列石とすると、第1列石は羨道壁からそのまま接続し、東西に直線的に伸びる。第2列石は墳丘を馬蹄形状に取り囲むもので、前面及び側面は直線的に配列される。後方は円形に巡るとみられるが、全周していたかどうかははっきりしない。現存する石積みは前面で3段、側面で4段程度である。本来はもっと高く積まれていたと考えられ、崩落した石が多数出土している。第3列石は玄室の周囲を円形に取り囲むもので、玄室各壁の構築時における土留、石室の補強に使用されたものとみられる。

墳丘盛土は、3号墳と同様に4層群に分けることができる。石室は基盤の花崗岩パイラン土を掘り込んで設置されており、最下の層群は腰石中位までの埋土である。パイラン土の多く混入した土層である。腰石中位から側壁下端までは粘質土を中心とした土層で硬められている。奥壁側は砂質っぽい細かな層で構成される。側壁から天井石近くまでは、黄褐色系の土層が砂質や粘質土を交えて細かく盛られているが、西側は厚い堆積になっている。上の層群は外護列石と共に砂質の多い土層群が積みあげられ、天井石まで被覆していたものと考えられる。全体の墳丘整形は、さらにもう1層群盛土が施され、外護列石の被覆も計られていたものとみられる。

遺物は、玄室内第1面から須恵器坏身・蓋、鉄滓、奥壁左隅の腰石間から鉄製U字形鋤先が出土し、第2面では、須恵器坏、鉄鏃、鉄滓が出土。石室掘方からは鉄製U字形鋤先が出土し、羨道には鉄滓が供献されていた。墳丘からも現位置ではないが供献された須恵器が出土。

116は坏蓋で口縁内側にわずかな段を有する。口径12.8cm、器高4.1cmで、古墳築造以前の包含層から出土。117、118は墳丘から出土した須恵器坏蓋・身である。同じへら記号を持つ。119は墳丘盛土から出土した土師器の丸底甕である。へら磨き調整が施され、口径11.5cm。

石室内から出土した須恵器は、第1面が須恵Ⅳb～Ⅴ、第2面がⅣa～Ⅵで、盗掘にあっているため全ての時期を示しているとは限らないが、石室は6世紀末に築造され、7世紀中葉まで追葬や墓前祭が行なわれたものと推察される。

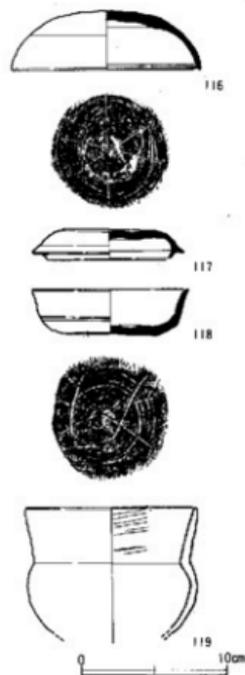


Fig.67 4号墳出土遺物実測図(1/4)

5号墳 (Fig.68・69, PL.8)

2号墳の東側に位置する。竪穴状の小石室を有する小円墳である。墳丘の3分の1が未調査区へおびる。墳丘径5.0m、残存墳丘1m弱である。

石室は、長さ1.8m、幅0.5m前後(内法)で、主軸はN-45°-Wである。腰石には長さ0.5m前後の扁平な礎を横位に立てている。側壁は腰石上から2~3段残るが天井石ははっきりしない。墳丘には、僅かながら外護列石が認められる。遺物は、石室内

から須惠Vの坏身・蓋のセットが4組以上出土している。追葬が認められない7世紀中葉の古墳である。

Fig.69-120は坏蓋で凝宝珠状のつまみが付く。外径9.4cm、器高2.7cmを測る。121は対になる無高台の坏身で、口径8.4cm、器高3.4cmである。ともに灰白色を呈し、焼成はよくない。

広石古墳群第VI群は、1号墳が支群的存在であるが、残りは群としてのまとまりは良い。築造順位は2号墳→3号墳→4号墳→1号墳→5号墳となる。2号墳は須惠III bの破片が数点出土していることから6世紀後半、1号墳、3号墳は須惠VI aが出土し6世紀末、4号墳が6世紀末~7世紀初め、5号墳が7世紀中葉と考えられる。追葬及び墓前祭は、2号・4号墳が7世紀中葉、3号墳は7世紀後半まで行われている。また広石古墳群第VI群の特徴のひとつは、墳丘に外護列石を持つことである。以後報告する笠間谷古墳群、野方古墳群D群にも外護列石が認められる。

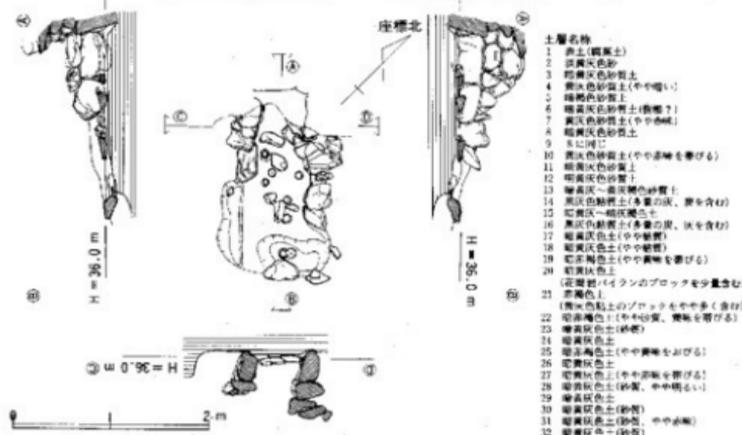
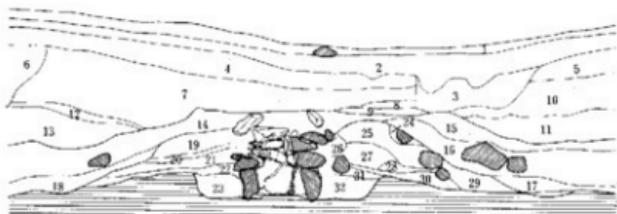


Fig.68 5号墳石室及び墳丘土層断面図 (1/60)

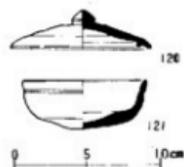


Fig.69 5号墳出土遺物実測図 (1/4)



(1) 1区全景（南東から）



(2) 5区全景（南から）



(1) 4区全景(南から)



(2) 3区全景(南東から)



(1) I区全景 (北東から)



(2) SK142 (南から)



(3) SC90(下)・91(上)・92(右) (南東から)



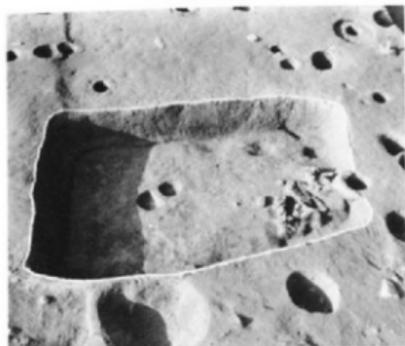
(4) SC52 (南東から)



(5) SC152(上)・153(下) (南東から)



(6) SC168 (東から)



(1) SC77 (南東から)



(2) SC34 竈 (南から)



(3) SKI67 (東から)



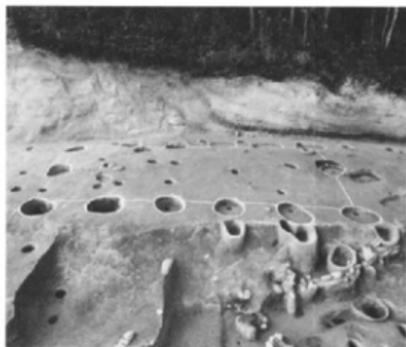
(4) SQ218 (北から)



(5) ST274 (南東から)



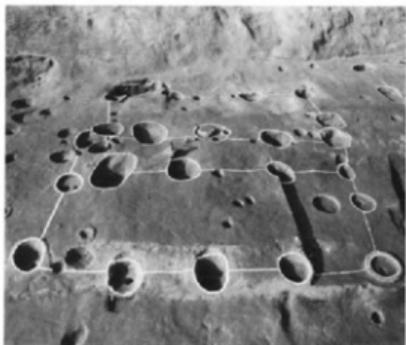
(6) SB73 (北東から)



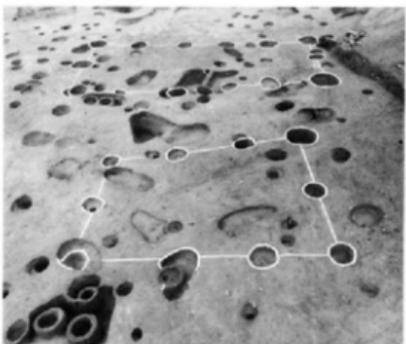
(1) SB73 (南東から)



(4) SB70 (東から)



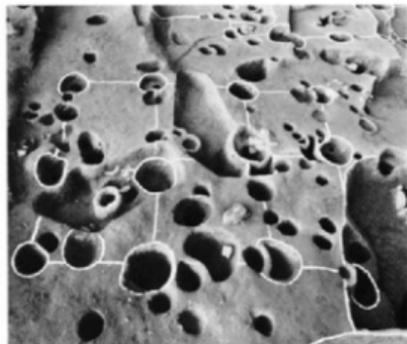
(2) SB71(上)・72(下) (南東から)



(3) SB201(上)・202(下) (東から)



(5) SB200 (東から)



(1) SB76 (南東から)



(4) SI-3 (南東から)



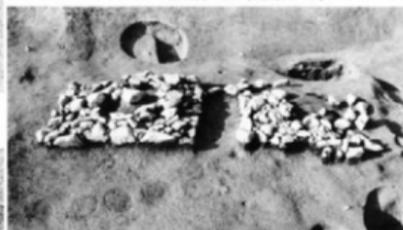
(2) SK113 (南西から)



(5) SX7 検出状況 (南東から)



(3) SX135 (北から)



(6) SX7 完掘状況 (南東から)



(7) SX7 内部主体 (南東から)



(1) 広石古墳群第Ⅵ群1号墳出土状況(南から)



(2) 1号墳石室・外護列石出土状況(西から)



(3) 2号～5号墳出土状況(南から)



(4) 2号墳出土状況(南から)



(5) 2号墳石室(南から)



(6) 3号墳出土状況(南から)



(7) 3号墳奥壁(南から)



(8) 3号墳羨道部遺物出土状況(西から)



(9) 4号墳出土状況(南から)

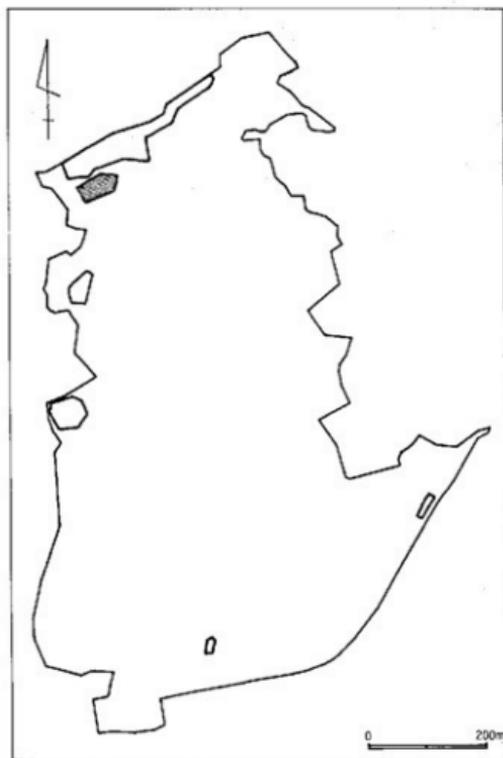


(10) 4号墳石室出土状況(敷石第2面)(西から)



(11) 5号墳出土状況(南から)

2. 広石遺跡群D地点・広石古墳群VII群
(第2地点)



遺跡調査番号	8721		遺跡略号	HRD-1・HIK-7	
調査地地籍	西区大字野方字名切谷		分布地図番号	104	
開発面積	60ha	調査対象面積	1,100m ²	調査実施面積	1,724m ²
調査期間	1987年6月29日～1987年10月09日			事前審査番号	58-1-170

2 広石遺跡群D地点・広石古墳群VII群（第2地点）

調査の概要

本調査区は叶岳の東麓、北東に延びる小支丘群のひとつ、名切谷川によって開析された標高49～61mの低丘陵の北西斜面に位置している。斜度22～28°の急斜面と7～8°の中位段丘上に立地しており、名切谷川をはさんで広石遺跡群C地点（第1地点）に相対している。

表土下30～150cm程で遺構検出面の花崗岩バイラン層～黄灰色砂礫層に達する。上部に黒灰～暗灰色土、下部に暗褐～黄灰色土の遺物包含層がある。

検出された遺構は旧石器～縄文時代早期頃の集石炉1、縄文時代と思われる土壇7（SK36・37・38・39・47・48・49）、古墳時代後期の竪穴住居址5戸（SC28・41・50・51・52）、焼土を有し溝を巡らす等の地山整形部8（SX15・25・26・27・32・54・55・62）、土壇7（SK01・02・09・10・24・43・60）、甕棺1、古墳1基、古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物5棟（SB64・65・66・67・68）、焼土壇16基（SK05・13・16・21・22・23・29・30・34・35・40・42・44・45・46・53）である。

丘陵斜面は主に古墳と甕棺、祭祠土壇（SK01・10）とによって墓域を形成しており滑石製勾玉2点を検出している。

掘立柱建物は竪穴住居址を切っており、これより後出すると考えられ、方位と重複関係から2時期にわたると考えられる。焼土壇は上部包含層下から、竪穴住居址等は下部包含層中から検出され、これらより後出する。

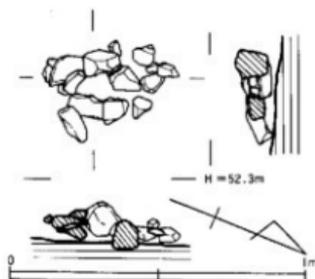


Fig. 1 SH20 実測図 (1/20)

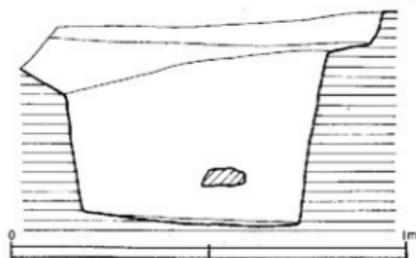


Fig. 2 SK38 実測図 (1/40)



Fig. 3 遺構全体図 (1/300)

(1) 遺構

集石炉 SH20 (Fig.1) SH20 は B3 グリッドの平坦部、黄灰色土中で検出された。5～10cm 程の花崗岩の自然礫が20個弱、平坦に寄せられ、いずれも火熱を受け黒ずむか赤く発色している。遺物の検出がなく時期の確定は難かしいが、旧石器～縄文時代早期と思われる。

土壇 Z8～B5 グリッドの斜面裾部分にかけ7基分布しており、円形 (SK36・38・39) と方形 (SK37・47・48・49) の2種類が有る。規模は円形が1.1～2.2m、方形で1.5～2.2m深さは0.4～1mを測かる。底面にピットを有するもの (39) と20cm程の礫を検出するもの (36、37、38、47、48) が有る。SK37 で古代の内黒土器2片が混入するのみで遺物の検出はないが、覆土は黄灰色土、黄灰色シルト質土で、第1地点の例を勘案すると縄文時代早期の可能性が高い。集合する有り方やピット、礫の検出などから落とし穴と考えられる。

竪穴住居址 5戸 (SC28・41・50・51・52) 検出しており、ⅢB期～SC41・50、Ⅳ期～52・51の2時期に分けられる。主軸をN-77°-88°-Eにとり丘陵稜線に平行するもの (28・41・52) とN-61°-Wの2グループが有る。平面プランは長方形で長軸を東西方向にとる。4本柱に竈・壁溝と定型化されたものが多く第1地点に比べ全体的に古い印象を受ける。

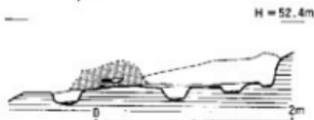
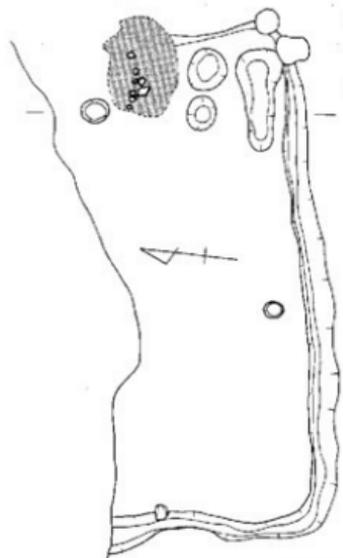


Fig. 4 SC28 実測図 (1/60)

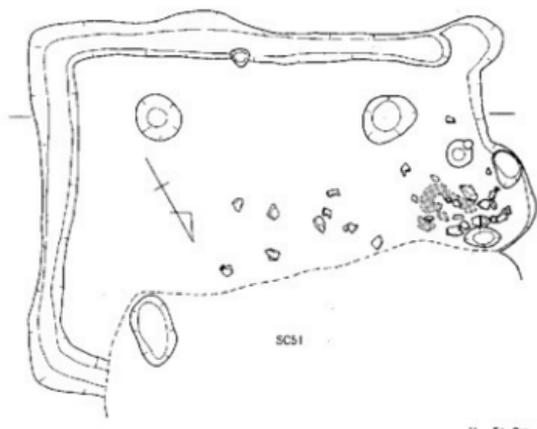


Fig. 5 SC50 実測図 (1/60)

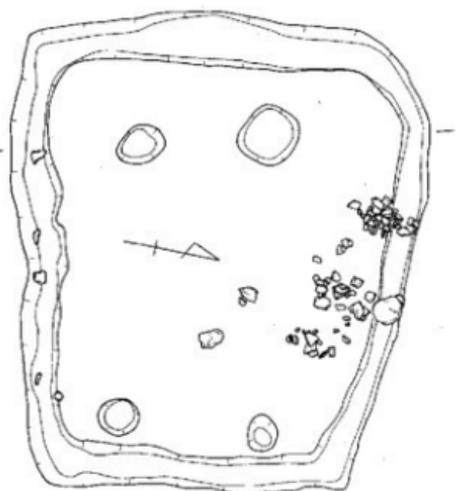


Fig. 6 SC28実測図 (1/60)

SC28 (Fig.4) B-4~5グリッドに有り北半をトレンチに切られるが、東西で5.3mを測かる。竈は東側中央にもうけられ土師器瓶・壺を検出する。支柱穴が明確でなく、A'タイプとなる。焼土塊SK16に切られる。

SC50 (Fig.5) A~B2グリッドに有り、他の住居と異なって主軸をN-61°-Wにとる。III B期の須恵器坏を検出しており、同方向をとるIV期の坏を検出するSC51に切られる。長辺で4.6短辺で3.9mを測かる4本柱で北東側の短辺の中央に竈をもうけている。竈をもうける壁以外の三壁に壁溝がめぐるが、南壁の壁溝の先端の延長部分の壁隅が丸く快れており、SC51も同様のプランで特色となっている。

SC52 (Fig.6) A6の交点に有り、東西5m、東壁3.1m、西壁4.3mの台形のプランを持つ。土器は北壁の中央部にまとまっており、竈がこの部分に有った可能性もある。4本柱で東西で柱間2.8~3.2m、南北で1.2~1.5mを測かる。壁溝は四周をめぐっており、定型化された住居である。焼土塊SK42に切られる。

掘立柱建物 資料の検討不十分であるためまだ多数の建物が有ると思われるが、現場で確認し得たのは5棟 (SB64・65・66・67・68) である。SB68が2×2間の総柱の他は3×4間~2×2間の側柱の建物である。長軸をN-79°~85°-Eにとるもの (SB64・68) とN-54°~60°-Eの地形に沿うもの (SB65・66・67) の2つのグループに分けられる。SB68が竈穴住居SC41に切っており、これに後出する様である。

SB64 (Fig.7) B2グリッドに有り、3×4間、4.4×5.2mで最大である。桁行をN-85°-Eの方位にとる。柱穴掘方は小さく30~50cm、柱穴は径20cmを測かる。

SB68 (Fig.8) A4グリッドに有る2×2間、3×2.5mの総柱建物で、SB64に近いN-79°-Eに桁行をとっており、SB68とは主屋と倉庫の関係かと思われる。掘り方は結構大きく径60~80cm、柱径は20~25cmを測かる。

SB66 (Fig.9) B~C3グリッドに有り、2×3間、1.9×3.5mを測かる。桁行をN-60°-

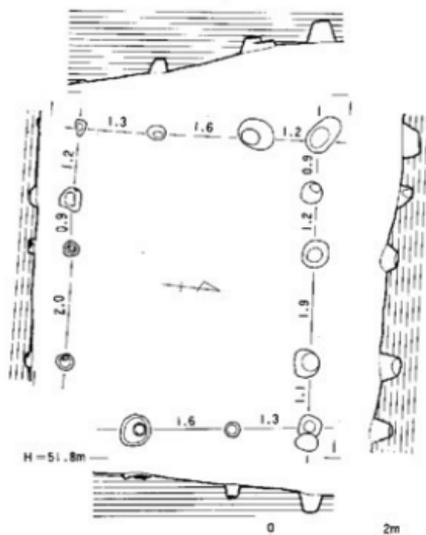


Fig. 7 SB64 実測図 (1/100)

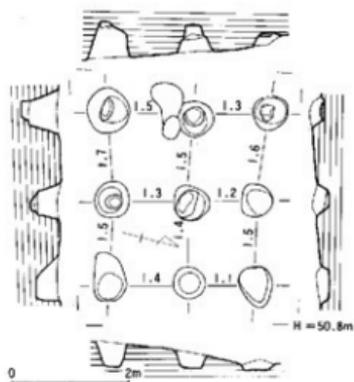


Fig. 8 SB68 実測図 (1/100)

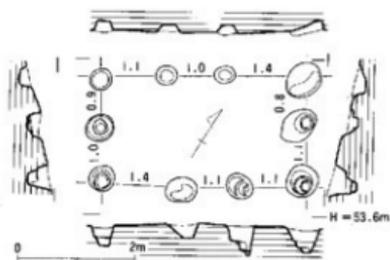


Fig. 9 SB66 実測図 (1/100)

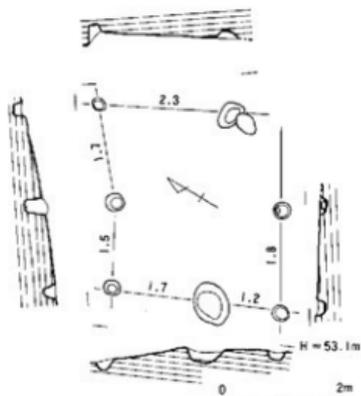


Fig. 10 SB67 実測図 (1/100)

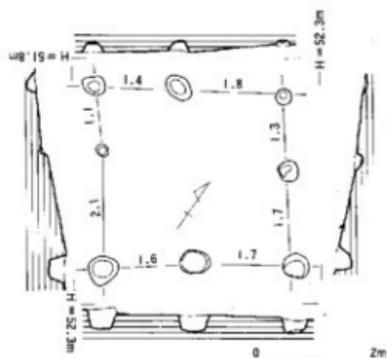


Fig. 11 SB65 実測図 (1/100)

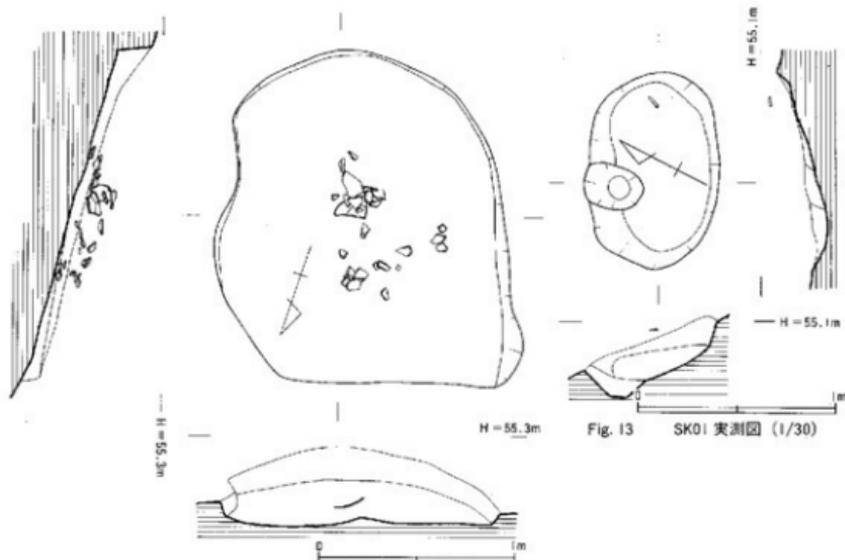


Fig. 12 SK10 実測図 (1/30)

Fig. 13 SK01 実測図 (1/30)

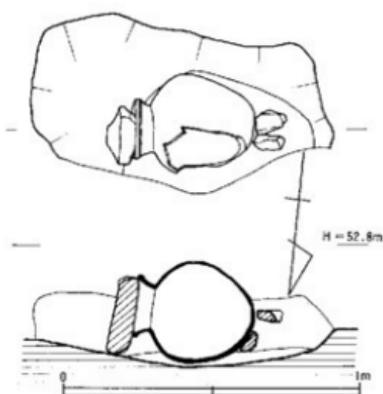


Fig. 14 ST03 実測図

Fig. 15 ST03 壁実測図 (1/6)

Eにとる。柱間が0.8~1.4と狭く、倉庫の可能性も考えられる。

SB67 (Fig.10) B4 グリッドに有り、桁行2間・梁行2間の3.2×2.9mの規模で柱列の乱れが目立つ。桁行の方位をN-55°~59°-Eにとり、SB66 を中にはさんでSB65 と対称の位置に

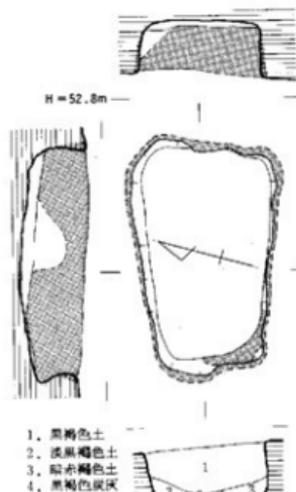


Fig. 16 SK13実測図(1/30)

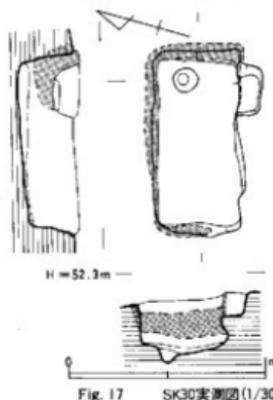


Fig. 17 SK30実測図(1/30)

行る。掘方は全体的に小さく径25~30cmを測かる。

SB65 (Fig.11) B2グリッドに有り、SB64と重複する。2間×2間、3.3m×3.0~3.2mの規模で、方位をN-54°-Eと、SB67と極めて近く、SB66を中に置いて緊密な関係に有ったものと思われる。

祭祠土壌 SK10 (Fig.12) C5グリッドの斜面上に位置し、VII-1号墳をはさんでSK01と対位置に有る。1.8×1.5mの浅い土壌で覆土は暗灰色土である。内部には、木目直交の平行叩きを施す特異な土師器甕 (Fig.19-1) 1個が破砕された状態で検出されている。

SK01 (Fig.13) C3グリッドに有り、長軸は陵線に平行する。1.1×0.65mの楕円形の土壌で内部より底から10cm程浮いた状態で滑石製の異形勾玉 (Fig.19-5) を1点のみ検出している。

甕棺 ST03 (Fig.14・15) C3グリッドでSK01の3m程斜面の上方に位置している。主軸をN-78°-Eにとる0.55×1.0mの方形土壌内に口径19.2cm、器高41cmの赤焼き須恵器の甕を口を東に横位に置き20cm四方の花崗岩の板石で蓋をする。主体の甕 (Fig.15) は玉縁状の口唇に肩の張る倒卵形の胴部を有する甕で胴部外面は木目直交縦位の平行叩きを施した後、粗い横位のカキ目を施す。内面は上半は同心円叩きを縦方向の指ナデでナデ消し、下半は横位の平行叩きをナデ消しており、別個に成形した上半、下半を接合している。

地山整形部 斜面裾部と平坦部西側に8ヶ所造成されている。尾根側を高さ0.4~1.5m程60°前後の急勾配で削り込み平坦部を造り出し、壁溝をめぐらすもの (SX15・25・55) と焼土部分を有するもの (SX26・32・55) が有り、甕や甗等の日常雑器を多く検出している。生活遺構と考えられるが、これに伴う柱穴が判然とせず上屋の有無を明確にし得ないが、粘土が赤変する程の火を用いており、小屋掛け程度の上屋の存在は考えられる。III B~IV期の須恵器を伴出するが、III B期が多くを占める。滑石製紡錘車の出土も目立つ。SX26・54では鉄鎌と鉄滓42gを検出しているが、鉄滓の検出は全体で1ヶ所のみで遺跡の性格は広石C地点と大きく異なる様である。

焼土壌 (Fig.16・17) 調査区全域に展開しており、16基を確認している。竪穴住居等の古墳

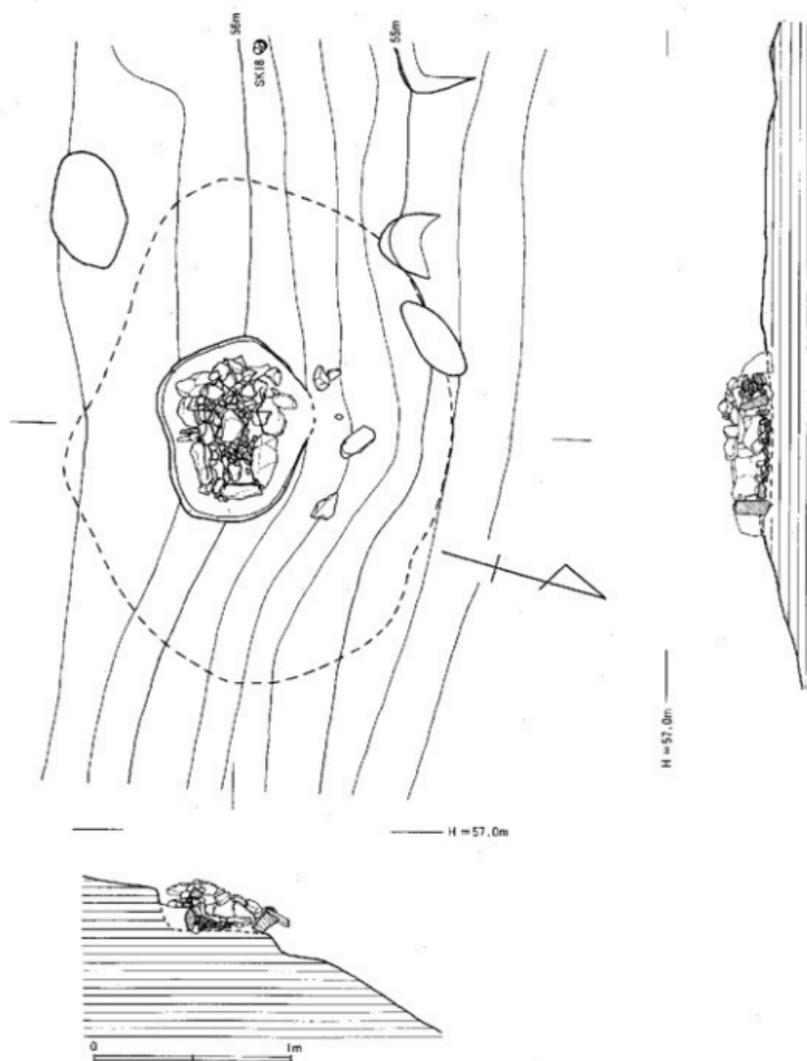


Fig. 18 VII群1号墳実測図 (1/60)

時代後期の遺構の検出面より5~20cm上方の黒灰色の上部包含層下で検出され、SK16・42・53はこれらを切っており、第1地点の成果を勘案するとほとんどが古代に属すると思われる。方位は稜線に直交するもの(SK34・45・53)斜行するもの(SK16・35・40)が有るが6割以上は稜線に平行する。四壁に粘土を貼るもの(Fig.16)と素掘りのもの(Fig.17)とが有るがいずれも5cm前後焼けており、床上5~10cm程炭粒が堆積する。

VII群1号墳(Fig.18) C4グリッドの丘陵斜面、56mの等高線近くに単独で位置している。斜面の立地であり、墳丘も径が3m弱と小規模であるため、墳丘の流失が激しく、石室の一部は概に表土上に露出しており、石室検出当初は中・近世墓と誤認した程である。

地山整形も大半が流れており微妙に平坦部が残る程度であるが、石室掘方の上半で等高線に沿って長さ5m幅1m程のテラス状の平坦部が削り出されている。墳丘盛土は全く残っておらず、十字にトレンチを入れ確認してもみたが地山の黄灰色土との識別はできなかった。墳丘の規模も地山整形によって削られた底部と石室部分との比高20~30cmの微妙な変化で推定できる程度で東西3m、南北2m程の円墳と思われる。墓壇は0.7×1m程の楕円形で尾根側で深さ20cm程を残すが谷側では流失しており、石室側壁も若干動いている。埋葬主体は横口式の小石室で主軸をN-75°-Eにとる。内法50×30cmの長方形のプランで奥壁は28×20cmの一枚で側壁は同程度の腰石を3個並べ上に小礎を2段小口に積んでいる。開口部は10×18cm程の板石を3個並べて壁としており、裏を小礎で埋めており、閉塞が壁を兼ねている。床面には5cm前後の礫を敷きつめている。遺物の検出はない。

(2) 遺物(Fig.19) 1はSK10より出土した土師器甕で口径21.6cm、胴径29cmを測かる。しまった頸部から口縁はゆるく長く外反し口唇部は凹線が施され、その上端は跳ね上がり気味に整形される。胴上半の外表面は木目直交の縦位の平行叩き後カキ目、内面は縦方向の指頭圧状のくぼみに細かな平行弧線が見られる。胴下半は斜位から横位の平行叩き後粗いカキ目調整・内面はやや巾広の平行弧線の当て具痕が見られる。器壁は薄く色調は桃黄~桃色を呈する。4も同系統の土師器甕でSC28出土。口径17.6cmと若干小振りで、口は大きく開き、短く外反するが造作は1と同様である。頸部外面は強くナデられて段を成し以下に木目直交の横位の平行叩きを施す。内面は器表の荒れが著しく細かな調整不明だが、指頭圧状のくぼみが残る。胎土は砂粒を多く含み桃色の発色を呈しており製塩に供された可能性が高い。1に類似のものは市域では五十川3次調査の6世紀後半SC07の甕内から、7世紀前後の下和白塚原古墳群山ノ下支群1号墳^(G1)の墳裾から、後期で同様の叩きを有する土師器としては灰石古墳群II-1号墳石室から、吉武K8号墳石室^(G1)から出土している。これらに先行して吉武遺跡群の5世紀中頃~後半の土壌・溝^(G5)から、有田遺跡群30次地点3号土壌^(G6)から同様の叩き、口縁部を持った半島軟質土器系^(G3)のものが出土しており、これら軟質系土器の強い影響下に成立し、強い伝統を残しながらその一部が製塩に供され、古代の「玄海灘式製塩土器」へと続く系譜の特異な土師器の一部に位置していると考えられる。2は1号墳の地山整形部付近で出土。5~10は滑石製品、11はメノウ12は軟玉の玉である。

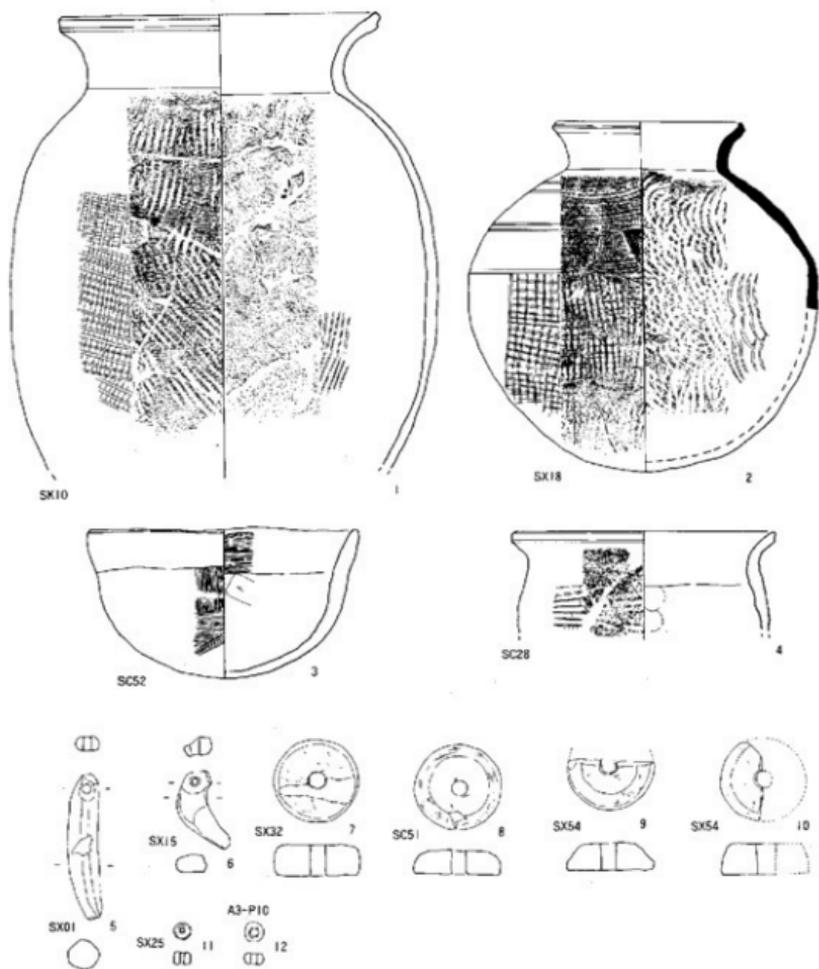


Fig. 19 出土遺物実測図 (1/4, 1/3)

- (註1)「福岡市中部地区埋蔵文化財調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第111集 1984年
(註2)「下和白塚原古墳群」 同55集 1980年
(註3)「灰石古墳群」 同41集 1977年
(註4)「重要遺跡確認調査Ⅰ」 同68集 1981年
(註5)「古武遺跡群Ⅰ」 同127集 1986年
(註6)「有田・小田部第Ⅲ」 同110集 1984年 1988年の下水調査でも検出報告未刊



(1) 調査区全景 (北から)



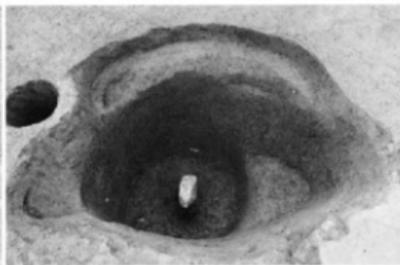
(2) 調査前風景 (北から)



(3) 調査区西半全景 (南から)



(4) SH20 (北西から)



(5) SK38 (北から)



(1) SC28 (北から)



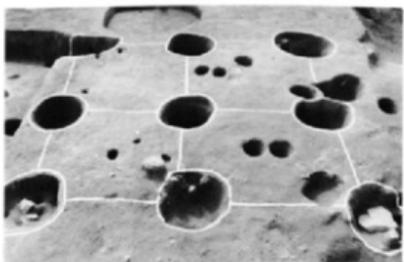
(2) SC50・51 (手前) (北から)



(3) SK42 (中央)・SC52 (南から)



(4) SB64 (手前)・SB65 (北東から)



(5) SB68 (南から)



(6) SB67 (南から)



(7) ST-03 (北から)



(8) SX54 (北から)



(1) VII-1号墳全景(北から)



(2) VII-1号墳検出状況(南から)



(3) VII-1号墳石室完掘状況(南から)

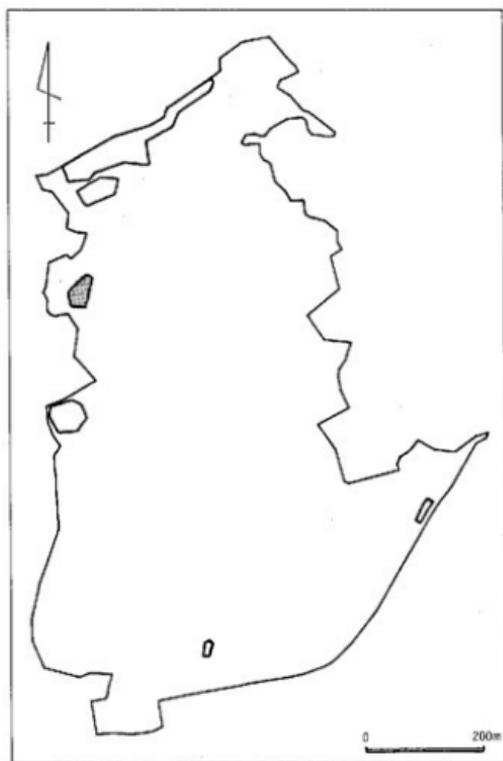


(4) VII-1号墳石室完掘状況(北から)



(5) VII-1号墳石室内(北から)

3. 名切谷遺跡 (第3地点)



遺跡調査番号	8710		遺跡略号	NRD-1	
調査地地籍	西区大字野方字名切谷		分布地図番号	104	
開発面積	60ha	調査対象面積	1,500m ²	調査実施面積	658m ²
調査期間	1987年6月12日～1987年7月18日		事前審査番号	58-1-170	

3 名切谷遺跡 (第3地点)

調査の概要

本調査区は開発域の中央部の山際、叶岳から北東へ延びる小支丘の南東側、標高57~66mの斜度21~66°の急斜面と9~10°の緩斜面に立地している。

現状は山林、表土下30~80cmほどで遺構面に達する。暗灰色土と黄灰色土の上下2層の包含層が有る。検出された遺構は旧石器~縄文時代早期にかけての集石炉1、集石1、古墳時代後期の地山整形部分4ヶ所、方形石組炉2、古墳時代後期~奈良時代の焼土壘3基である。

遺物は主に緩斜面部分と地山整形部から検出されておりコンテナ5箱分。石組炉を配する地山整形部付近の包含層より耳環を1、緩斜面包含層から鉄滓が溶着した精錬炉か鍛冶炉の炉体と思われる焼土と鉄滓を少量検出しており、付近に古墳時代~奈良時代の製鉄遺構の存在が考えられる。

(1) 遺構

集石炉 SH09 (Fig.1) T2グリッドに位置し、上面の集石 (SX11) 下に2.6×1.4mの楕円形プランで深さ70cm程の土壌が有り、床面から15cm程炭粒を少量混じる赤褐色土が堆積した状態で真赤に焼けた5~20cm程の自然礫 (花崗岩) が多数土壌の壁に沿うように検出されており、

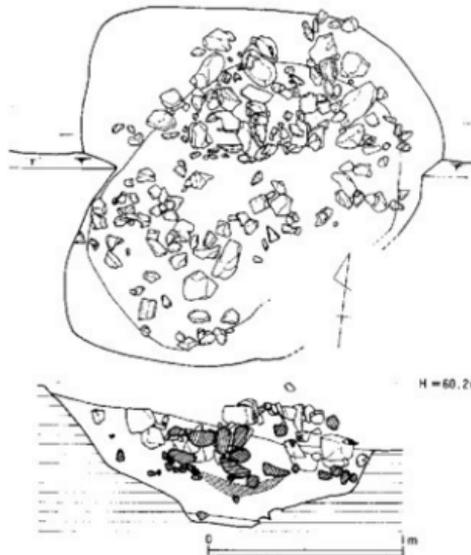


Fig. 1 SH09実測図 (1/30)

最下部に5cm程、炭混じりの焼土が検出されている。遺物が検出されなかったが旧石器から縄文時代早期にかけての集石炉と考えられる。

石組炉 (Fig.3) 急斜面部に4×15m~1.2×2.8mの方形の地山整形部 (SX10・12・13) が有り、中央の3×8mの隅丸方形の地山整形部 (SX10)の中央部とその斜面下に2基石組炉が検出されている (SH01・02)。SH01は方形の自然礫で75×70cmの内法で方形に組み、中央に35×10cmの方柱状の自然礫が支脚として立てられている。周囲には土師器壺、甗・須恵器等が散乱しており、日常雑器類と製塩に用いられたと思われる甕も検出している。柱穴は無い。

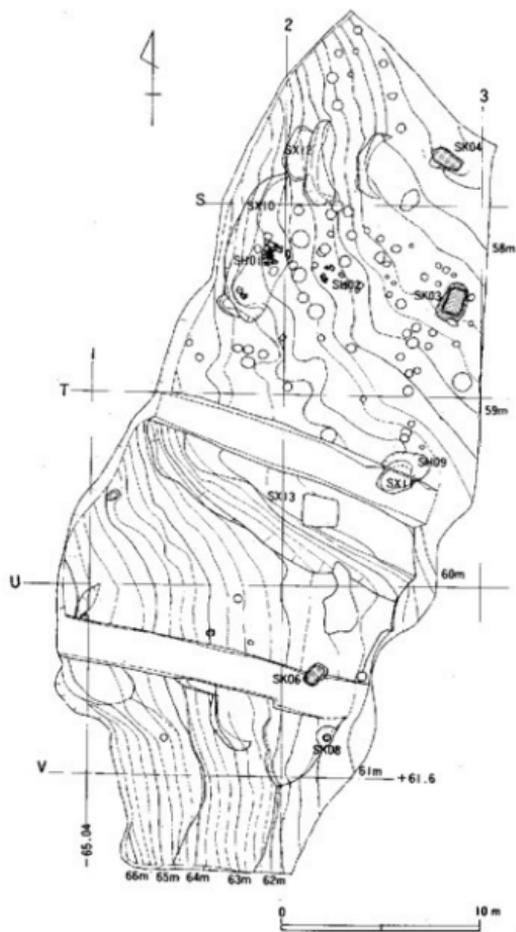


Fig. 2 遺構全体図 (1/300)

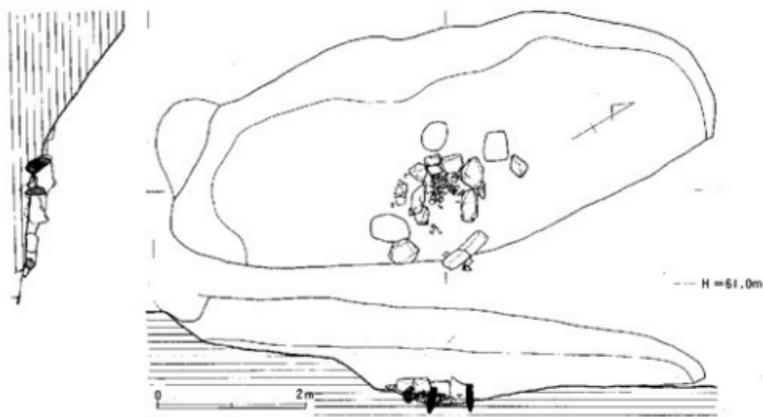


Fig. 3 SH01 実測図 (1/80)

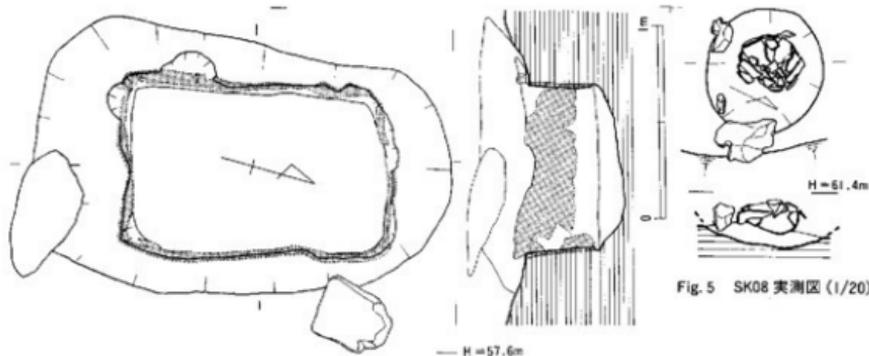


Fig. 5 SK08 実測図 (1/20)

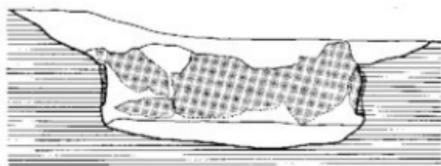


Fig. 4 SK03 実測図 (1/30)

焼土壇 (Fig.4) 焼土壇は丘陵斜面の裾に沿って3基 (SK03・04・06) 分布しており、N-17°-36'-Eに主軸を取り稜線に平行するもの (03・06)とこれに直交してN-62'-Wにとる04とが有る。長さ120~140cm・幅70~90cm・深さ20~60cmの方形で、四壁は厚さ2~4cm程焼け

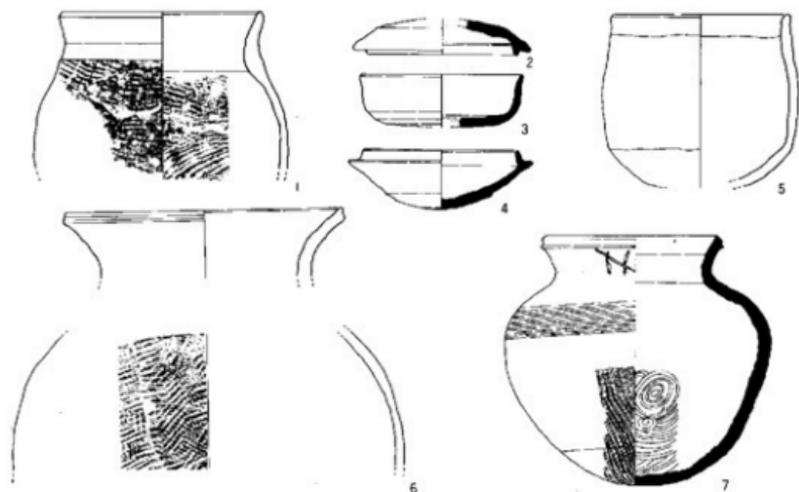


Fig. 6 出土遺物実測図 (1/4)

ている。内部には炭・灰が充満し遺物の出土は極めて少ない。

埋壺 SK08 (Fig.5) U 2 グリットに有り、径40cm程の円形の掘り方に床から5cm程離して須恵器の小壺をすえている。壺は(Fig.6-7)口径11.5cm器高17.2cmを測り、木目直交の叩成形の胴下半とカキ目とナデ整形の上半とを接合したものである。

(2) 遺物 (Fig.6) 1・3・6はSH01内、2・4・5はSX10からの検出である。1は土師器壺で口径13.8cm、使用中に破損した様で支脚の自然礫を取り囲む様に検出された。胴部外面は横位の木目直交叩き、内面に平行な弧線の当て具痕を残す。器面の剝落が著しく、一部赤く発色しており、製塩に用いられた可能性が高い。6は口径18.4cm、跳ね上がり気味の口唇上端・凹線気味の仕上げの口唇・胴部に施された木目直交の叩きを特徴とする一連の土師器壺で、色調は明燈色、内面の剝落が著しく、煮沸に用いられている。同様に製塩の可能性が考えられる。同種のもはSX13、包含層等から数個体検出されている。5はSX10の南隅で倒置した形で検出された。口径11.8cm、器高12cmを測る土師器の壺で外面の頸部下は縦方向の板ナデ、内面上半は斜位のケズリ下半は指ナデ、口頸部はヨコナデが施される。煮沸に供されている。SX10では他に外面に格子目叩きを施す須恵器系の土師器甕も出土している。2は須恵器坏蓋。天井部の半分程回転ヘラ削りを施す。口径10cm。3は須恵器坏、口径10.8cm・器高3.7cm。胴部下1/3程回転ヘラ削りを施す。4は須恵器坏で口径10.3cm・器高4.1cmを測る。胴部下1/3程回転ヘラ削りを施す。須恵器の時期はIV～VI期を示している。



(1) 調査前風景 (北東から)



(2) 調査区全景 (東から)



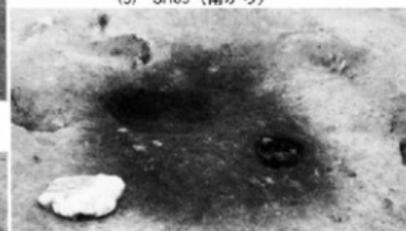
(3) SH01 (中央)・SH02 (手前) (南東から)



(5) SH09 (南から)



(4) SH01 近景 (南東から)

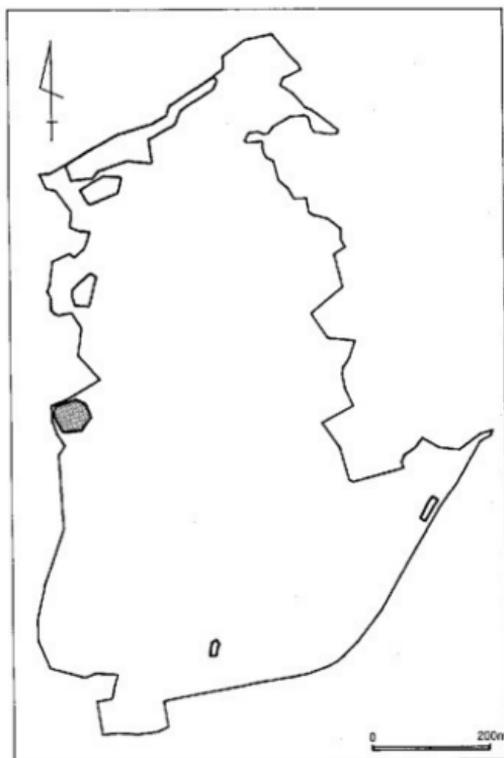


(6) SK03 検出状況 (北東から)



(7) SK03 完掘状況 (北東から)

4. 笠間谷古墳群 (第4地点)



遺跡調査番号	8821		遺跡略号	KMK	
調査地地籍	西区野方字笠間谷		分布地図番号	105	
開発面積	60ha	調査対象面積	2,700㎡	調査実施面積	2,669㎡+古墳4基
調査期間	1988年5月16日～1988年9月19日		事前審査番号	58-2-161	

4 笠間谷古墳群

概要

叶岳から東に伸びる丘陵尾根の先端部に位置する。南側と北側には小河川が東流し、丘陵先端部で合流する。標高は75mから87mをかぞえ、周りの尾根が急峻なので意外と平坦に見える。調査面積は2,669㎡で、もともと2基の古墳が確認されていたが、伐採後1基、表土除去後もう1基出土して、調査した古墳は都合4基になった。古墳群は、花崗岩の風化粘土や岩盤上に作られるが、風化粘土層には縄文時代早期の不定形土壌が掘り込まれ、上面には古代から中世にかけての製鉄炉や焼土壌などが出土している。各時期の土壌は合わせて23基を確認した。縄文時代の不定形土壌は10数基で、楕円押型文や捺糸文、条痕文などが出土している。石器は柳葉形のサヌカイト製石槍4本、石鏃などがあり、サヌカイトの剝片も出土している。

1 古墳

1号墳 (Fig.2~4, PL.13) 調査区中央部に位置し、丘陵の傾斜が急に強くなる部分の先端に立地する。墳丘は、下方が馬蹄形状、上方が円形になる。径12mを測り、南側から見上げると実際よりもかなり大きく見える。石室は、単室両袖形の横穴式石室で、既に開口しており、中は敷石が完全に抜き取られる程荒らされていた。石室の石組みは殆ど完全に近い形で残っていたが、羨道部天井石のひとつが入口に落下していた。

石室全長は、右側壁が7.2mで、左側壁は7mである。主軸はN-36°-Wで南側に開口する。玄室はやや歪んでいるが、奥幅2.2m、前幅2.1m、左側壁2.5m、右側壁2.2mを測る。敷石除去後の床から天井までの高さは2.5mである。奥壁には巨石を2枚立て、両側壁にはそれよりもやや小振りの礎を横位または縦位に据えて腰石としている。腰石の上は奥壁3段、両側壁5~6段の石積みを持ち送り状に積まれ、断面三角、平面四角の天井石が乗せられる。袖石は縦長の礎を立てて構成され、玄門幅は1.2mである。羨道は玄門と同じ幅で取り付き、入口に向かってやや幅が広がる。羨道の石積みはそのまま外護列石の石積みと接続する。羨道内には2箇所の梱石が設けられるが、第1梱石を基線に閉塞石が積み上げられる。玄門部の梱石は抜き取られており、掘方に礎が詰まっていた。

1号墳の墳丘は良く遺存していた。墳丘の形成過程は5段階に分けられる。まず、第1段階は基盤を掘り込んで腰石を設置し、腰石が安定するまで基盤の土を中心に埋め込まれる。腰石の裏込めには栗石が詰め込まれ、安定が計られている。第2段階は、側壁の積みあげと盛土が側壁の下位から中位程度まで行なわれる。第3段階では、側壁の中位から上位の積み上げが行なわれ、それに伴って外護列石を築いて盛土が積み上げられる。外護列石は東側が特に丁寧な積み重ねられており5段認めることができる。北側及び西側は4段の列石が巡る。第4段階は天井



Fig. 1 並間谷古墳群遺構配置図 (1/300)

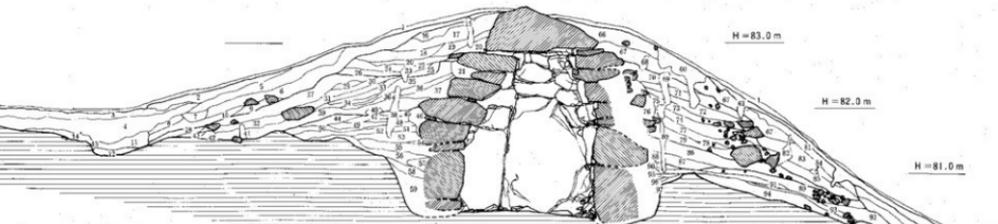
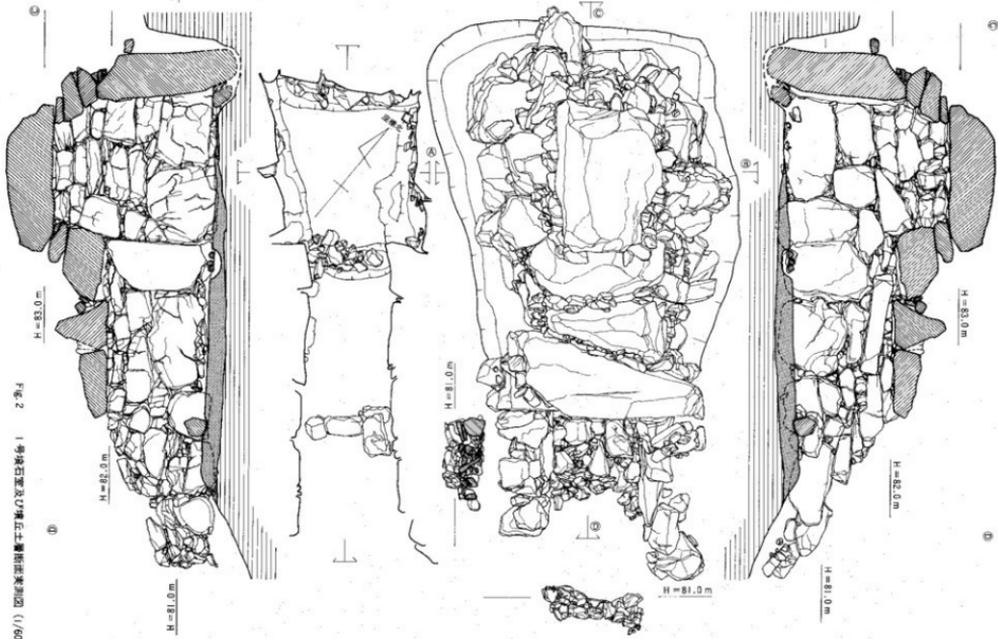
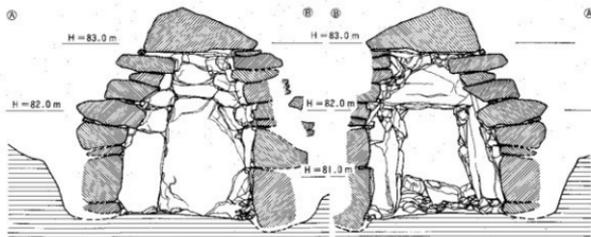


図2 1号石室及び石室土層断面図(東向き)

- 土層番号
- | | | | | |
|--------------------|-------------|------------|-----------------|-----------------|
| 1 表土 | 26 7よりやや多い | 40 粘土 | 54 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 68 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 2 表土 | 27 2よりやや多い | 41 黄褐色砂質土 | 55 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 69 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 3 黄褐色砂質土 | 28 19よりやや多い | 42 粘土 | 56 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 70 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 4 黄褐色砂質土 | 29 黄褐色砂質土 | 43 黄褐色砂質土 | 57 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 71 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 5 19より多い | 30 黄褐色砂質土 | 44 黄褐色砂質土 | 58 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 72 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 6 17より多い | 31 黄褐色砂質土 | 45 黄褐色砂質土 | 59 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 73 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 7 黄褐色砂質土 | 32 黄褐色砂質土 | 46 黄褐色砂質土 | 60 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 74 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 8 黄褐色砂質土(中層部をのびる) | 33 黄褐色砂質土 | 47 黄褐色砂質土 | 61 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 75 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 9 中層部(黄褐色砂質土) | 34 黄褐色砂質土 | 48 黄褐色砂質土 | 62 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 76 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 10 黄褐色砂質土(中間部をのびる) | 35 黄褐色砂質土 | 49 黄褐色砂質土 | 63 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 77 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 11 黄褐色砂質土(中間部をのびる) | 36 黄褐色砂質土 | 50 黄褐色砂質土 | 64 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 78 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 12 黄褐色砂質土 | 37 2よりやや多い | 51 黄褐色砂質土 | 65 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 79 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 13 黄褐色砂質土 | 38 本面 | 52 黄褐色砂質土 | 66 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 80 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 14 黄褐色砂質土 | 39 黄褐色砂質土 | 53 黄褐色砂質土 | 67 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 81 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 15 本面 | 40 黄褐色砂質土 | 54 黄褐色砂質土 | 68 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 82 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 16 黄褐色砂質土 | 41 黄褐色砂質土 | 55 黄褐色砂質土 | 69 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 83 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 17 黄褐色砂質土 | 42 黄褐色砂質土 | 56 黄褐色砂質土 | 70 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 84 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 18 黄褐色砂質土 | 43 黄褐色砂質土 | 57 黄褐色砂質土 | 71 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 85 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 19 黄褐色砂質土 | 44 黄褐色砂質土 | 58 黄褐色砂質土 | 72 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 86 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 20 黄褐色砂質土 | 45 黄褐色砂質土 | 59 黄褐色砂質土 | 73 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 87 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 21 黄褐色砂質土 | 46 黄褐色砂質土 | 60 黄褐色砂質土 | 74 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 88 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 22 黄褐色砂質土 | 47 黄褐色砂質土 | 61 黄褐色砂質土 | 75 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 89 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 23 黄褐色砂質土 | 48 黄褐色砂質土 | 62 黄褐色砂質土 | 76 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 90 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 24 黄褐色砂質土 | 49 黄褐色砂質土 | 63 黄褐色砂質土 | 77 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 91 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 25 黄褐色砂質土 | 50 黄褐色砂質土 | 64 黄褐色砂質土 | 78 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 92 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 26 黄褐色砂質土 | 51 黄褐色砂質土 | 65 黄褐色砂質土 | 79 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 93 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 27 2よりやや多い | 52 黄褐色砂質土 | 66 黄褐色砂質土 | 80 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 94 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 28 19よりやや多い | 53 黄褐色砂質土 | 67 黄褐色砂質土 | 81 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 95 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 29 黄褐色砂質土 | 54 黄褐色砂質土 | 68 黄褐色砂質土 | 82 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 96 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 30 黄褐色砂質土 | 55 黄褐色砂質土 | 69 黄褐色砂質土 | 83 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 97 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 31 黄褐色砂質土 | 56 黄褐色砂質土 | 70 黄褐色砂質土 | 84 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 98 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 32 黄褐色砂質土 | 57 黄褐色砂質土 | 71 黄褐色砂質土 | 85 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 99 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 33 黄褐色砂質土 | 58 黄褐色砂質土 | 72 黄褐色砂質土 | 86 黄褐色砂質土(鉄質砂) | 100 黄褐色砂質土(鉄質砂) |
| 34 黄褐色砂質土 | 59 黄褐色砂質土 | 73 黄褐色砂質土 | 87 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 35 黄褐色砂質土 | 60 黄褐色砂質土 | 74 黄褐色砂質土 | 88 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 36 黄褐色砂質土 | 61 黄褐色砂質土 | 75 黄褐色砂質土 | 89 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 37 2よりやや多い | 62 黄褐色砂質土 | 76 黄褐色砂質土 | 90 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 38 本面 | 63 黄褐色砂質土 | 77 黄褐色砂質土 | 91 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 39 黄褐色砂質土 | 64 黄褐色砂質土 | 78 黄褐色砂質土 | 92 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 40 黄褐色砂質土 | 65 黄褐色砂質土 | 79 黄褐色砂質土 | 93 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 41 黄褐色砂質土 | 66 黄褐色砂質土 | 80 黄褐色砂質土 | 94 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 42 黄褐色砂質土 | 67 黄褐色砂質土 | 81 黄褐色砂質土 | 95 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 43 黄褐色砂質土 | 68 黄褐色砂質土 | 82 黄褐色砂質土 | 96 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 44 黄褐色砂質土 | 69 黄褐色砂質土 | 83 黄褐色砂質土 | 97 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 45 黄褐色砂質土 | 70 黄褐色砂質土 | 84 黄褐色砂質土 | 98 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 46 黄褐色砂質土 | 71 黄褐色砂質土 | 85 黄褐色砂質土 | 99 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 47 黄褐色砂質土 | 72 黄褐色砂質土 | 86 黄褐色砂質土 | 100 黄褐色砂質土(鉄質砂) | |
| 48 黄褐色砂質土 | 73 黄褐色砂質土 | 87 黄褐色砂質土 | | |
| 49 黄褐色砂質土 | 74 黄褐色砂質土 | 88 黄褐色砂質土 | | |
| 50 黄褐色砂質土 | 75 黄褐色砂質土 | 89 黄褐色砂質土 | | |
| 51 黄褐色砂質土 | 76 黄褐色砂質土 | 90 黄褐色砂質土 | | |
| 52 黄褐色砂質土 | 77 黄褐色砂質土 | 91 黄褐色砂質土 | | |
| 53 黄褐色砂質土 | 78 黄褐色砂質土 | 92 黄褐色砂質土 | | |
| 54 黄褐色砂質土 | 79 黄褐色砂質土 | 93 黄褐色砂質土 | | |
| 55 黄褐色砂質土 | 80 黄褐色砂質土 | 94 黄褐色砂質土 | | |
| 56 黄褐色砂質土 | 81 黄褐色砂質土 | 95 黄褐色砂質土 | | |
| 57 黄褐色砂質土 | 82 黄褐色砂質土 | 96 黄褐色砂質土 | | |
| 58 黄褐色砂質土 | 83 黄褐色砂質土 | 97 黄褐色砂質土 | | |
| 59 黄褐色砂質土 | 84 黄褐色砂質土 | 98 黄褐色砂質土 | | |
| 60 黄褐色砂質土 | 85 黄褐色砂質土 | 99 黄褐色砂質土 | | |
| 61 黄褐色砂質土 | 86 黄褐色砂質土 | 100 黄褐色砂質土 | | |
| 62 黄褐色砂質土 | 87 黄褐色砂質土 | | | |
| 63 黄褐色砂質土 | 88 黄褐色砂質土 | | | |
| 64 黄褐色砂質土 | 89 黄褐色砂質土 | | | |
| 65 黄褐色砂質土 | 90 黄褐色砂質土 | | | |
| 66 黄褐色砂質土 | 91 黄褐色砂質土 | | | |
| 67 黄褐色砂質土 | 92 黄褐色砂質土 | | | |
| 68 黄褐色砂質土 | 93 黄褐色砂質土 | | | |
| 69 黄褐色砂質土 | 94 黄褐色砂質土 | | | |
| 70 黄褐色砂質土 | 95 黄褐色砂質土 | | | |
| 71 黄褐色砂質土 | 96 黄褐色砂質土 | | | |
| 72 黄褐色砂質土 | 97 黄褐色砂質土 | | | |
| 73 黄褐色砂質土 | 98 黄褐色砂質土 | | | |
| 74 黄褐色砂質土 | 99 黄褐色砂質土 | | | |
| 75 黄褐色砂質土 | 100 黄褐色砂質土 | | | |



Fig. 3 1号墳外圍石家測図 (1/60)



H=80.0

H=81.0

H=82.0

H=83.0

0 2 2m

H=81.0

H=82.0

H=83.0



H=83.0

H=82.0

H=81.0

H=83.0

H=82.0

H=81.0

石を乗せ、天井石を被覆するまで盛土を行なう。第5段階は外護列石も埋め込んで、さらに盛土を行ない墳丘を整えたものと考えられる。土層断面と外護列石の出土状況から以上のことが想定できた。

出土遺物は、古墳の残りが良い割りには少なかった。既に盗掘に逢っており、石室内は完全に荒らされていた。玄室右側壁近くで鉄刀の破片、玄門部で須恵器坏身が出土している。原位置を留めたものではなく、前庭部から掻き出された遺物が少量出土している。墳丘西側の外護列石の間では、供献された須恵器大甕が出土している。接合した結果、口径50cm、器高96cm、胴高89.3cmあった。

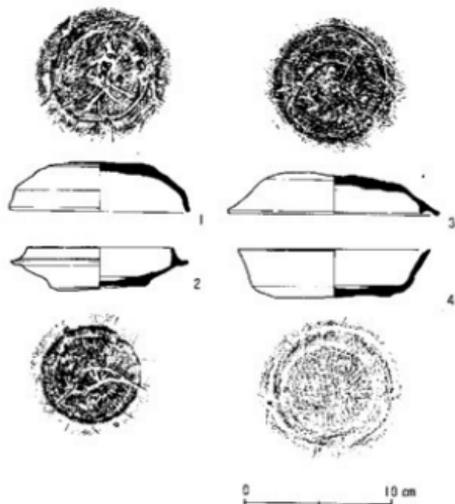


Fig. 4 1号墳出土遺物実測図 (1/4)

Fig.4-1は前庭部から出土した須恵器坏蓋である。口径12cm、器高3.4cmを測り、体部中央に稜を持つ。暗灰色を呈し、焼成は良好である。天井部にヘラケズリがみられ二重弧のヘラ記号が施される。2は同じヘラ記号を持つ坏身である。玄門部から出土。口径9.8cm、器高3.2cmで体部は丸味がなく、底部は平底になる。3・4は前庭部から出土した坏身と蓋である。3は外径14.4cm、器高2.9cmで内側に反りを持ち、天井部にヘラケズリが施される。4は口径13cm、器高3.4cmを測る無高台の坏である。3と同様暗茶褐色を呈し、同一のヘラ記号を持つ。1号墳は築造時期を決定する遺物はないが、石室の形態などから6世紀後半代に作られ、7世紀後半代まで追葬や墓前祭が行なわれたものと考えられる。

2号墳 (Fig.5・6、PL.14)

1号墳東側のやや低い位置に造営された古墳である。長径13m、短径11mで、基底は馬蹄形状を呈する。墳丘東側は最近の視乱によって一部破壊されている。

石室は、単室両袖形の横穴式石室で南側に開口する。主軸はN-26°-Wである。既に以前から出入りが可能で、石室内は荒らされていた。石室全長は、左側壁で7m、右側壁は7.6mで、右側壁がやや長い。石室入口の石積みはそのまま両側に伸びる外護列石に接続する。玄室は、石室全体の大きさからすると小さく、幅1.8m、左側壁1.8m、右側壁2mで、ほぼ正方形に近い形となる。奥壁は一枚の鏡石を用い、両側壁は2石の腰石を有する。腰石の上には3段程度

の塊石が積まれ、天井石を架構する。側壁の石は大きさが不揃いで、積み方が粗雑な感じである。床面には敷石はなく岩盤が露出している。原位置を留めない跡が散在していることから、本来は敷石が施されていたものとみられる。現床面から天井までの高さは2.1mである。なお、玄室の横断面図は、石室の中心から北へ30cm移動した部分で取っている。石室中央部では石積みみの状況が表現できなかったからである。両袖石は1m強の石を縦位に立てて構成している。玄門の幅は1mを測る。羨道はそのまま1m幅で取り付け、入口側に向って広がりを増す。羨道の石積みは、やや大き目の石を横位に据えて腰石とし、左側壁はその上に細長い石を積み上げる。右側壁は塊石が積み上げられる。羨道床面には柵石が2箇所設けられ、細長い石が2個組み合わせられる。また、第1柵石を基準に閉塞石が積み上げられる。長さ1m以上にわたって積まれ、石積みは4段残存している。天井石は、玄室が1石、玄門の柵石を除いて羨道部が3石で構成されている。

墳丘は、西側の基盤を整形して作られ、石室はさらに掘り込まれて設置される。墳丘の形成過程は1号墳と同様で、土層の観察から5段階程度に分けられる。第1段階は左腰石の中位、右腰石の上端までの盛土で、腰石の安定を計るため硬くタタキ締められている。第2段階は側壁の中位まで、第3段階は側壁の上位まで盛土が行なわれる。側壁裏側は裏込めの栗石と粘土が詰め込まれ、石積みみの安定を計っている。1号墳は記述しなかったが2号墳と同様の技法が採られている。第4段階は天井石を架構した後、天井石の被覆のための盛土である。第3段階及び第4段階の盛土には外護列石を設けて積み上げられている。外護列石は、羨道端部に接続するのが最下段で、馬蹄形状になる。墳丘上部までは都合4段の外護列石が巡り、列石間には細かな礫が分布する。礫そのものは盛土の中にも多数認められる。第5段階は墳丘全体の整形盛土である。墳頂部は流出しており、本来の高さは分らない。

遺物は、石室羨道部と、前庭部から出土している。羨道部には6個体の須恵器坏身・蓋がまとまって供献されているが、時期幅がある。前庭部からは須恵器坏身・蓋・甕などが出土している。また、石室から掻き出されたものか銅地金張りの耳環が出土している。

Fig.5は羨道部から出土した坏と蓋である。時期差があり、5は口径10.5cm、6は9cmを測る。6はボタン状つまみを持つ。

2号墳は出土遺物や石室の形態から、6世紀後半～末に作られ、7世紀中頃まで、追葬や墓前祭が行なわれたと考えられる。

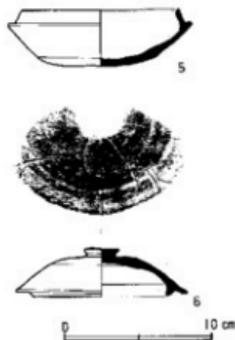


Fig.5 2号墳出土遺物実測図 (1/4)

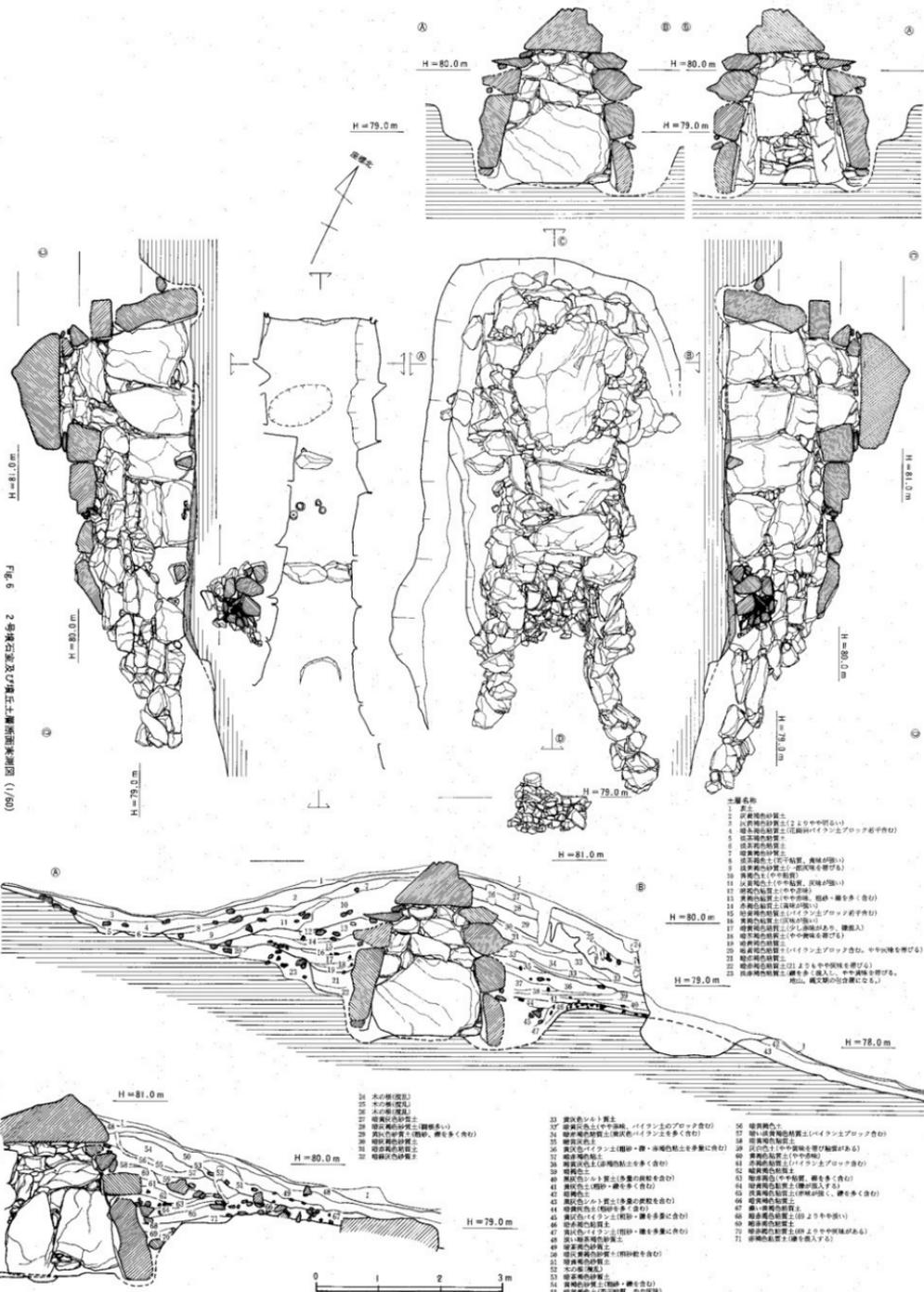
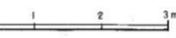


Fig. 6 2号塚室及び墳丘構造断面図(1/100)

- | | | |
|--|--|--|
| <p>34 木の櫓(復元)</p> <p>35 木の櫓(復元)</p> <p>36 木の櫓(復元)</p> <p>37 石製瓦葺砂土</p> <p>38 石製瓦葺砂土(2層構造)</p> <p>39 石製瓦葺砂土(3層構造)</p> <p>40 石製瓦葺砂土(4層構造)</p> <p>41 石製瓦葺砂土(5層構造)</p> <p>42 石製瓦葺砂土(6層構造)</p> <p>43 石製瓦葺砂土(7層構造)</p> <p>44 石製瓦葺砂土(8層構造)</p> <p>45 石製瓦葺砂土(9層構造)</p> <p>46 石製瓦葺砂土(10層構造)</p> <p>47 石製瓦葺砂土(11層構造)</p> <p>48 石製瓦葺砂土(12層構造)</p> <p>49 石製瓦葺砂土(13層構造)</p> <p>50 石製瓦葺砂土(14層構造)</p> <p>51 石製瓦葺砂土(15層構造)</p> <p>52 石製瓦葺砂土(16層構造)</p> <p>53 石製瓦葺砂土(17層構造)</p> <p>54 石製瓦葺砂土(18層構造)</p> <p>55 石製瓦葺砂土(19層構造)</p> <p>56 石製瓦葺砂土(20層構造)</p> <p>57 石製瓦葺砂土(21層構造)</p> <p>58 石製瓦葺砂土(22層構造)</p> <p>59 石製瓦葺砂土(23層構造)</p> <p>60 石製瓦葺砂土(24層構造)</p> <p>61 石製瓦葺砂土(25層構造)</p> <p>62 石製瓦葺砂土(26層構造)</p> <p>63 石製瓦葺砂土(27層構造)</p> <p>64 石製瓦葺砂土(28層構造)</p> <p>65 石製瓦葺砂土(29層構造)</p> <p>66 石製瓦葺砂土(30層構造)</p> <p>67 石製瓦葺砂土(31層構造)</p> <p>68 石製瓦葺砂土(32層構造)</p> <p>69 石製瓦葺砂土(33層構造)</p> <p>70 石製瓦葺砂土(34層構造)</p> <p>71 石製瓦葺砂土(35層構造)</p> | <p>33 石製瓦葺砂土</p> <p>34 石製瓦葺砂土(2層構造)</p> <p>35 石製瓦葺砂土(3層構造)</p> <p>36 石製瓦葺砂土(4層構造)</p> <p>37 石製瓦葺砂土(5層構造)</p> <p>38 石製瓦葺砂土(6層構造)</p> <p>39 石製瓦葺砂土(7層構造)</p> <p>40 石製瓦葺砂土(8層構造)</p> <p>41 石製瓦葺砂土(9層構造)</p> <p>42 石製瓦葺砂土(10層構造)</p> <p>43 石製瓦葺砂土(11層構造)</p> <p>44 石製瓦葺砂土(12層構造)</p> <p>45 石製瓦葺砂土(13層構造)</p> <p>46 石製瓦葺砂土(14層構造)</p> <p>47 石製瓦葺砂土(15層構造)</p> <p>48 石製瓦葺砂土(16層構造)</p> <p>49 石製瓦葺砂土(17層構造)</p> <p>50 石製瓦葺砂土(18層構造)</p> <p>51 石製瓦葺砂土(19層構造)</p> <p>52 石製瓦葺砂土(20層構造)</p> <p>53 石製瓦葺砂土(21層構造)</p> <p>54 石製瓦葺砂土(22層構造)</p> <p>55 石製瓦葺砂土(23層構造)</p> <p>56 石製瓦葺砂土(24層構造)</p> <p>57 石製瓦葺砂土(25層構造)</p> <p>58 石製瓦葺砂土(26層構造)</p> <p>59 石製瓦葺砂土(27層構造)</p> <p>60 石製瓦葺砂土(28層構造)</p> <p>61 石製瓦葺砂土(29層構造)</p> <p>62 石製瓦葺砂土(30層構造)</p> <p>63 石製瓦葺砂土(31層構造)</p> <p>64 石製瓦葺砂土(32層構造)</p> <p>65 石製瓦葺砂土(33層構造)</p> <p>66 石製瓦葺砂土(34層構造)</p> <p>67 石製瓦葺砂土(35層構造)</p> <p>68 石製瓦葺砂土(36層構造)</p> <p>69 石製瓦葺砂土(37層構造)</p> <p>70 石製瓦葺砂土(38層構造)</p> <p>71 石製瓦葺砂土(39層構造)</p> | <p>56 石製瓦葺砂土</p> <p>57 石製瓦葺砂土(2層構造)</p> <p>58 石製瓦葺砂土(3層構造)</p> <p>59 石製瓦葺砂土(4層構造)</p> <p>60 石製瓦葺砂土(5層構造)</p> <p>61 石製瓦葺砂土(6層構造)</p> <p>62 石製瓦葺砂土(7層構造)</p> <p>63 石製瓦葺砂土(8層構造)</p> <p>64 石製瓦葺砂土(9層構造)</p> <p>65 石製瓦葺砂土(10層構造)</p> <p>66 石製瓦葺砂土(11層構造)</p> <p>67 石製瓦葺砂土(12層構造)</p> <p>68 石製瓦葺砂土(13層構造)</p> <p>69 石製瓦葺砂土(14層構造)</p> <p>70 石製瓦葺砂土(15層構造)</p> <p>71 石製瓦葺砂土(16層構造)</p> |
|--|--|--|

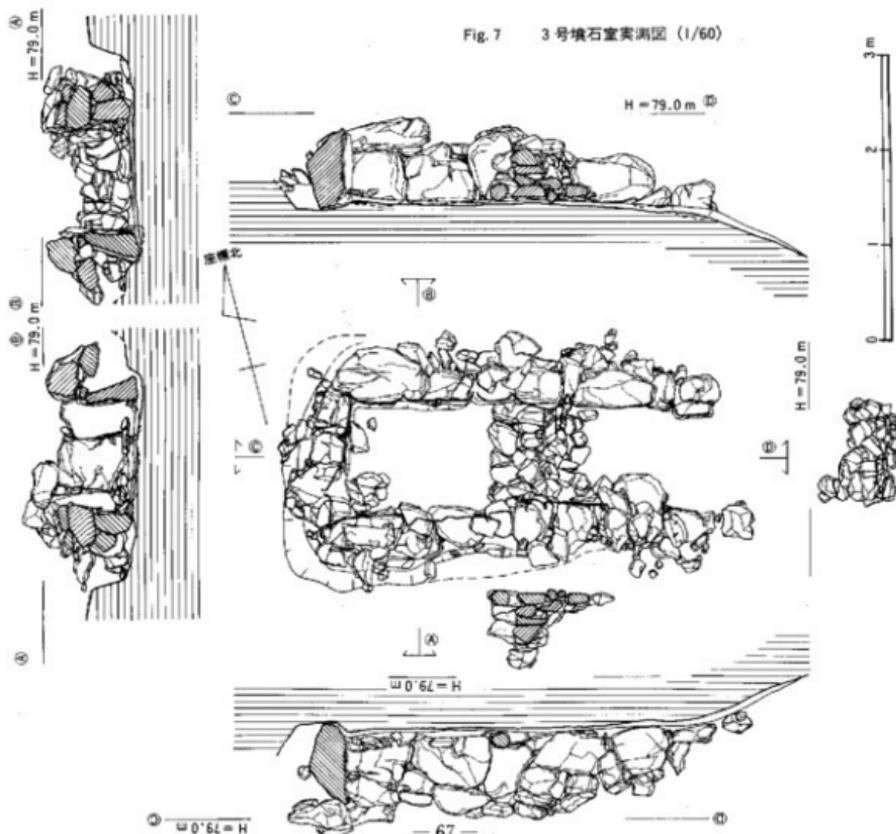
- 土層番号
- 1 土
 - 2 砂
 - 3 砂
 - 4 砂
 - 5 砂
 - 6 砂
 - 7 砂
 - 8 砂
 - 9 砂
 - 10 砂
 - 11 砂
 - 12 砂
 - 13 砂
 - 14 砂
 - 15 砂
 - 16 砂
 - 17 砂
 - 18 砂
 - 19 砂
 - 20 砂
 - 21 砂
 - 22 砂
 - 23 砂
 - 24 砂
 - 25 砂
 - 26 砂
 - 27 砂
 - 28 砂
 - 29 砂
 - 30 砂
 - 31 砂
 - 32 砂
 - 33 砂
 - 34 砂
 - 35 砂
 - 36 砂
 - 37 砂
 - 38 砂
 - 39 砂
 - 40 砂
 - 41 砂
 - 42 砂
 - 43 砂
 - 44 砂
 - 45 砂
 - 46 砂
 - 47 砂
 - 48 砂
 - 49 砂
 - 50 砂
 - 51 砂
 - 52 砂
 - 53 砂
 - 54 砂
 - 55 砂
 - 56 砂
 - 57 砂
 - 58 砂
 - 59 砂
 - 60 砂
 - 61 砂
 - 62 砂
 - 63 砂
 - 64 砂
 - 65 砂
 - 66 砂
 - 67 砂
 - 68 砂
 - 69 砂
 - 70 砂
 - 71 砂



3号墳 (Fig.7, PL.14)

丘陵端部に位置し、2号墳の直ぐ北側に造営される小形の古墳である。楕円形状を呈し、長径8m、短径6mを測る。墳丘の一部は2号墳を少し削り込んで作られている。

石室は、単室向袖形の横穴式石室で、かなり簡略化された作りである。主軸はN-76°-Wで、石室全長は左壁で4.3m、右壁で3.8mを測る。羨道端部は少し崩れているので本来はもう少し長かったと推察される。玄室は幅1.2m、左側壁は1.6m、右側壁は1.4mである。石室は腰石と1段の石積みを残す程度で、天井部は失われている。玄室の腰石は各壁2石づつ用いられ、奥壁は縦位、両側壁は横位に据えられる。床面には敷石が施されていたとみられるが、擾乱で殆ど剥ぎ取られている。羨道は玄室と一体化して作られ、袖石は石材を縦位に立てて表現している。羨道部の幅は玄室幅よりもわずかに狭くなる。閉塞は玄門部で行なわれ40cm前後の礫を5個並べて仕切り石にしている。墳丘には羨道端部から伸びた外護列石が取り巻く。西側で4段、東側で3段の列石が確認できる。石室は、古い段階から破壊されていたこともあり、遺物は殆ど出土しなかった。石室の形態から7世紀代に作られた古墳と考えられる。



4号墳 (Fig.8・9、PL.14)

調査区中央部南側で出土。小形の横穴式石室を有する古墳である。墳丘盛土は既に失われ、石室の腰石部分以下が残存していた。主軸はN-57°-Wである。石室残存長は3.5mで、玄室は床面敷石で測ると幅、長さとも1.4mの正方形に近い形になる。腰石は各壁とも2石で構成されていたとみられる。玄門部には閉塞石が積まれていた痕跡を示す。3号墳よりもさらに簡略化された石室である。遺物は玄室左壁近くに2セットの坏身・蓋と羨道部から須恵器が出土している。

Fig.8-7は内側に反りのある坏蓋で、凝宝珠形つまみが付く。外径15cm、8は口径14.4cmで内側に反りを持たない坏蓋である。9は無高台、10は高台の付く坏身である。9は口径13.7cm、10は13.3cmである。全体に焼けひずみが激しい。これらの遺物は追葬時のものと考えられ、この古墳の一番新しい時期を示している。4号墳は7世紀代に作られ、後半まで追葬が行なわれたらしい。

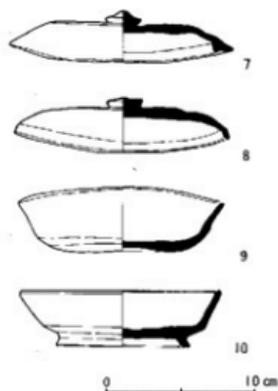


Fig.8 4号墳出土遺物実測図 (1/4)

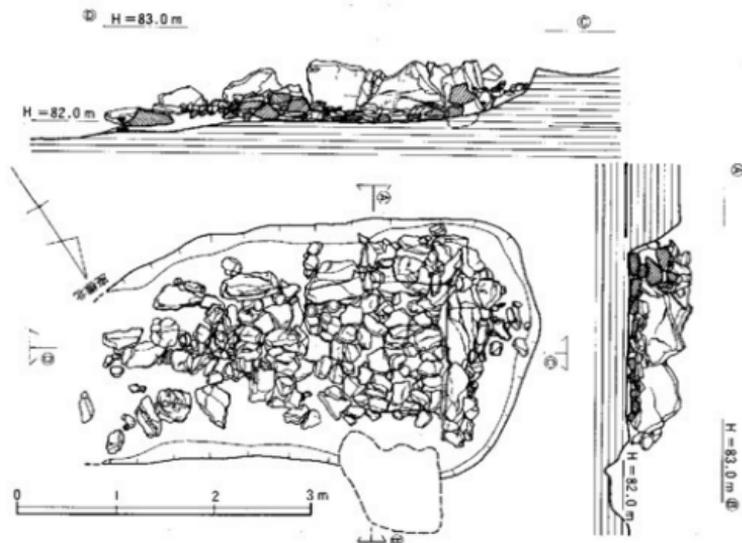


Fig.9 4号墳石室実測図 (1/60)

2 古墳以外の遺構

縄文時代 縄文時代の遺構は自然流路2条 (SD01・14) と不整形土壇12基 (SK02・04・05・



Fig. 10 SD-01 土層断面図 (1/40)

06・07・08・09・11・20・21・22・23) を検出している。南西から北東へ浅い谷地形となっており、底部にSD14・01の自然流路が流れ、この谷筋に沿って土壇が分布している。SD01 (Fig.10) は

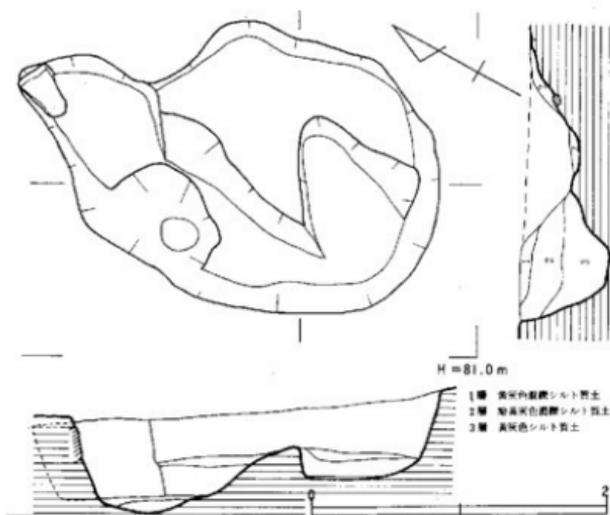


Fig. 11 SK-05 実測図 (1/40)

幅3.2m 深さ25cm程で黄灰色砂～シルトが堆積しており、1層中から後・晩期の粗製土器、2・3層中から早期押型文・燃糸文土器等を検出している (Fig.13)。SK05 (Fig.11) は0-99グリッドに有り、長径3.0m、短径1.9mを測る。平面は不整形、床面も凹凸が著しい。覆土は黄灰～暗黄灰色シルト質土。

古墳～奈良時代 焼土壇5基 (SK10・12・13・15・17) と排水ピット2基 (SK18・19) と鉄滓集積部1ヶ所を検出している。いずれも82mの等高線から上の部分で検出されている。焼土壇は長さ1.1～2.0mで1m前後の小振りのもが多い。遺物の検出はほとんどなく、古墳との

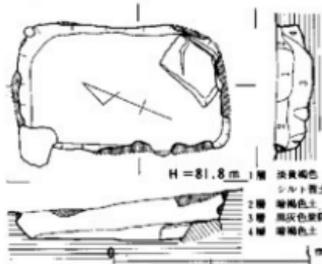


Fig. 12 SK-10 実測図 (1/30)

関係は不明。製鉄関係はQ-99グリッド付近にまとまっており、鉄滓集積部では割られた滓375kg・SK18からは232g、SK19からは4kg検出している。焼土・炉体のまとまった出土はなく主体部は不明。ヘラ切りの土師器小片が出土しており、古墳後期～奈良時代と考えられる。

遺物 石器は11～13・19～22はサヌカイト、14・23は緑泥片岩、他は黒曜石製である。

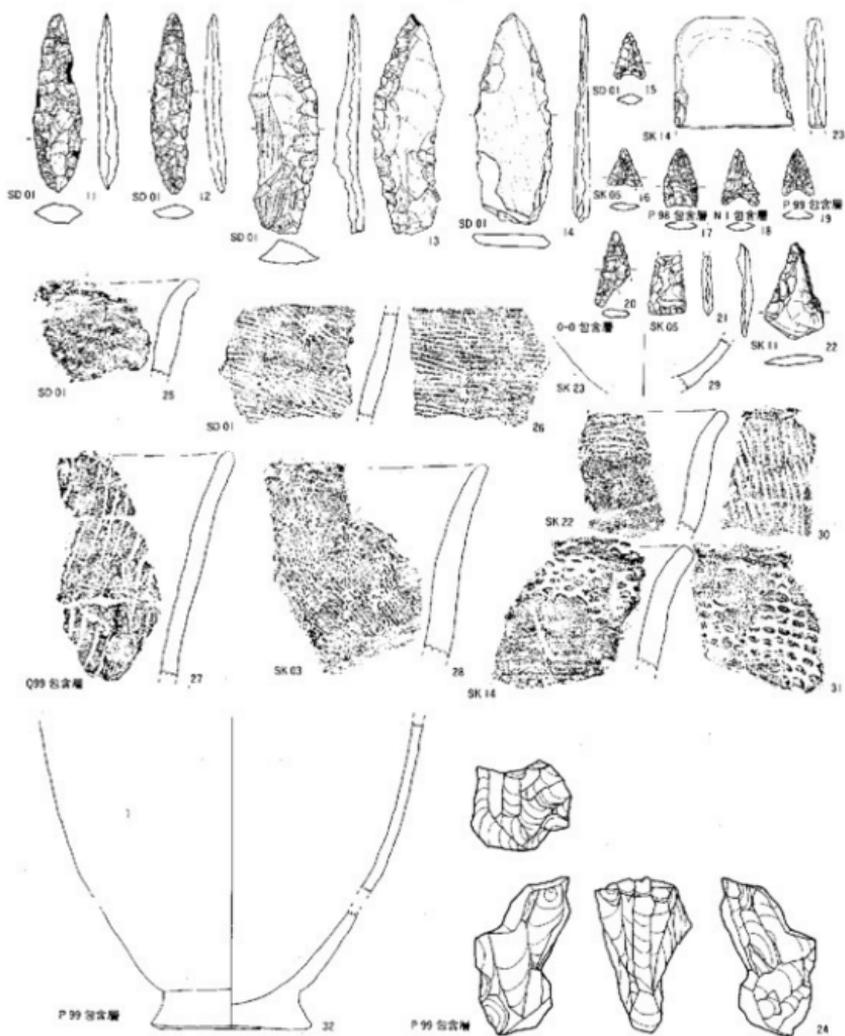


Fig. 13 出土遺物実測図 (1/3・1/1)



(1) 笠間谷古墳群全景 (南上空から)



(2) 笠間谷古墳群調査前全景 (南から)



(3) 笠間谷古墳群 1号墳調査状況 (南から)



(4) 1号墳外環列石出土状況 (東から)



(5) 1号墳羨道 (玄室から外を望む)



(6) 1号墳奥壁 (南から)



(7) 2号墳出土状況(南から)



(8) 2号墳奥壁(南から)



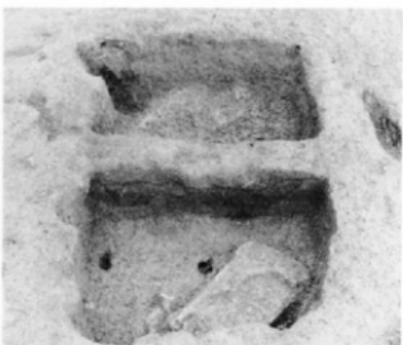
(9) 3号墳出土状況(南から)



(10) 4号墳出土状況(東から)

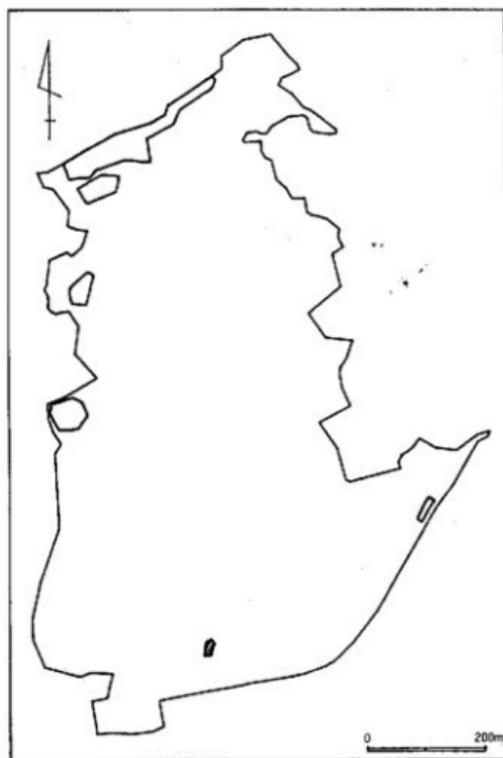


(11) SK-05(南から)



(12) SK-10(南東から)

5. 野方古墳群D群
(第5地点)



遺跡調査番号	8738		遺跡略号	NKK-4	
調査地地籍	西区野方字大音		分布地図番号	105	
開発面積	60ha	調査対象面積	古墳2基	調査実施面積	500㎡+古墳2基
調査期間	1987年11月25日～1988年3月31日			事前審査番号	58-2-161

野方古墳群 D群

概要

叶岳から派生して東に伸びる丘陵の尾根と尾根とに挟まれた平坦な東斜面に位置する。標高は71~75mをかぞえ、もともと2基の古墳が知られていた。南側の尾根には野方古墳群A~C群が分布するので、野方古墳群D群とする。調査区は2基の古墳を中心に500m²の範囲に設定した。調査の結果、古墳は6世紀前半に作られ、外護列石が取り巻く丁寧な作りの古墳であることが明らかになった。また、古墳の周辺や古墳基底面には、縄文時代晩期の土壌やいわゆる焼壁土壌が数基検出された。2号墳の基底面には6世紀代の竪穴住居址が出土している。

1 古墳

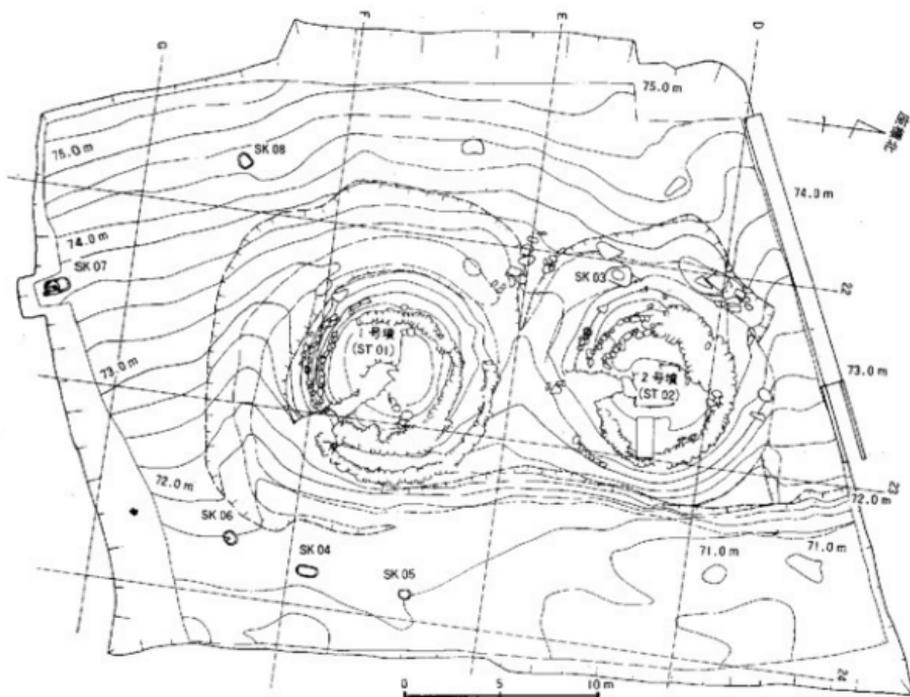


Fig. 1 野方古墳群D群墳丘出土状況図。(1/300)

1号墳 (Fig.2~5, PL.15)

南側に位置する古墳である。西側の地山を削って東側に均し基底面としている。墳径はほぼ12mで均整のとれた円墳である。西側には浅い周溝がめぐる。

石室は、東南に開口した単室両袖形の横穴式石室である。主軸はN-45°-Wにとり、石室全長は4.6~5mである。玄室は長方形を呈し、長さ2.6~2.7m、幅2mで中央部が0.2mふくらむ。両側壁は4石、奥壁は3石の腰石を据え、やや小振りの長い礎を持ち送り状にレンガ積みする。天井石は破壊されて存在しない。床面には平たい礎で敷石を設ける。袖は3~4段の石積みで構成され、玄門幅は下端で0.7mを測る。玄門には柵石を置き、やや外側で閉塞の石積みを行なう。羨道端部の石積みはそのまま外護列石に接続する。

外護列石は2段で構成される。第1段目は東側だけにしか存在せず、斜面の土留との関係が考えられる。第2段目は下端の径が8mで全周巡り、特に斜面側の東には多くの礎が積まれている。また、東側墳丘内にはさらに2段の列石が確認された。列石は墳丘盛土と密接な関係があり、土層断面の観察から、石室構築と共に墳丘形成の工程として積み上げられたことが分かる。墳丘形成は4~5段階の工程で行なわれている。

遺物は、石室内から須恵器、鉄鏃、鉄刀子、玉類などが出土した。前庭及び周溝からは盗掘の際に掻き出された須恵器や玉類が出土し、一部は石室内出土の遺物と接合する。墳丘には供獻の甕や滑石製の勾玉、紡錘車などが出土している。Fig.5-41は坏蓋で、器高が高く2分の1にヘラケズリが施される。42は口縁端部に段を有する坏蓋である。41~43は石室内出土。44は短脚円形透しの高坏で、口縁端部に段を持つ。1段目と2段目の外護列石の間から出土している。45~52は、墳丘東側に一括して出土したもので、45・46は高坏、47~50は甕、51は甕、52は提瓶である。Fig.2は主に水洗で出土した玉類である。1は碧玉製の管玉で片側穿孔である。2~40はガラス小玉で、そのうち8・17・29・39は明褐色を呈する。他はブルーや黄緑色を呈する。

1号墳出土の遺物は、須恵のII bからIII bに属するものであり、6世紀前半に築造され、後半まで追葬が行なわれたものと考えられる。

2号墳 (Fig.6~8, PL.16)

1号墳の北側に位置する。直径12mの円墳で、西側の地山を整形して墳丘が形成される。

石室は、南側に開口する只の字形の単室両袖形横穴式石室である。石室全長は、左壁で5m、右壁で4.4mを測る。玄室は、奥幅2.1m、前幅1.9m、奥行2.2mである。各壁とも3石の腰石を据え、

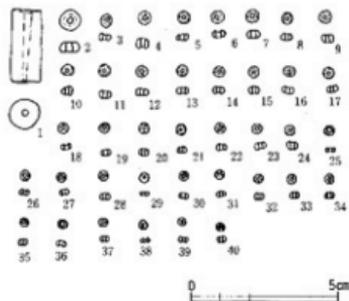
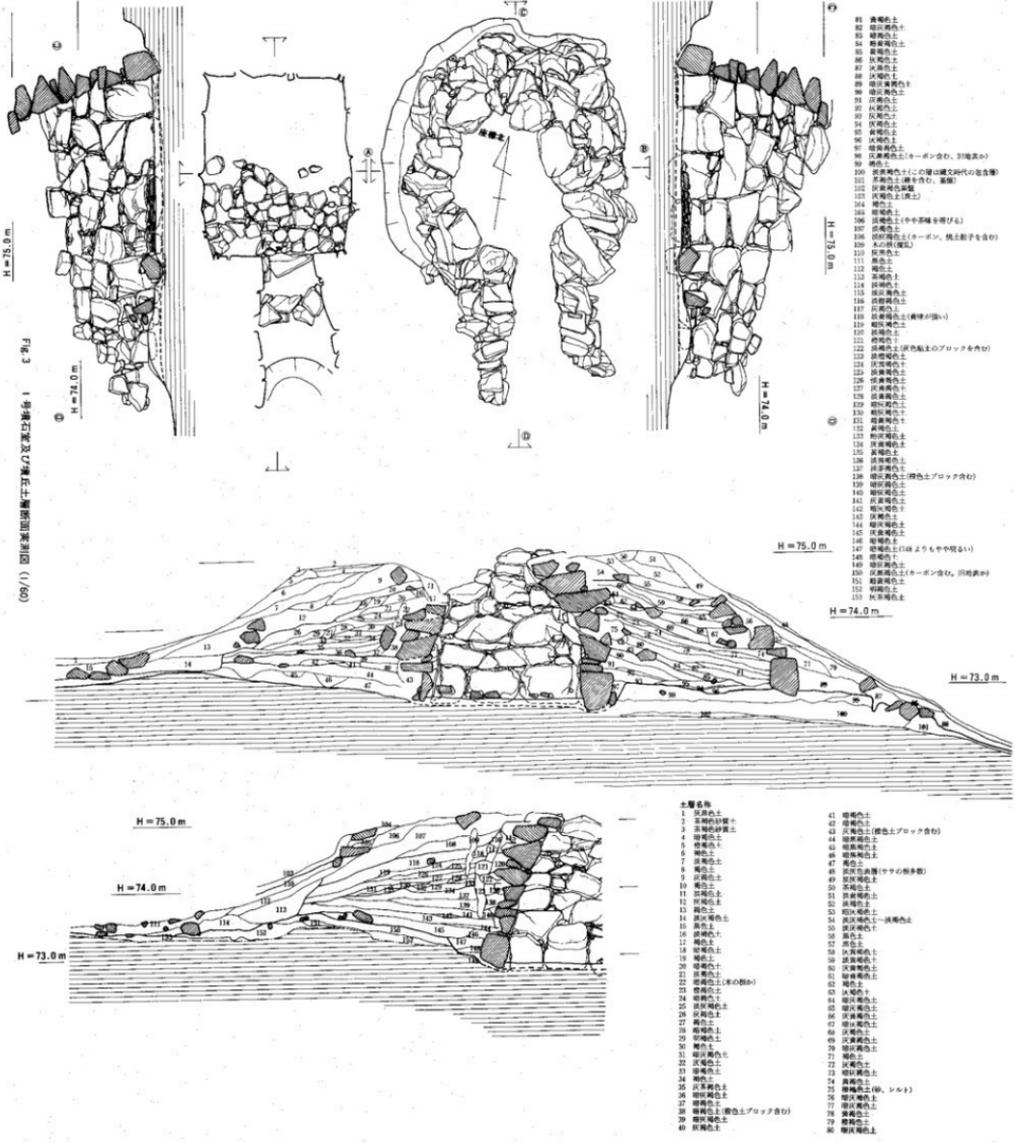


Fig. 2 1号墳出土玉類実測図 (1/2)



「**图 3**」 1号烽火臺及び烽火臺土層断面実測図 (1/50)



- 81 黄褐色土
- 82 灰褐色土
- 83 黄褐色土
- 84 黄褐色土
- 85 灰褐色土
- 86 灰褐色土
- 87 灰褐色土
- 88 灰褐色土
- 89 灰褐色土
- 90 灰褐色土
- 91 灰褐色土
- 92 灰褐色土
- 93 灰褐色土
- 94 灰褐色土
- 95 灰褐色土
- 96 灰褐色土
- 97 灰褐色土
- 98 灰褐色土
- 99 灰褐色土
- 100 灰褐色土
- 101 灰褐色土
- 102 灰褐色土
- 103 灰褐色土
- 104 灰褐色土
- 105 灰褐色土
- 106 灰褐色土
- 107 灰褐色土
- 108 灰褐色土
- 109 灰褐色土
- 110 灰褐色土
- 111 灰褐色土
- 112 灰褐色土
- 113 灰褐色土
- 114 灰褐色土
- 115 灰褐色土
- 116 灰褐色土
- 117 灰褐色土
- 118 灰褐色土
- 119 灰褐色土
- 120 灰褐色土
- 121 灰褐色土
- 122 灰褐色土
- 123 灰褐色土
- 124 灰褐色土
- 125 灰褐色土
- 126 灰褐色土
- 127 灰褐色土
- 128 灰褐色土
- 129 灰褐色土
- 130 灰褐色土
- 131 灰褐色土
- 132 灰褐色土
- 133 灰褐色土
- 134 灰褐色土
- 135 灰褐色土
- 136 灰褐色土
- 137 灰褐色土
- 138 灰褐色土
- 139 灰褐色土
- 140 灰褐色土
- 141 灰褐色土
- 142 灰褐色土
- 143 灰褐色土
- 144 灰褐色土
- 145 灰褐色土
- 146 灰褐色土
- 147 灰褐色土
- 148 灰褐色土
- 149 灰褐色土
- 150 灰褐色土
- 151 灰褐色土
- 152 灰褐色土
- 153 灰褐色土

- 土層名**
- 1 灰褐色土
 - 2 灰褐色土
 - 3 灰褐色土
 - 4 灰褐色土
 - 5 灰褐色土
 - 6 灰褐色土
 - 7 灰褐色土
 - 8 灰褐色土
 - 9 灰褐色土
 - 10 灰褐色土
 - 11 灰褐色土
 - 12 灰褐色土
 - 13 灰褐色土
 - 14 灰褐色土
 - 15 灰褐色土
 - 16 灰褐色土
 - 17 灰褐色土
 - 18 灰褐色土
 - 19 灰褐色土
 - 20 灰褐色土
 - 21 灰褐色土
 - 22 灰褐色土
 - 23 灰褐色土
 - 24 灰褐色土
 - 25 灰褐色土
 - 26 灰褐色土
 - 27 灰褐色土
 - 28 灰褐色土
 - 29 灰褐色土
 - 30 灰褐色土
 - 31 灰褐色土
 - 32 灰褐色土
 - 33 灰褐色土
 - 34 灰褐色土
 - 35 灰褐色土
 - 36 灰褐色土
 - 37 灰褐色土
 - 38 灰褐色土
 - 39 灰褐色土
 - 40 灰褐色土
 - 41 灰褐色土
 - 42 灰褐色土
 - 43 灰褐色土
 - 44 灰褐色土
 - 45 灰褐色土
 - 46 灰褐色土
 - 47 灰褐色土
 - 48 灰褐色土
 - 49 灰褐色土
 - 50 灰褐色土
 - 51 灰褐色土
 - 52 灰褐色土
 - 53 灰褐色土
 - 54 灰褐色土
 - 55 灰褐色土
 - 56 灰褐色土
 - 57 灰褐色土
 - 58 灰褐色土
 - 59 灰褐色土
 - 60 灰褐色土
 - 61 灰褐色土
 - 62 灰褐色土
 - 63 灰褐色土
 - 64 灰褐色土
 - 65 灰褐色土
 - 66 灰褐色土
 - 67 灰褐色土
 - 68 灰褐色土
 - 69 灰褐色土
 - 70 灰褐色土
 - 71 灰褐色土
 - 72 灰褐色土
 - 73 灰褐色土
 - 74 灰褐色土
 - 75 灰褐色土
 - 76 灰褐色土
 - 77 灰褐色土
 - 78 灰褐色土
 - 79 灰褐色土
 - 80 灰褐色土

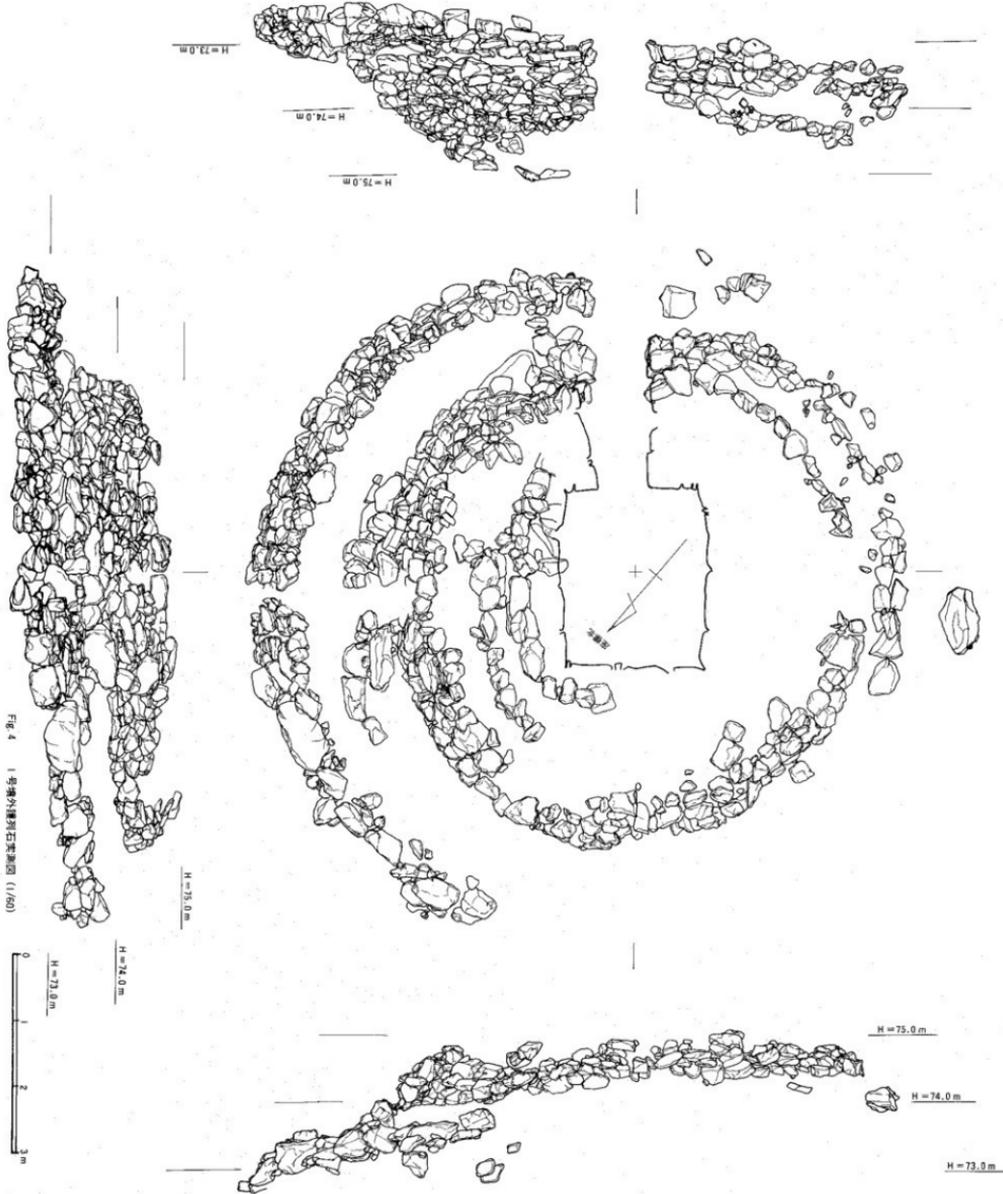


图 4 江苏外藏坑墓地面图 (1/50)

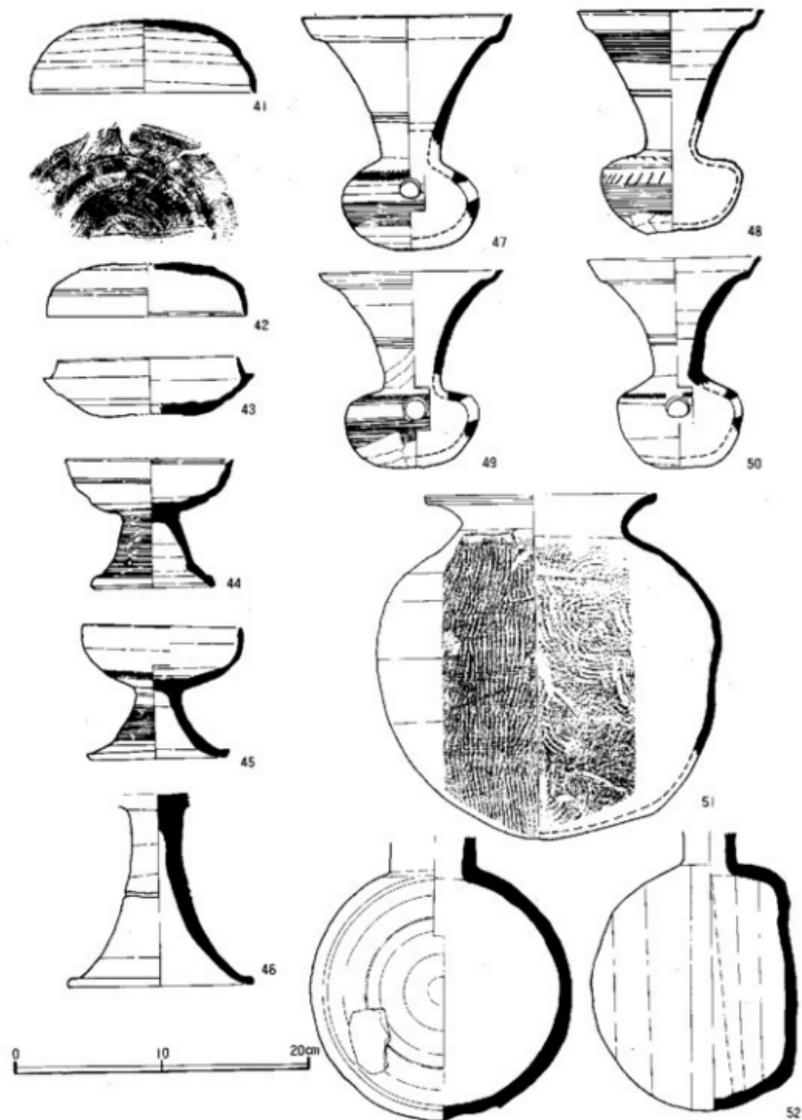


Fig. 5 1号墳出土遺物実測図 (1/4)

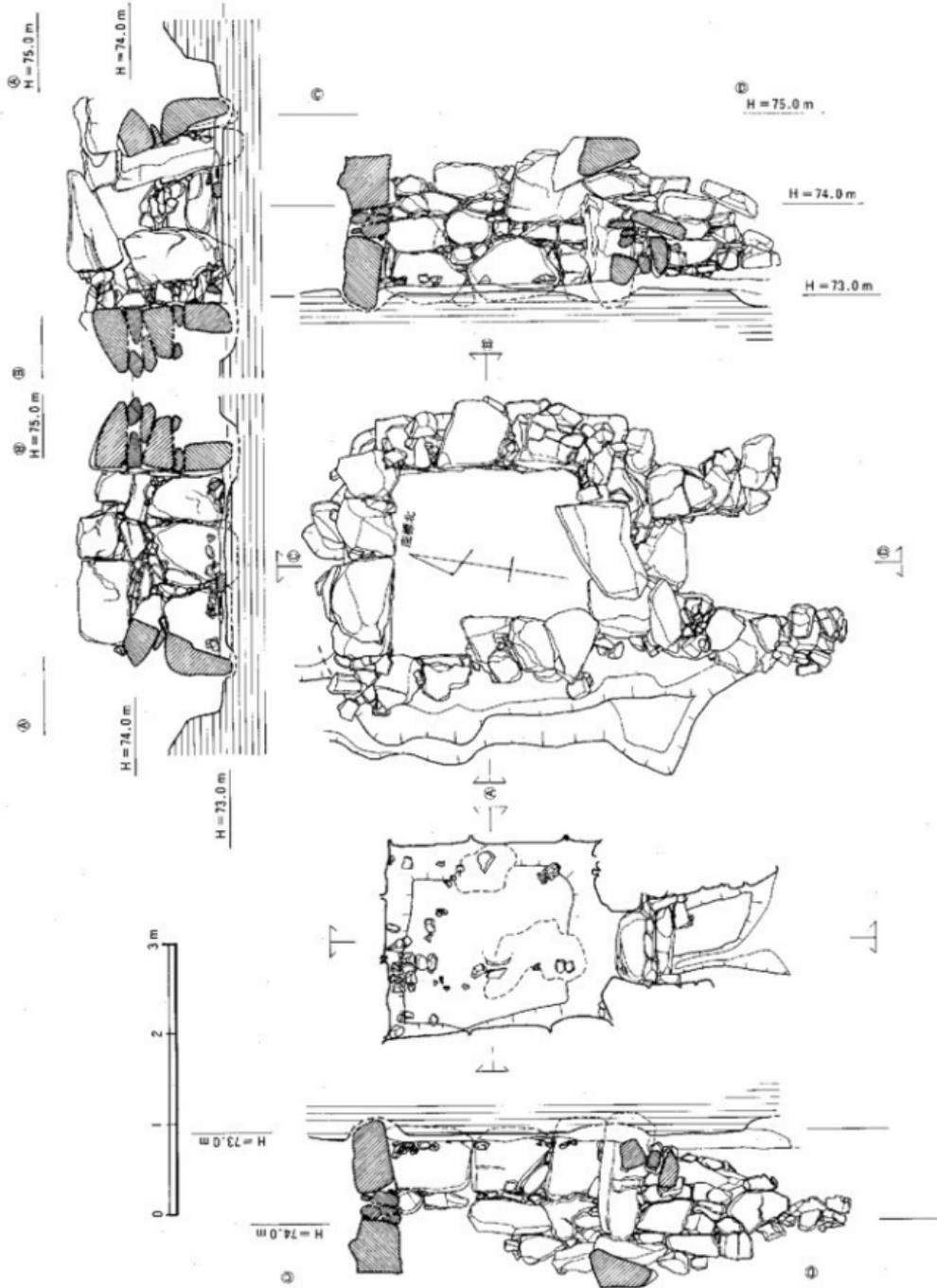


Fig. 6 2号填石室实测图 (1/60)

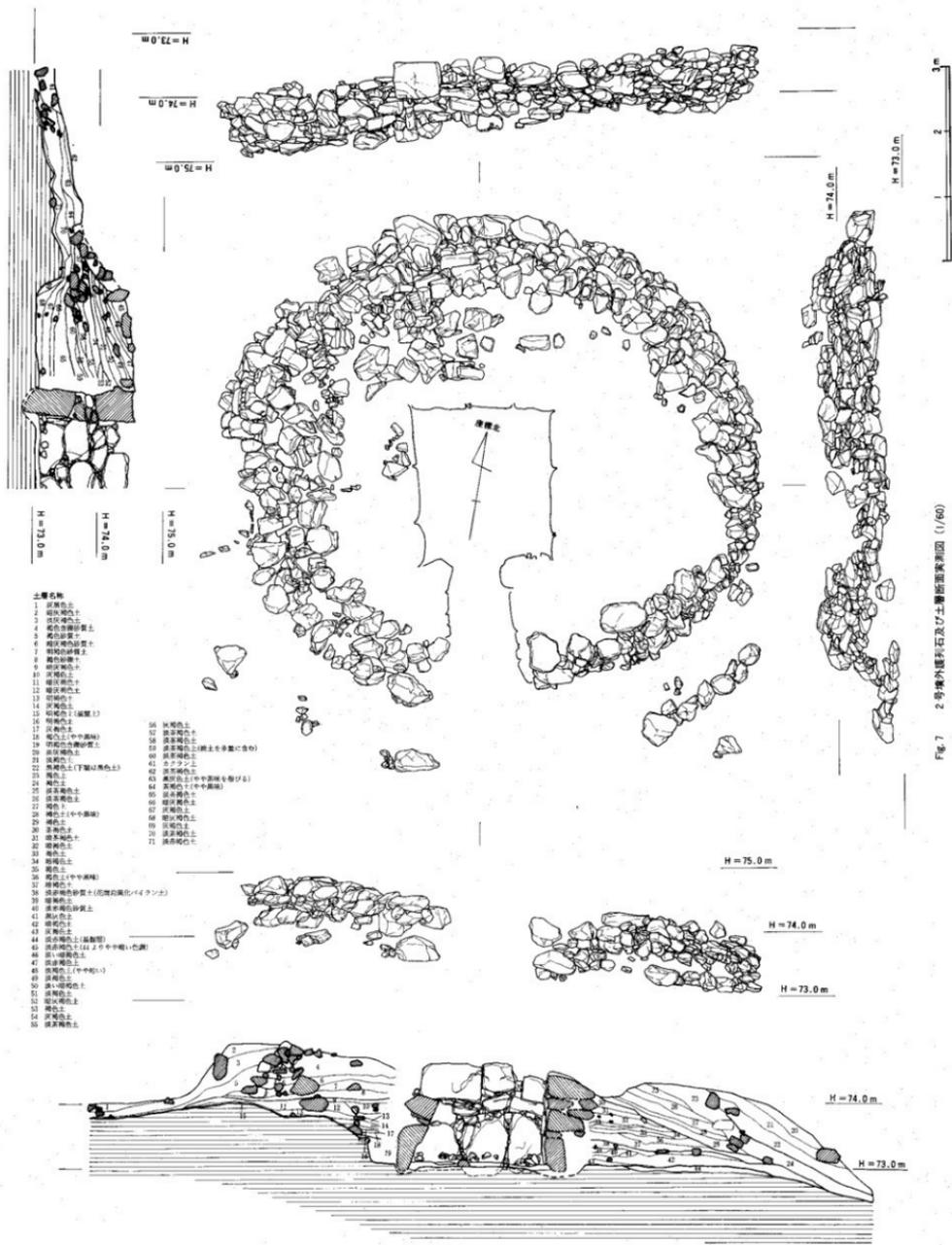


Fig. 7 2号壕外圍列石及び土層断面測量図 (1/60)

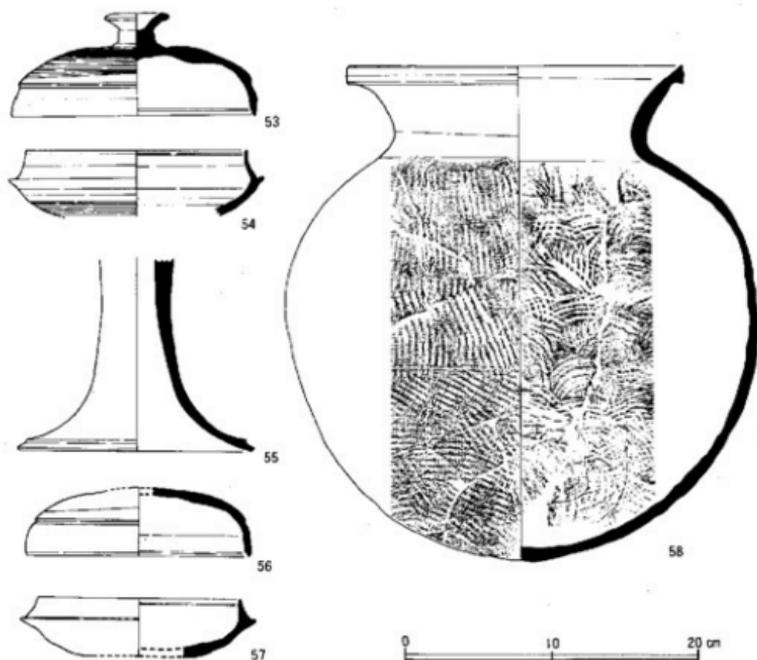


Fig. 8 2号墳出土土遺物実測図 (1/4)

やや大振りの礫を垂直に近い角度で積み上げる。袖石は縦長の石を立て、その上にさらに1石乗せて楣石を架構する。玄門部には楣石が置かれ、板石2枚と礫による閉塞が行なわれる。羨道は短かく、端部は外護列石に接続する。

外護列石は、墳丘中位をほぼ全周し、列石の基底部は東西8.5m、南北7.5mのやや楕円形を呈する。石積みは東側及び北側は特に丁寧で、北側は列石が二重に積み重ねられている。南側から西側にかけての石積みは簡略化されている。

墳丘の形成過程は、墳丘上半部が破壊されているのではっきりしないが、3～4層群の土層堆積を示している。第1段階は腰石を埋めて安定させる工程で、第2、第3段階が側壁を積みあげ、外護列石を設けて盛土を積み上げる工程である。第4段階は、天井石を被覆し、次の段階で、外護列石も埋め込んで墳形を整えたものと推察される。しかし、外護列石の埋め込みはあまり深くなく、早い段階で流失していたものとみられる。1号墳も同様であったが、外護列

石の直ぐ上に黒色土が堆積し、その上に墳丘の崩れた土壌が堆積していた。

遺物は石室内で須恵器坏身・蓋、壺、鉄鏃、墳丘で須恵器などが出土している。石室内は本来の敷石が殆ど残らないほど攪乱を受けており、遺物も現位置を留めるものはなかった。西側墳丘には、須恵器甕と横瓶が供献されていた。

Fig.8-53~55 はセットと考えられる有蓋高坏である。口縁端部には段を有し、外面はカキ目が施される。56・57は坏蓋と身で、57は蓋受けの立ち上がり短くなっている。58は古墳築造以前の竪穴住居址から出土した須恵器甕である。

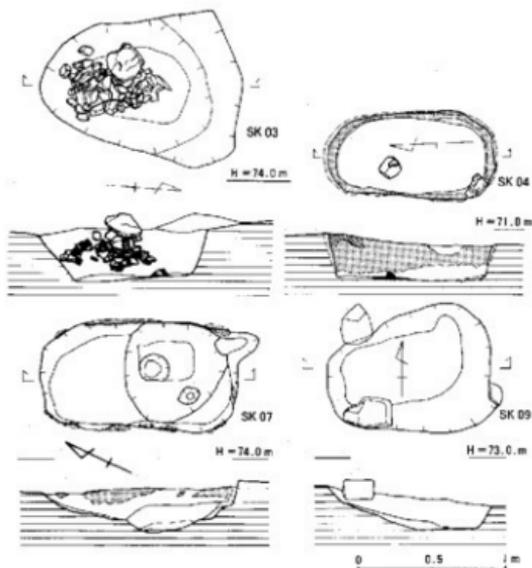


Fig. 9 調査区出土土壌実測図 (1/40)

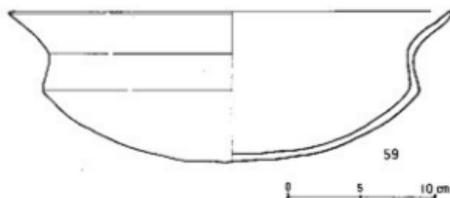


Fig. 10 SK09 土壌出土遺物実測図 (1/4)

2号墳は、1号墳に次いで築造されたと考えられるが、出土遺物は須恵II~IIIbに属し時期的にはさほど隔たりはないものと考えられる。

2 土 壌

古墳の周辺や基底面から7基の土壌が出土した。その内、6基はいわゆる焼壁土壌で、楕円形を呈するものが多く、周壁は赤く焼けている。墳内には黒色の灰や炭が詰まり、墳底は全く焼けていない。時期は出土遺物が乏しいためはつきりしないが、古墳時代から中世以降まで考えられる。1号墳の基底面から出土した土壌は古墳時代に属する。Fig.9は出土土壌の代表例を図示した。SK09は2号墳の基底面で検出した縄文時代の土壌である。これは焼壁土壌ではない。Fig.10は、SK09から出土した黒色磨研の浅鉢である。晩期II式か。



(1) 野方古墳群D群出土状況(北から)



(2) 1号墳墳丘・外護列石出土状況(東から)



(3) 1号墳玄門部(北から)



(4) 1号墳奥壁(南から)



(5) 1号墳墳丘土層堆積状況(西側)(南から)



(6) 1号墳墳丘土層堆積状況(東側)(南から)



(7) 2号墳墳丘・外護列石出土状況(南から)



(8) 2号墳石室出土状況(南から)



(9) 2号墳玄門部(北から)



(10) 2号墳奥壁(南から)

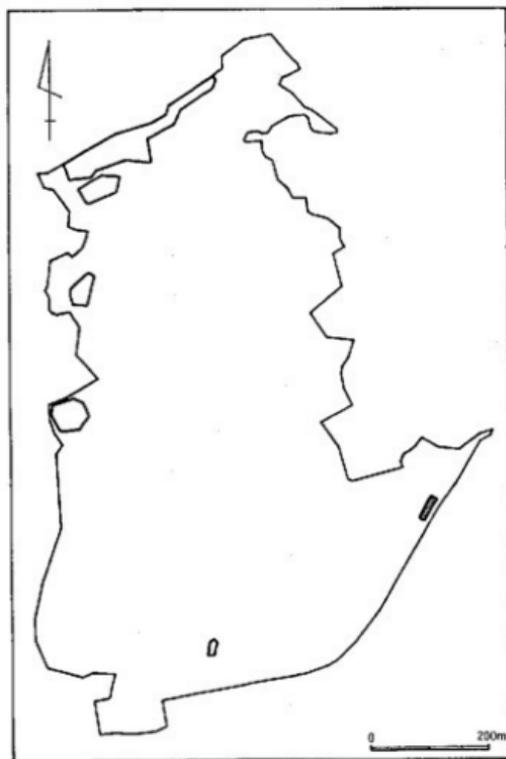


(11) 2号墳羨道西側墳丘出土供献土器(南から)



(12) 野方古墳群D群調査状況(東から)

6. 大音遺跡 (第6地点)



遺跡調査番号	8632		遺跡略号	OOT	
調査地地籍	西区大字野方字大音890-61		分布地区番号	105	
開発面積	60ha	調査対象面積	730m ²	調査実施面積	730m ²
調査期間	1987年8月6日～1987年8月30日		事前審査番号	58-1-170	

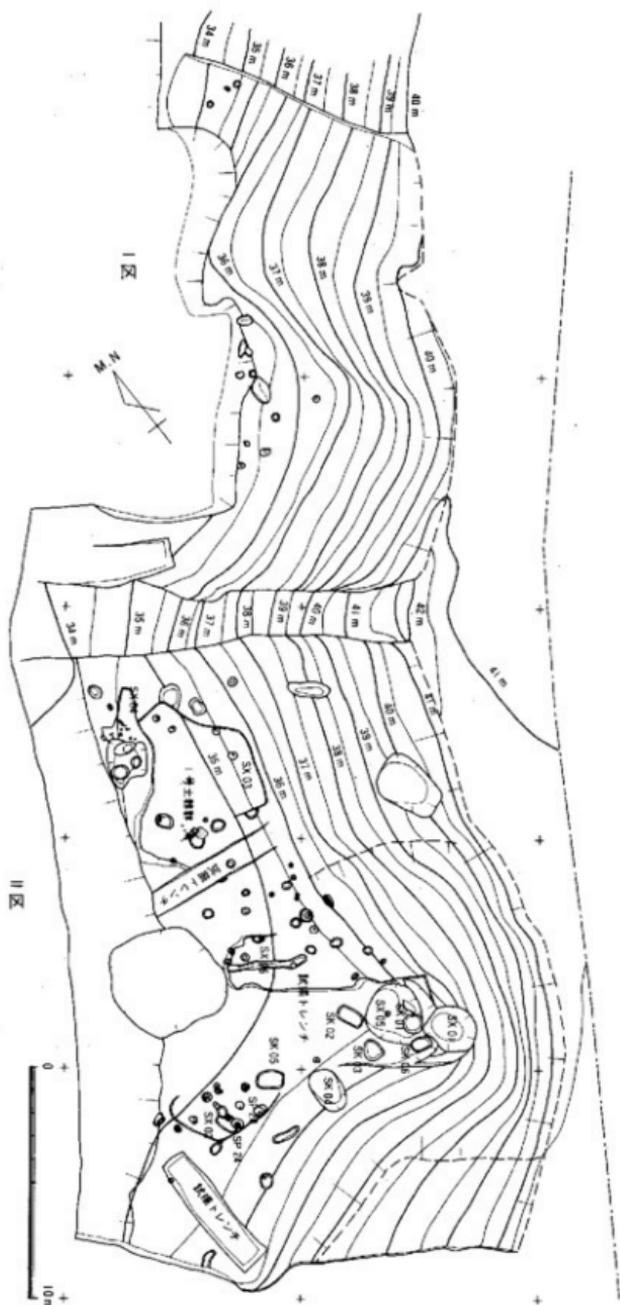


Fig. 1 第6地点透視配置図 (1/250) (調査区基準線は国土座標系より $31^{\circ}44'26''$ 東偏している)

6 大音遺跡

第6地点(野方大音遺跡第1次調査)

(1) 立地と調査の概要

第6地点の野方大音遺跡は、生松台区画整理事業地内の南東部、地番が西区大字野方890-61地内にある。ちょうど生の松原団地との境界地の斜面にあり、斜面の上部は生の松原団地造成時、斜面から谷部にかけては、ゴルフ場造成や土取工事によって、大規模な破壊を受けている。

第6地点は工事に伴う排水管建設の為に、他地点より先行して昭和61年8月6日から同月30日迄調査を行なった。調査実施面積は、730㎡である。調査は試掘成果を基に中央に土層ベルトを設定し、その北をI区、南をII区とし、調査を行なった。遺構が立地する斜面は標高35~42mの比高差7mを測るが、遺構はその斜面を人工的に削り込んだ凸部を中心とする平坦面であり、標高35~36mを測る。基本層序は中央土層ベルトで、上面から盛土(40~150cm)、旧表土(25~50cm)、淡灰褐色土~淡暗褐色土(20~40cm)、淡黒灰色土(10~60cm)で、遺構面は2次堆積の黄褐色砂混土である。遺構はII区を中心に検出した。I区はピット数個のみ。II区では焼土坑4基を含む土坑6基、不明土坑5基、溝1条、土器群1ヶ所、ピットなどである。遺物は弥生式土器片、古墳時代土師器・須恵器・鉄滓や鞆羽口、砥石などが出土した。遺構のおおよその時期は出土須恵器などから、古墳時代後期末頃の6世紀末から7世紀代であろう。

(2) 遺構と遺物

1号土器群(Fig.2-3, PL.17) SX03南側で検出した。土器片の分布範囲は東西方向に長辺1.35m、幅0.55mを測り、南側には直径50cmの範囲で焼土ブロック集中部がある。厚さは最大で8cmを測る。ここからは木目直交の叩きを持った土師器の壘や甔・高坏・須恵器の高坏などがややまとまって出土した。1は須恵器の高坏脚部片、2~5は土師器で2・3は壘。3は体外面に木目直交の斜め叩きを施す。4・5は甔で5の底部には半円形の蒸気孔が2ヶ所入る。

土坑(SK)

SK01(Fig.2, PL.17) 平面形は不整円形、規模は0.9×0.8m、深さ42cmを測る。床面は北側が一段と低く、壁の北西と南西側一部以外は焼けており、床面も南半分が焼けていた。埋土は暗褐色土を主体とし炭化物、焼土ブロックを含む。遺物は土師器細片6点出土。

SK02(Fig.2, PL.17) 平面形は隅丸長方形、主軸を北西方向に取り、規模は1.22×0.64m、深さ20cmを測る。床面中央は一段深くなる。東西両壁の一部、床面の北側の一部が焼ける。埋土は上部が黄褐色土、下部が黒褐色灰混土である。遺物の出土はない。

SK03(Fig.2, PL.17) 平面形は隅丸三角形を呈し、規模は0.84×0.81m、深さ26cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、直径15cm、深さ7cmの浅いピットが1つある。西壁が部分的に焼けていた。埋土は上層が黒色土、下層が暗灰褐色土で炭化物を混える。出土遺物は土師器片が2

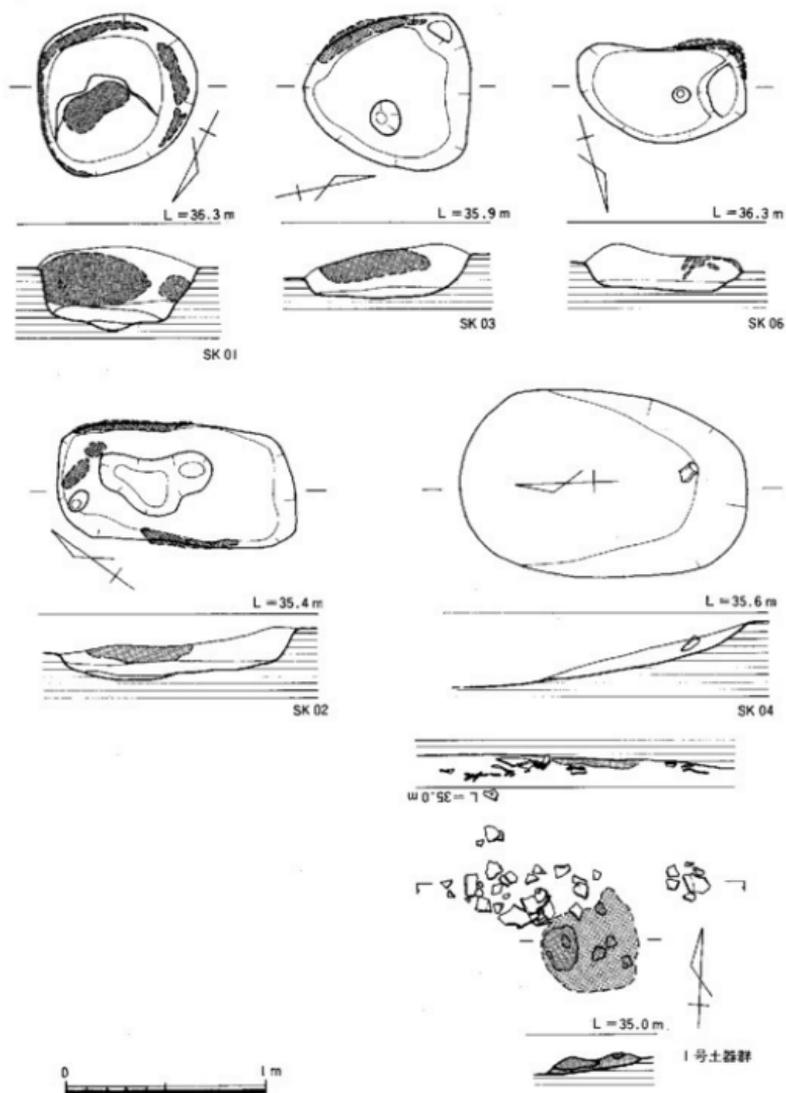


Fig 2 SK01~04・06・1号土器群 (1/30) ※方位は磁北

点、須恵のIV期頃と思われる坏蓋の細片が1点出土した。

SK04 (Fig.2) 平面形が楕円形を呈す土坑で、主軸を略北に取る。規模は1.96×1.32m、深さ10cmを測り、床面は北側に向って緩やかに傾斜する。埋土は黄褐色粘質土。遺物は土師器の壺片44点、須恵器の体部片など3点出土した。

SK05 (Fig.3) 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は1.16×0.88m、深さ5cmを測り、全体に浅い。埋土は淡黄褐色土である。遺物は土師器片が少し出土した。7は土師器の高坏の脚部片で、脚端径は7.2cmを測る。

SK06 (Fig.2) SX06と切り合い、SK01より古い。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は0.85×0.5m、深さは22cmを測る。床面は北側がやや深くなる。南壁が赤く焼けていた。北側床面には炭化物が散布する。埋土は黄褐色土で、炭化物を混入する。出土遺物はない。

不明土坑 (SX)

SX01 (Fig.3, PL.17) 斜面を削り込んだ先端部にあり、平面形が円形を呈し、規模は2.25×1.95m、深さ27cmを測る。床面は北へ傾斜する。埋土は褐色砂混土。遺物は土師器片少々の外、鉄滓2点出土。7は土師器の壺形土器でSX04のものと接合した。

SX02 平面形が不定形を呈し、規模が4.8×2.2m以上、深さは5cmを測り浅い。埋土は黒灰色土である。床面には11個のピットがあり、長さ30cm、厚さ6cmの板状の石が1つあった。出土遺物は弥生式土器や古墳時代の土師器、須恵器、鉄滓8点などがある。

SX03 (Fig.3) 平面形が不定形状の浅い落ち込みで、規模は6×4m以上を測る。床面は傾斜を持ち、埋土は黒褐色から暗褐色土である。出土遺物は古墳時代の土師器、須恵器片などがややまとまって出土した。8は土師器皿で器形的に見て中世後半代のものと思われる。底部は糸切りか。9は弥生時代後期中頃の壺形土器の口縁部片と思われる。

SX04 (Fig.3) 調査区北側で検出した不定形状の浅い土坑で、規模は長さ2.2m以上、最大幅2.2mを測る。埋土は黄灰褐色砂混土である。南半床面から古墳時代の土師器や須恵器片が出土した。10は須恵器の坏蓋で、V期のものである。

SX05 (Fig.3) SX01と相接し、平面形が不整円形を呈し、中央がやや深くなる。規模は2.55×2.45m、深さは中央で40cm位である。中央に直径20cm、深さ9cmの小ピットがある。埋土は上層が灰褐色粘質土、下層が黒灰褐色粘質土である。出土遺物は古墳時代の土師器壺・壺・須恵器の坏片などが若干出土した。11は上層より出土の須恵器の坏身でIV a 期位であろう。

ピット・遺構面出土遺物 (Fig.3) 12はSP20 出土。須恵器の小型壺の体部片で、焼成はややあまい。13はSP24 出土で、土師器の高坏脚部片。14は鞆羽口片で、II区表採。15は小型の手持砥石で砂岩製。II区遺構面出土。

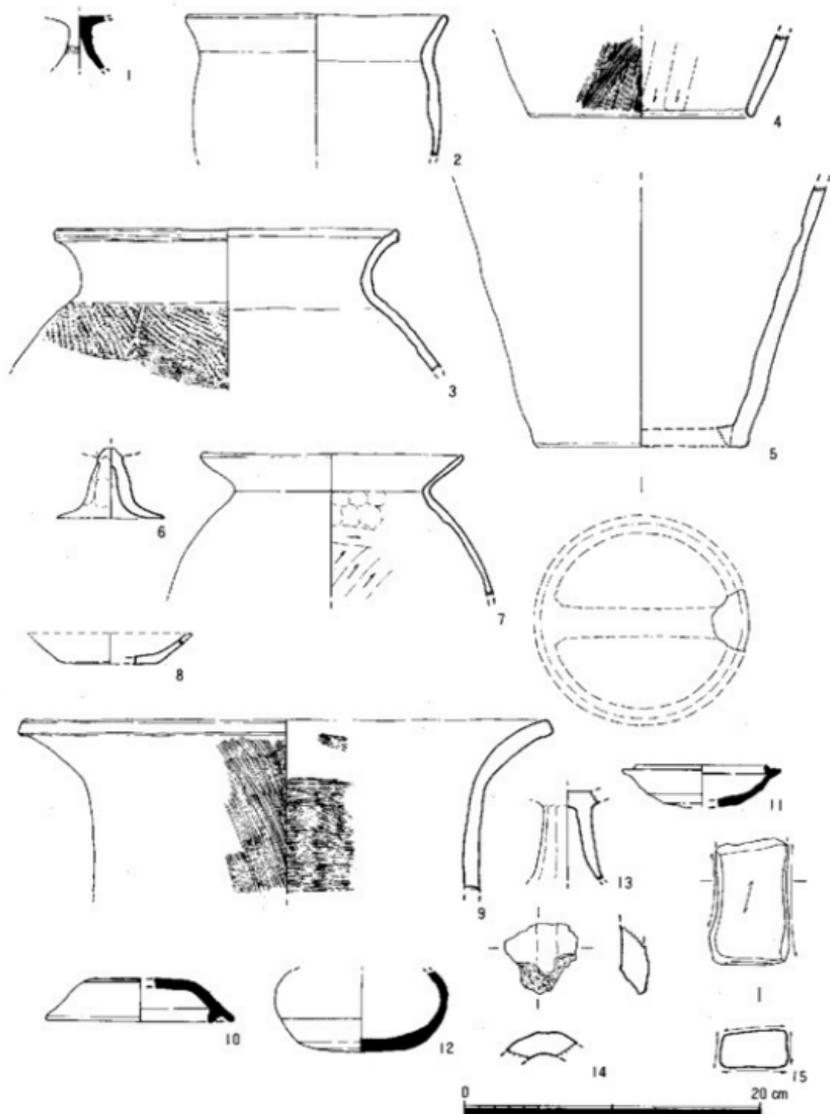


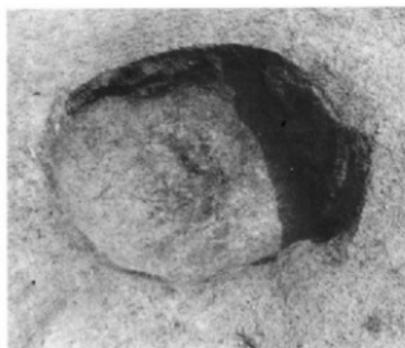
Fig. 3 第6地点出土遺物(1/4) (1~5はI号土器群、6はSK05、7はSX01、8~9はSX03、10はSX04、11はSX05、12~15はビット・遺構面出土)



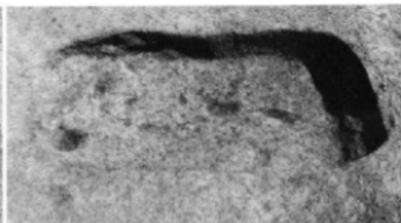
(1) 調査区全景 (西から)



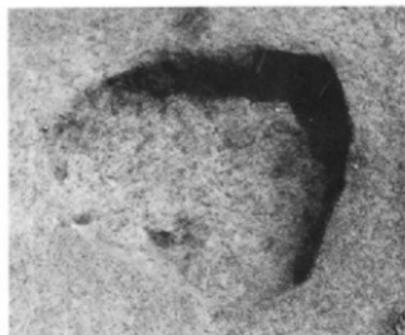
(2) 遺構検出状況 (西から)



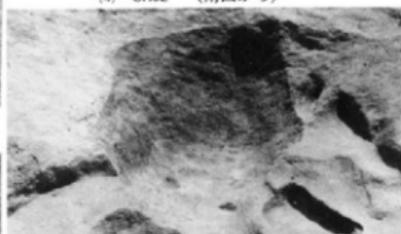
(3) SK01 (西から)



(4) SK02 (南西から)



(5) SK03 (東から)



(6) SX01 (西から)



(7) 土器群出土状況 (南から)

生 松 台

福岡市埋蔵文化財調査報告書第226集

1990年(平成2年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 有限会社 松古堂印刷

